豊島型五輪塔の搬出と造立背景に関する歴史的検討

松 田 朝 由

はじめに

多くが現代墓地の中にたたずむ近世五輪塔は、その存在がありふれていること、現在も多くが各家で供養の対象となっていることから現在までに歴史的な評価は十分にされてこなかった。また、文化財としての認識も希少性を有する中世五輪塔と比較してほとんど省みられていないのが現状である。本稿ではこうした近世五輪塔の歴史的評価を行ない、歴史資料としての重要性を指摘するのが目的であるが、特に近世初頭に県内でさかんに造立された豊島石の五輪塔（豊島型五輪塔）に焦点を当て、造立における当時の人々の意図と生産・流通の問題を通時的な側面から検討する。

１．豊島型五輪塔とは

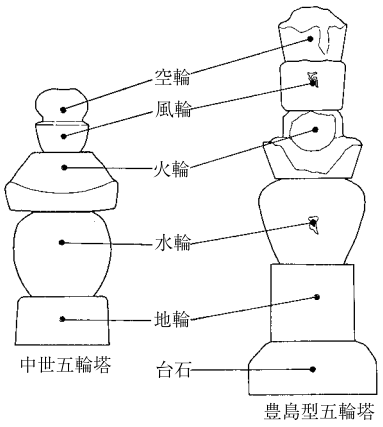


図１　部位名称

豊島型五輪塔[1]とは豊島で造られた独特な形状を有する五輪塔であり、香川、岡山の両県に分布が認められる。その特徴は①中世五輪塔と比較して大型である、②宝篋印塔の馬耳状突起に似た突起をもつ特異な火輪を呈する、③風輪と空輪が別石からなる、④少数ではあるが正面に方形状の孔を穿った地輪がある、⑤地輪の下に台石をおく、⑥塔内部を空洞にする、⑦豊島石を用いる、等である。特に⑦は豊島で採石される塩基性凝灰角礫岩で黒い礫を多く含むことから外見はアスファルトのように見える。材質的特質としては火に強く、炊事場のクドやカンテキとしてしばしば用いられている一方、軟質で風雨に弱いことから現存する多くは保存状態が悪い。従って、五輪塔においておそらく地輪に刻されていたであろう戒名、年号も大多数は判読できず、そのことが豊島型五輪塔の位置付けを不明瞭にしてきた。先学の当五輪塔に関する論考はほとんどなく、数少ない論考もほとんどが中世五輪塔との関わりにおいて若干触れられている程度である。国遠一夫による大川郡を中心とした豊島石の五輪塔の紹介（国遠1981）や、森章による火山石との関わりの指摘（森1996）、川瀬潔によるキリシタン遺物との関わりの指摘（川瀬1995）があるが、石造物において鎌倉時代から用いられた火山石（酸性凝灰角礫岩）から豊島石への石材の変化の指摘が注目される。ただ、その時期としては国遠が天正期に、森が室町期後半に画期を設定しており、両者ともに中世後半に画期を求めるという点で共通しているが、具体的なデータで示していないのが現状である。おそらく15世紀末に没した長尾町極楽寺住職円瑜の五輪塔が豊島石であることが裏付けにあるものと思われるが、当期に画期を求めることには問題がある。誤謬は豊島石の五輪塔を全て同じに取り扱っている点にあり、豊島型五輪塔とそれとは異なる豊島石製の五輪塔を区分する必要がある。つまりは豊島石の五輪塔の変遷を確認する必要があるが、上述したように刻字内容はほとんどが明らかとなっておらず、前提作業として編年が不可欠である。そこで本稿ではまず豊島型五輪塔の編年作業から試みる。

２．　編年

編年に際して、その方法と注意点を最初に確認する。方法は豊島型五輪塔の観察から、形態変化を明瞭に示す部位として火輪と空輪に注目した。両者の形態分類とその組成を基準として組列を行ない、年号の確認される五輪塔から年代を当てはめ時期区分を行なう。編年に際し注意する点として、一つは１基の五輪塔に認められる各輪の組合せが本来のものであるかどうかである。ばらばらになって混ざった別個体同士を後に一つに組立てたり、何らかのアクシデントにより欠損した五輪塔の一部を後に修正することから生じるノイズが考えられる。組合せ部の状況、現状での保存状態から明らかなものは修正できるが、そうでないものについては分析の整合性の中で解釈する他はない。もう一つは年号の刻字に関して、その年号は必ずしも五輪塔の造立年ではなく、おそらく多くが被供養者の没年と思われる。従って、造立年との時間差からノイズが想定されるが、これも分析の整合性の中で解釈する他はない。ただ一点目の問題とともに具体的な解釈内容は文中で明示し、将来の編年作業における補強、修正に生かせるようにしたい。

⑴　火輪の分類

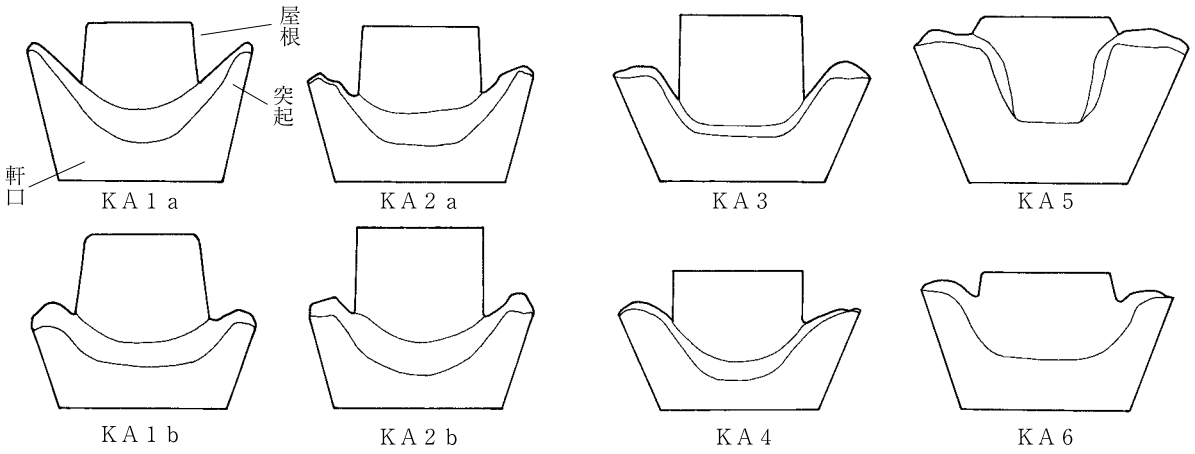


図２　火輪の分類

火輪はＫＡ１からＫＡ６に分類した。以下に形態的特徴を示す。

①ＫＡ１

下方に向かって「ハの字」状に直線的に広がる屋根で、軒口との間には段を有する。４隅の軒隅からは突起が認められるが、その形状として先端に向かって細くなるタイプをａ類、同じ太さで先端に至るタイプをｂ類に細分する。一般にａ類の突起はｂ類と比較して長いが、ａ類の破損したものが現状でｂ類に分類される可能性も否定できず、暫定的な細分である。内部の状況は確認例の少なさから断定はできないが、現状で空洞はなく中実である。

②ＫＡ２

箱形の屋根で、軒口との間には段を有する。総高に占める屋根部の高さの割合が大きい。突起はＫＡ１と同じで先端に向かって細くなるタイプをａ類、同じ太さで先端に至るものをｂ類に細分する。内部は確認したものですべて中実であり、多くはほぞ穴を上面にもつ。また、一部下面にほぞをもつ例も認められる。

③ＫＡ３

先端にかけて同じ太さの長い突起をもつタイプを基準とする。屋根は箱型で、軒口との間に段を有する。内部は断定できないが、確認したものは中実が大多数であるが空洞もわずかに確認される。

④ＫＡ４

突起の内側がカーブを描きながら先端に至るのが特徴で、近世宝篋印塔の馬耳状突起に似ている。突起の長さはＫＡ３とほぼ同じである。屋根の形態は箱形で、軒口との間には段を有する。屋根は箱型のものが多いが、一部下方に「ハの字」状に直線的に広がったものも確認できる。内部は中実が多いが、空洞もわずかに確認できる。

⑤ＫＡ５

箱型の屋根と下方に「ハの字」状に直線的に広がった屋根の両方がある。突起は先端近くまで屋根に付着したものが多く、軒口は角度をもって突出部に至っている。また、突起の形態として、ＫＡ４のように内側がカーブを描きながら先端に至るタイプと、先端まで同じ太さで先端を水平に切り取っているタイプがある。内部は中実も認められるものの空洞が多いのが特徴として指摘できる。

⑥ＫＡ６

屋根は下方に短く直線的或いは勾配をもちながら広がり、軒口と尾根の間の段は認められない。軒隅は屋根側がやや膨らみをもっており、豊島型の特徴を示す。軒口の傾斜の弱いものと強いものの２者が認められる。内部は空洞と中実が確認される。

⑵　空輪の分類

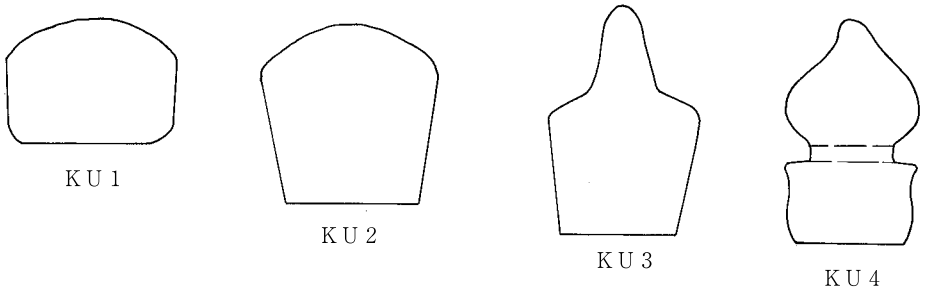


図３　空輪の分類

空輪はＫＵ１からＫＵ４に分類した。以下に形態的特徴を示す。

①ＫＵ１

縦高が横幅よりも短いタイプ。上面はマウンド状を呈し、わずかな突出を有するものもある。側面の立ち上がりは直線的に立ち上がるタイプが多数を占めるが、中には丸みをもちながら曲線的に立ち上がるタイプもある。

②ＫＵ２

総高が横幅よりも長いタイプ。上面はマウンド状を呈するタイプ、わずかな突起を有するタイプ、太く短い突起を有するタイプがある。側面は大多数が直線的に立ち上がるが、一部に曲線を描きながら丸みを有するタイプがある。

③ＫＵ３

総高が横幅よりも長いのはＫＵ２と共通するが、上面に太く高い突起が認められるのが特徴である。突起の高さは様々であるが、中には突起の高さが突起を除いた空輪部分の高さよりも長いものがある。

④ ＫＵ４

風輪と１石からなるのが特徴である。風輪の上端は外反し、空輪との境に高さ１㎝から２㎝程の間帯をもつ。空輪は側面が曲線を描きながら立ち上がり、上面は突起を有する。この形態は豊島型五輪塔に特異な形態ではなく、花崗岩や砂岩製の五輪塔にも多く確認される形態である。

⑶ 火輪と空輪の組成

	KA1	KA2	KA3	KA4	KA5	KA6
KU1	3	27	10	8	2	0
KU2	5	7	19	18	8	0
KU3	0	2	2	8	23	0
KU4	0	0	0	0	0	13

表１　火輪と空輪の構成

火輪と空輪におけるそれぞれの分類に対して組成とその組列を試みる。組成として、ＫＡ１は事例が少ないものの、ＫＵ１或いはＫＵ２と組み合わさり、ＫＵ３或いはＫＵ４は認められない。ＫＡ２は圧倒的にＫＵ１との組成が多い。ＫＡ３はＫＵ２との組成が主体であるが、ＫＵ１も確認される。ＫＡ４もＫＡ３とほぼ同様の傾向を示しているが、わずかにＫＵ３が増加している。ＫＡ５はＫＵ３が圧倒的に多く、ＫＵ１やＫＵ２は少ない。ＫＡ６はＫＵ４の組成のみである。ＫＡ６以外の事例ではＫＵ４との組成は認められず、ＫＡ６は他例とは組成において系統の断絶が認められる。

以上を組列するとＫＡ１、ＫＡ２とＫＵ１の組成からＫＡ３或いはＫＡ４とＫＵ２との組成に展開し、続いてＫＡ５とＫＵ３との組成に至ることが想定される。そして、ＫＡ６とＫＵ４の組成はその次の段階に前組列とは別系統として位置付けることができる。

⑷ 絶対年代の検討

前項に明らかとなった組成に対してそれぞれの形態変化の方向性と実年代を検討する。検討は紀年銘や年号の推定可能な例について個々にその組成を確認する。以下では具体事例を古いものから列挙する。なお、五輪塔に年号の刻されているものについてはその年号を記し「銘」と表記し、年号は確認できないが被葬者が特定されるものについてはその没年から「没」と表記する。

① 高原次利夫人墓（直島町） 1614年没　図４－１

直島の高原家墓地にある。火輪はＫＡ２ｂ、空輪は側面に曲線をもつＫＵ１である。

② 中村宗卜墓（八栗町） 1615年没　図４－２

八栗町白羽神社の南東にある。火輪はＫＡ２、空輪はＫＵ１である。

③ 宝蔵院極楽寺（長尾町） 1628年銘 図４－３

火輪はＫＡ１、空輪はＫＵ１である。

④ 宝蔵院極楽寺栄道墓（長尾町） 1630年銘 図４－４

残存しているのは地輪のみで火輪、空輪の形態は不明である。

⑤ 花崎家（白鳥町） 1631年銘　図４－５

花崎家の屋敷跡にある。火輪はＫＡ２、空輪は他に確認できない形態である。

⑥ 浄土寺墓地２（三木町） 1631年銘　図４－６

浄土寺墓地に２基確認される。銘の刻字が認められる地輪にはＫＡ３の火輪と風輪が組み合わさっているが、隣接しているＫＡ２の火輪との入れ替わりも考えられる。

⑦ 與田寺五輪塔１（大内町） 1637年銘 図４－７

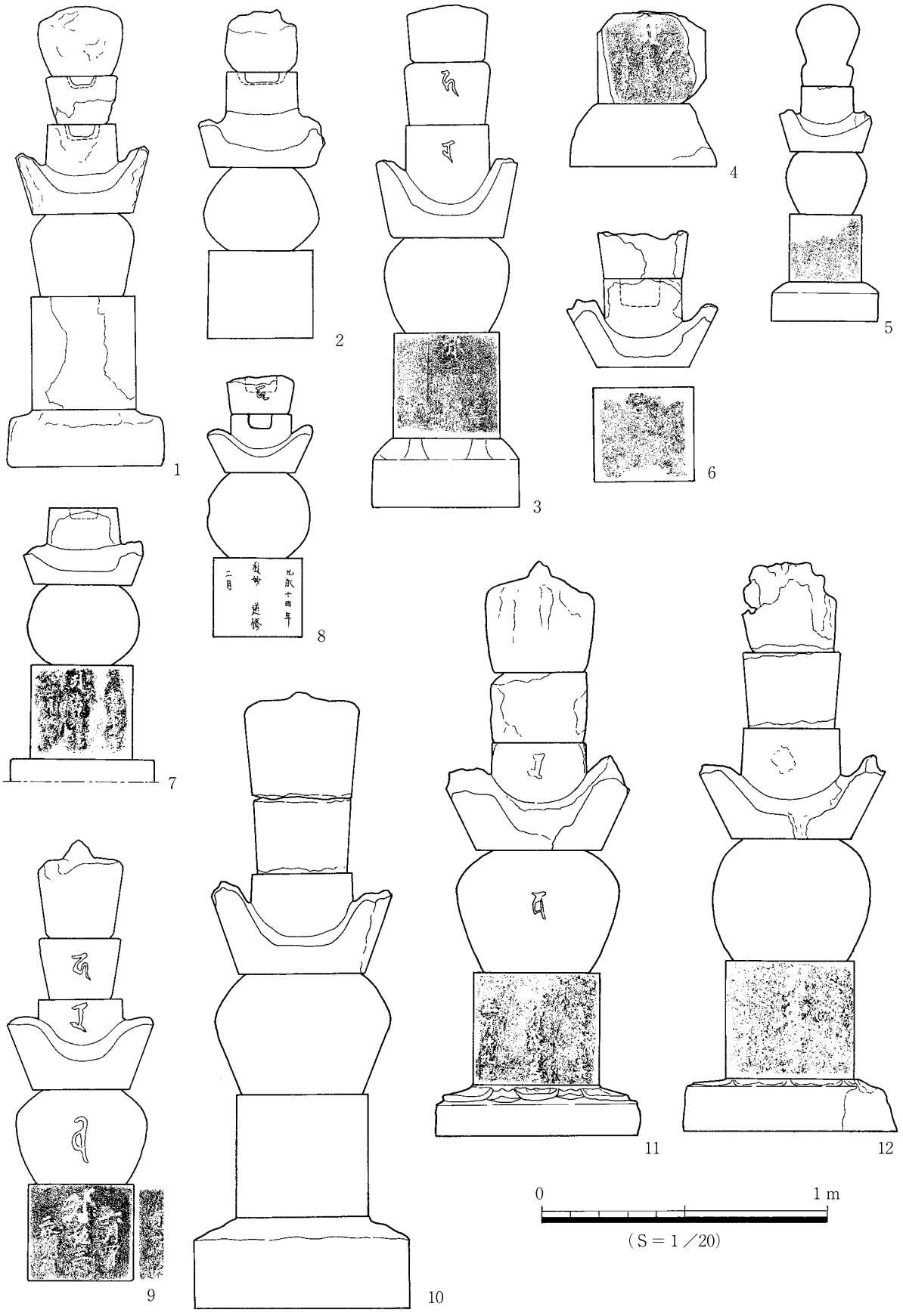


図４　豊島型五輪塔(1)

與田寺墓地内にある。火輪はＫＡ２、空輪は欠失している。

⑧　與田寺五輪塔３（大内町）1637年銘　図４－８

與田寺墓地内にある。火輪はＫＡ４、空輪は欠失している。

⑨　神内家近世墓地１（高松市）1643年銘 図４－９

神内家中世墓地から200m程離れた位置に近世墓地があり、その最奥部にある。火輪はＫＡ４、空輪は突起が認められるが、それ程発達していないことからＫＵ２である。

⑩　敬光院増宥墓（直島町）1644年没 図４－10

法蓮山にある。火輪はＫＡ３、空輪はＫＵ２である。

⑪　宮武氏梅月宋保禅定門墓（坂出市）1651年銘 図４－11

墓地の奥に豊島型五輪塔が４基並列しているが、その内の１基である。火輪はＫＡ３、空輪はＫＵ２である。

⑫　宮武氏五輪塔（坂出市）1652年銘 図４－12

火輪はＫＡ３、空輪はＫＵ２である。

⑬　宝蔵院極楽寺宗栄墓（長尾町）1657年没　図５－１

空輪は欠失、火輪は突起が欠損していて不明である。火輪内部には空洞が認められる。

⑭　光蓮寺五輪塔（志度町）明暦年間（1655～1658年）銘 図５－２

志度町光蓮寺墓地にある。火輪はＫＡ３、空輪はＫＵ２である。

⑮　真鍋家墓地（津田町）明暦年間（1655～1658年）銘 図５－７

浄土寺墓地内に所在する。火輪はＫＡ３であるが、突起の形態からはＫＡ４の要素も認められる。内部は空洞である。空輪は欠失している。

⑯　最明寺墓地五輪塔（塩江町）1663年銘　図５－３

正面に向かって右側面に年号が確認される。火輪はＫＡ４、空輪はＫＵ３である。

⑰　眼妙寺墓地五輪塔（土庄町豊島）1664年銘　図５－４

火輪は豊島型五輪塔とは大きく異なる形態である。空輪はＫＵ３である。

⑱　宮武氏照月宗清士（坂出市）1668年銘　図５－５

豊島型五輪塔ではあるが、花崗岩製である。火輪はＫＡ５、空輪はＫＵ２である。

⑲　與田寺五輪塔３（大内町）寛文年間（1661～1674）　図５－６

與田寺墓地に寛永14年銘の五輪塔と並立している。法量、形態は寛永年間の五輪塔と同じであることから、追刻の可能性がある。分類は火輪がＫＡ２、空輪は欠失している。

⑳　国祐寺五輪塔（豊浜町）元禄年間（1688～1704）図５－８

水輪は欠損している。火輪は突起に至る軒口上端がＫＡ４の要素を有するが、突起の形態からＫＡ５と判断した。空輪は突起を欠損するものの、ＫＵ３が推測される。

㉑　矢田助右衛門墓（志度町）1700 年没　図５－９・10，図６－１

現在３基の豊島型五輪塔が並んで造立されている。どの五輪塔が助右衛門の墓であるかわからないものの、火輪は２基がＫＡ４で１基は不明、空輪は３基ともにＫＵ２である。

㉒　日妙寺花崗岩五輪塔（高松市）＝参考　1713年銘　図６－２

岩種が花崗岩であり、形態的にも豊島型五輪塔とは若干異なるものの、おおよその属性は豊島型五輪塔の条件を充たしているために取り上げた。火輪はＫＡ５、空輪は風輪と１石からなり、側面

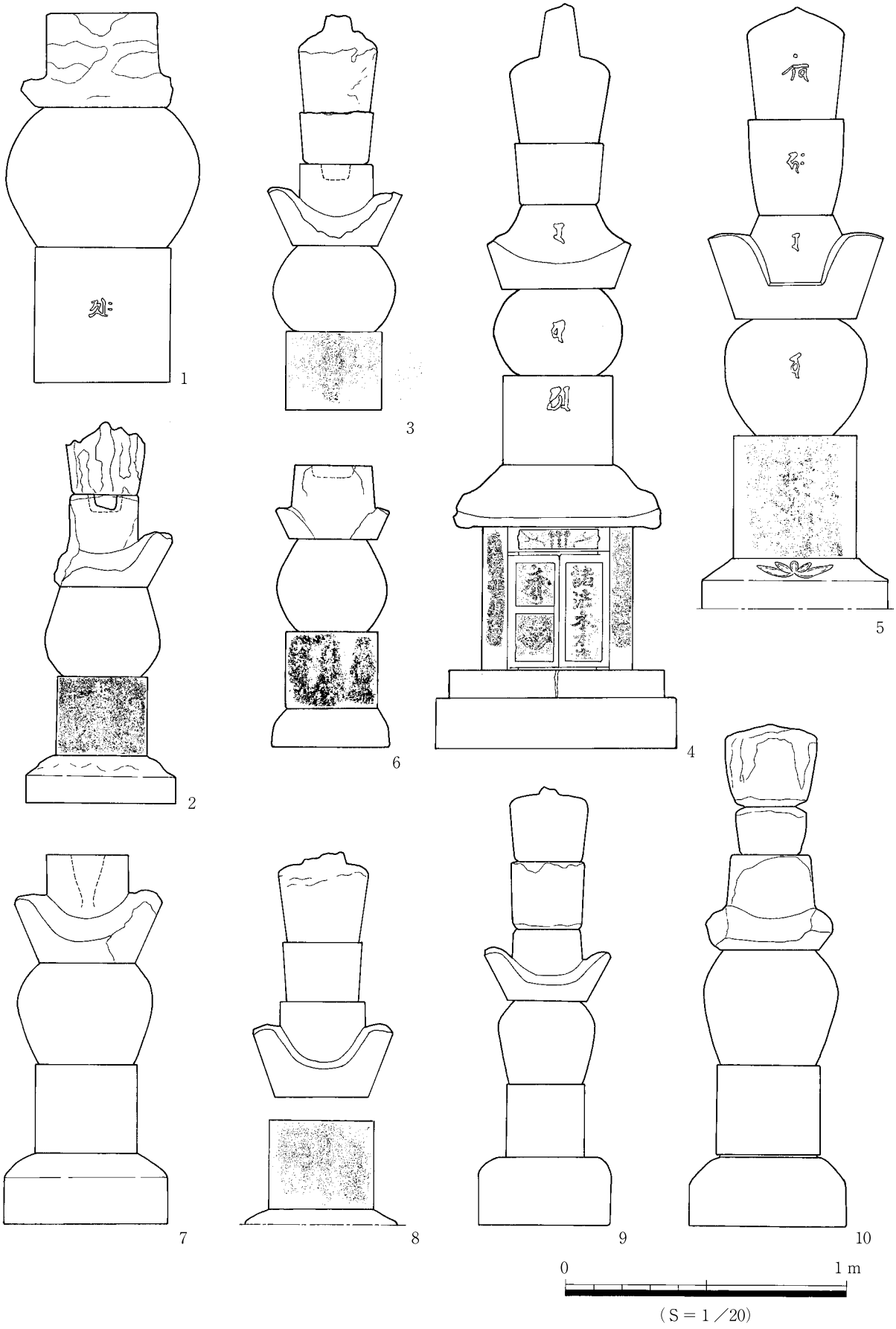


図５　豊島型五輪塔(2)

上部から上端にかけて丸みを有する。分類はＫＵ２である。

㉓　眼妙寺墓地五輪塔（土庄町豊島）1723年銘　図６－３

火輪は豊島型とは大きく異なる形態であり⑰に類似する。豊島にこの火輪がしばしば確認されるが、豊島以外では多度津町多聞院墓地内に同様の豊島石の火輪があるが少数である。空輪も独特の形態をなし、類例は確認していない。

㉔　十輪寺広田家墓地（土庄町豊島）1736年銘（墓標）図６－４・５

五輪塔自体には刻銘はないが、地輪内に納められている小型の光背形墓標に年号の刻字があることから、標準資料として取り上げた。五輪塔の分類は火輪がＫＡ５、空輪は保存状態が悪く判断できない。なお、光背形墓標にも豊島型五輪塔が彫られており、火輪はＫＡ４からＫＡ５、空輪はＫＵ３である。

㉕　東昭寺墓地五輪塔１（大内町）延享年間（1744～1748年）銘 図６－６

空輪は風輪と１石からなる。分類は火輪がＫＡ５、空輪はＫＵ２である。

㉖　東昭寺墓地五輪塔２（大内町）寛延年間（1748～1751年）銘　図６－７

空輪は風輪と１石からなる。分類は火輪がＫＡ５、空輪はＫＵ２である。

㉗　東昭寺墓地五輪塔３（大内町）宝暦年間（1751～1764年）銘 図６－８

空輪は火輪と１石からなる。分類は火輪がＫＡ５、空輪はＫＵ２である。

㉘　眼妙寺墓地五輪塔（土庄町豊島）宝暦年間（1751～1764年）銘　図６－９

火輪はＫＡ６である。空輪は風輪と１石からなり、形態も豊島型五輪塔から逸脱したものとなっている。眼妙寺内には数例この手の空風輪が確認される。おそらく本報での分類のＫＵ４の前段階に位置する形態である。

㉙　十輪寺広田家墓地（土庄町豊島）1768年銘　図６－10

火輪はＫＡ５、空輪は突起部が著しく発達したＫＵ３である。

㉚　眼妙寺墓地五輪塔（土庄町豊島）天明年間（1781～1789年）銘　図６－11

火輪はＫＡ６であるが軒隅部の屋根に認められる膨らみは強くない。ただ、軒隅が上方に発達しており、先端は火輪上面まで達していることから豊島型としての特質をもっていると思われる。空輪は風輪と１石からなりＫＵ４である。

㉛　眼妙寺墓地五輪塔（土庄町豊島）1797年銘　図６－12

火輪は突起部が発達し、火輪上面にまで及んでいる。分類はＫＡ５で内部は空洞である。空輪は欠失している。

㉜　明光寺墓地五輪塔（土庄町豊島）1803年銘　図６－16

火輪はＫＡ６で中実、空輪はＫＵ４である。

㉝　明光寺墓地五輪塔（土庄町豊島）1810年銘　図６－15

火輪は突起部のみに屋根との境の段（面）が確認されＫＵ５であるが、プロポーションとしてはＫＵ６に近い。空輪はＫＵ４である。

㉞　眼妙寺墓地五輪塔（土庄町豊島）1849年銘　図６－13

火輪は豊島型とは異なる。空輪は風輪が欠損しているが間帯が認められることからＫＵ４が推測される。

㉟　明光寺墓地五輪塔（土庄町豊島）1851年銘　図６－14

火輪はＫＡ６である。空輪はＫＵ４であるが間帯は認められない。

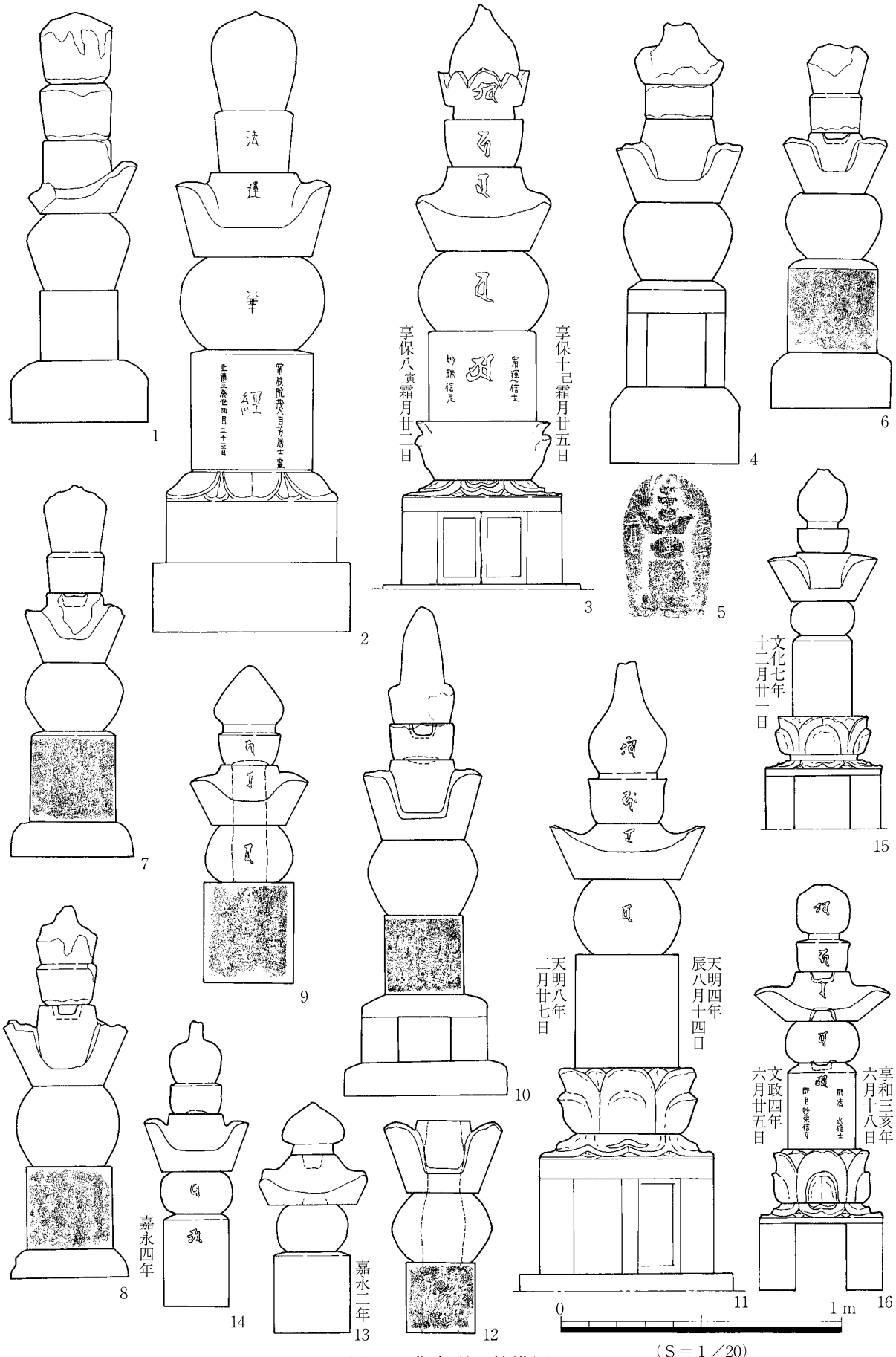

享保八寅霜月廿二日
享保十己霜月廿五日
文化七年
十二月廿一日
天明八年
二月廿七日
天明四年
辰八月十四日
嘉永四年
嘉永二年
文政四年
六月廿五日
享和三亥年
六月十八日
0
1 m
（S＝1／20）

図６　豊島型五輪塔(3)

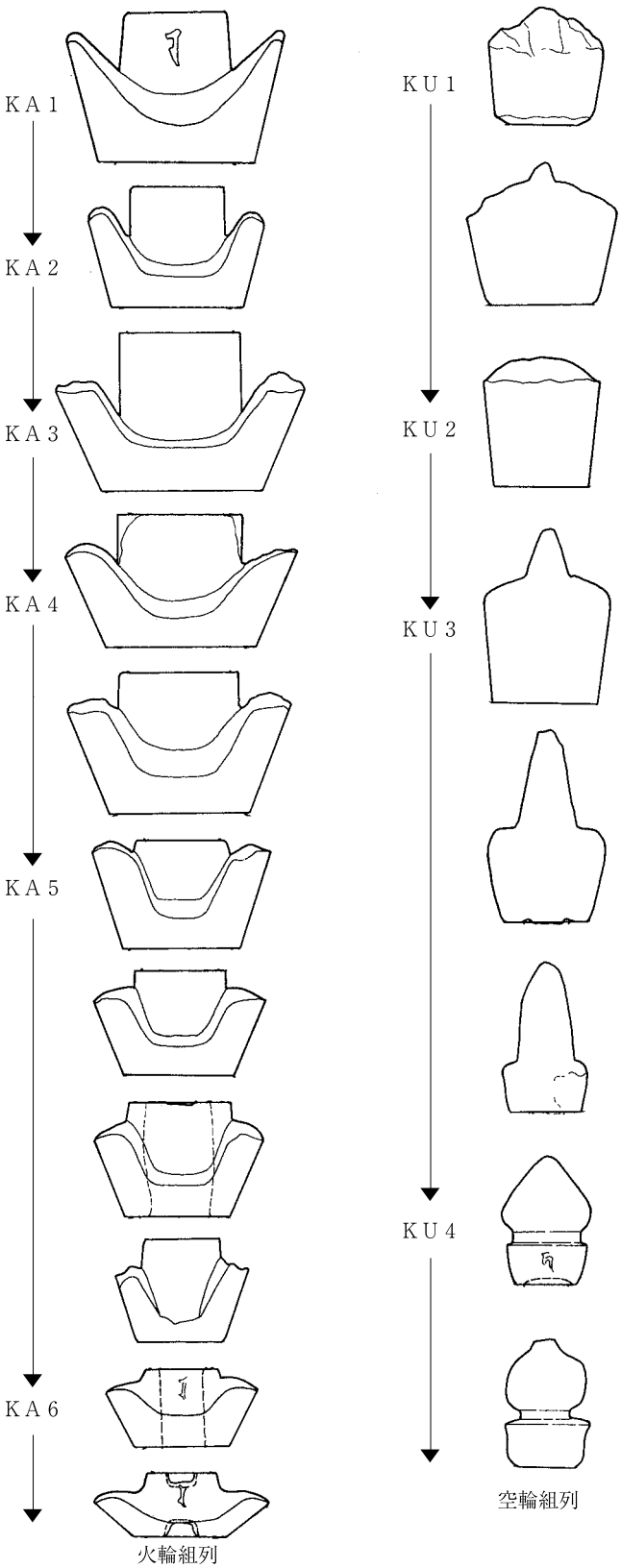


図７　型式組列（火輪・空輪）

以上の結果から絶対年代を想定し、形態変遷を確認する。

〈火輪〉

火輪は、ＫＡ２がまず1610年代から1630年代に確認され、続いてＫＡ３が1640年代から1650年代に確認される。ＫＡ４は年号の判明している事例が少なく判然としないが、1630年代から1640年代に２基、660年代に１基、1700年代に１基が確認される。ＫＡ５は1660年代に初出し、主体となるのは18世紀である。確実なもので最も新しいものは1790年代に認められる。ＫＡ６は18世紀中頃から確認され、19世紀中頃まで認められる。

次に形態変遷の組列を検討する。まず、形態からＫＡ１はＫＡ２の前段階になると思われるが本稿の資料からは時期差は確認できない。17世紀初頭に出現するＫＡ２から17世紀中頃ＫＡ３への変遷は突起部において先端に向かって細くなるものから、同じ太さで先端に至るものへの変化が認められ、突起の長さが発達する傾向がある。また、屋根の高さと軒口の高さの割合は、屋根の高さの割合が減少する傾向にある。一方、ＫＡ４は紀年銘資料からＫＡ３と同時期に出現が確認されるが、突起の内側がカーブを描きながら先端に達するといった特徴は続くＫＡ５にも認められることから、形態変遷から言えばＫＡ３の後に位置付けられる。また、ＫＡ３が17世紀中頃に多く、ＫＡ５が18世紀に多いことからは、おおよそＫＡ４を17世紀後葉に位置付けることができる。従って、ＫＡ４は17世紀中頃にＫＡ３と並行して初出するものの、盛行は17世紀後葉にあると判断する。なおＫＡ４から確認される突起内側のカーブは宝篋印塔に認められる馬耳状突起の影響が想定されるが、17世紀後葉から花崗岩製の宝篋印塔が確認され始めることとの関わりが推測される。ＫＡ５は前段階まで発達した突起が屋根部に接近する。その結果、突起部に至るまでの屋根の高さは短くなり、軒の突

出部にいたる軒口上面のラインは突出部付近において角度をもつ。また、突起部内側のカーブは、先端部直前まで直線的に立ちあがり、先端付近で角度をもって折れるタイプに変化する。さらに、屋根の変化として、ＫＡ２以来主体であった箱型のものから直線的に短く下方に広がるものになり、その結果、屋根が傾斜をもつことから軒口との間にあった段は不明瞭になり、突起部の内側のみに確認される例も認められる。なお、法量においてＫＡ５から小型化が看取される。ＫＡ６は花崗岩製の五輪塔の影響をつよく受ける。屋根は箱型あるいは直線的な下方への広がりを有していた前段階から曲線的な勾配をもったものとなる。また、軒口の傾斜角度が強くなり、軒口と屋根の境にあった段も完全に消滅する。ＫＡ６は突起部の残存でわずかに豊島型五輪塔の形態的特質を残すにすぎない。

〈空輪〉

1610年代から20年代にかけてＫＵ１ が認められ、続いてＫＵ２が1640年代から認められる。ＫＵ２は18世紀中頃までの長時期にわたって存続する。ＫＵ３は事例が少なく、わずかに1660年代と1760年代の３例確認されているのみで不明瞭である。ただ、火輪との組合せではＫＡ５と多く共伴し、火輪の分析でＫＡ５は1660年代に初出し18世紀に主体となることから、空輪においても同様の位置付けができよう。ＫＵ４は18世紀中頃から19世紀にかけて確認され、時期的にはＫＵ３の後に位置する。このようにＫＵ１からＫＵ４への変遷が想定される。

形態変遷はＫＵ１からＫＵ２への変遷が総高の発達、さらにＫＵ３への変遷は上端部突起の発達として捉えられ、時期が下るにつれて突起は長くなり18世紀中頃の事例では空輪本体より長い例も確認される。

ＫＵ４はＫＵ１からＫＵ３とは全く異なった形態を有する。ＫＵ４のような風輪と空輪を１石から製作するのは中世以来の五輪塔の伝統であり、近世以降でも香川県外においては主体である。一方、豊島型五輪塔においては別石からなるといった点で独自性を示していたわけだが、ＫＵ４への変遷はこうした独自性の消滅として位置付けられる。事実、その形態は同時期の花崗岩製五輪塔の空風輪と同じであることが指摘できる。

⑸　各期の設定

上記の分析を踏まえて次に各期の設定を行なう。設定の基準としては墓標の存在やそれに伴う花崗岩製の五輪塔との関わりを重視しⅠ期からⅣ期に設定した。

Ⅰ期は17世紀初頭から中頃である。17世紀中頃以降は香川県において墓標が確認され始める時期であり、その前段階という意図でⅠ期を設定する。そして形態及び組成よりⅠ期を古段階と新段階に細分する。Ⅰ期古段階は火輪のＫＡ１及びＫＡ２と空輪のＫＵ１を主体とし、Ⅰ期新段階は火輪のＫＡ３と空輪のＫＵ２を主体とする。なお、ＫＵ４はⅠ期新段階にわずかながら確認される。

Ⅱ期は17世紀後葉である。花崗岩の墓標が普遍的に確認される時期であるが、まだ普及には至っていない段階である。また、墓標に伴って花崗岩製の五輪塔も当期から普遍的に確認され始め、豊島型五輪塔にとって大きな変化期に当たることが予想される。形態的には火輪のＫＡ４と空輪のＫＵ２が主体となり、一部ＫＵ３が確認される。

Ⅲ期は18世紀初頭から18世紀中頃である。花崗岩の墓標は普及期に当たり、一般階層まで広く墓標を造立しはじめる時期である。火輪のＫＡ５と空輪のＫＵ３が主体となるが、空輪のＫＵ２もま

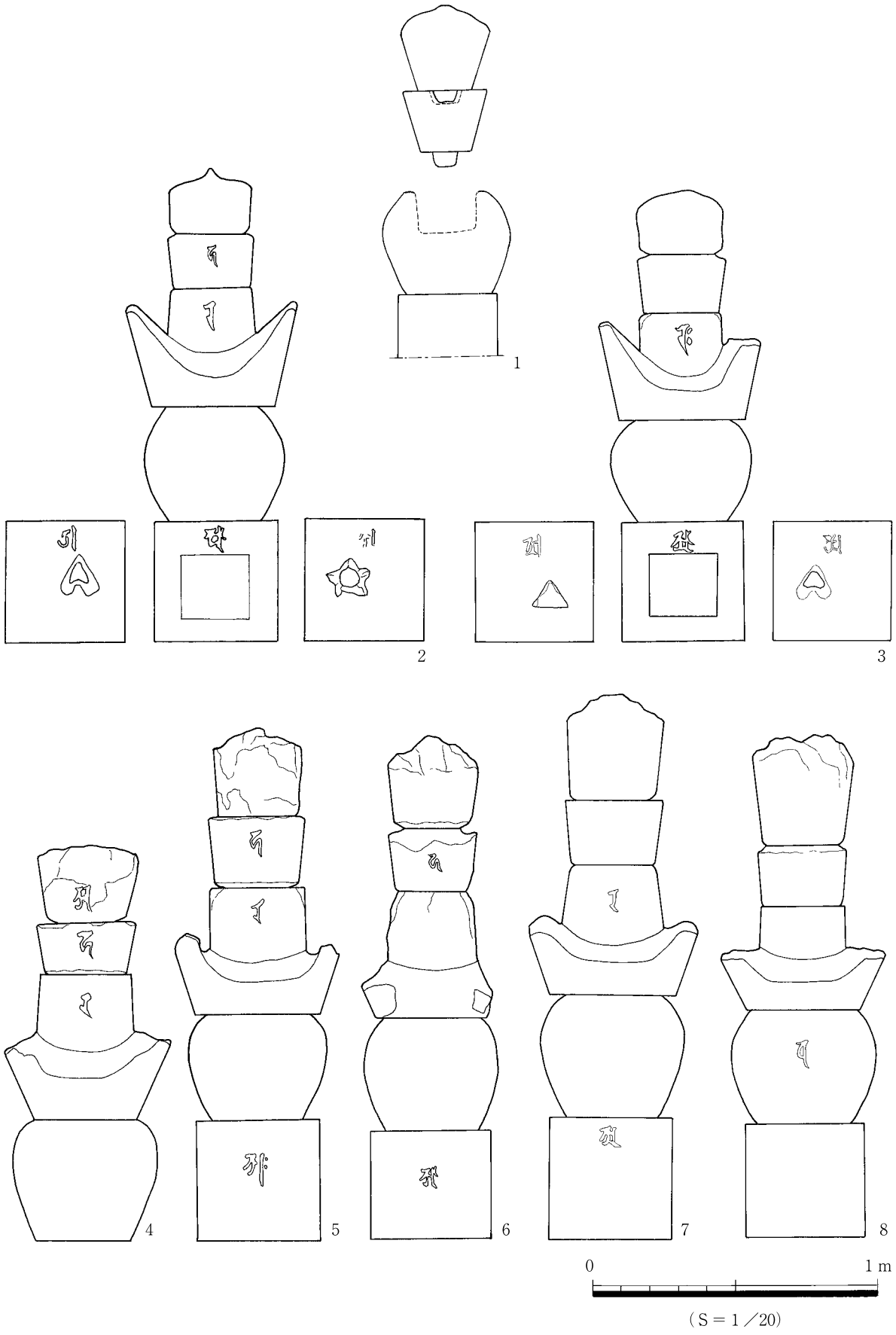


図８　豊島型五輪塔Ⅰ期古段階(1)

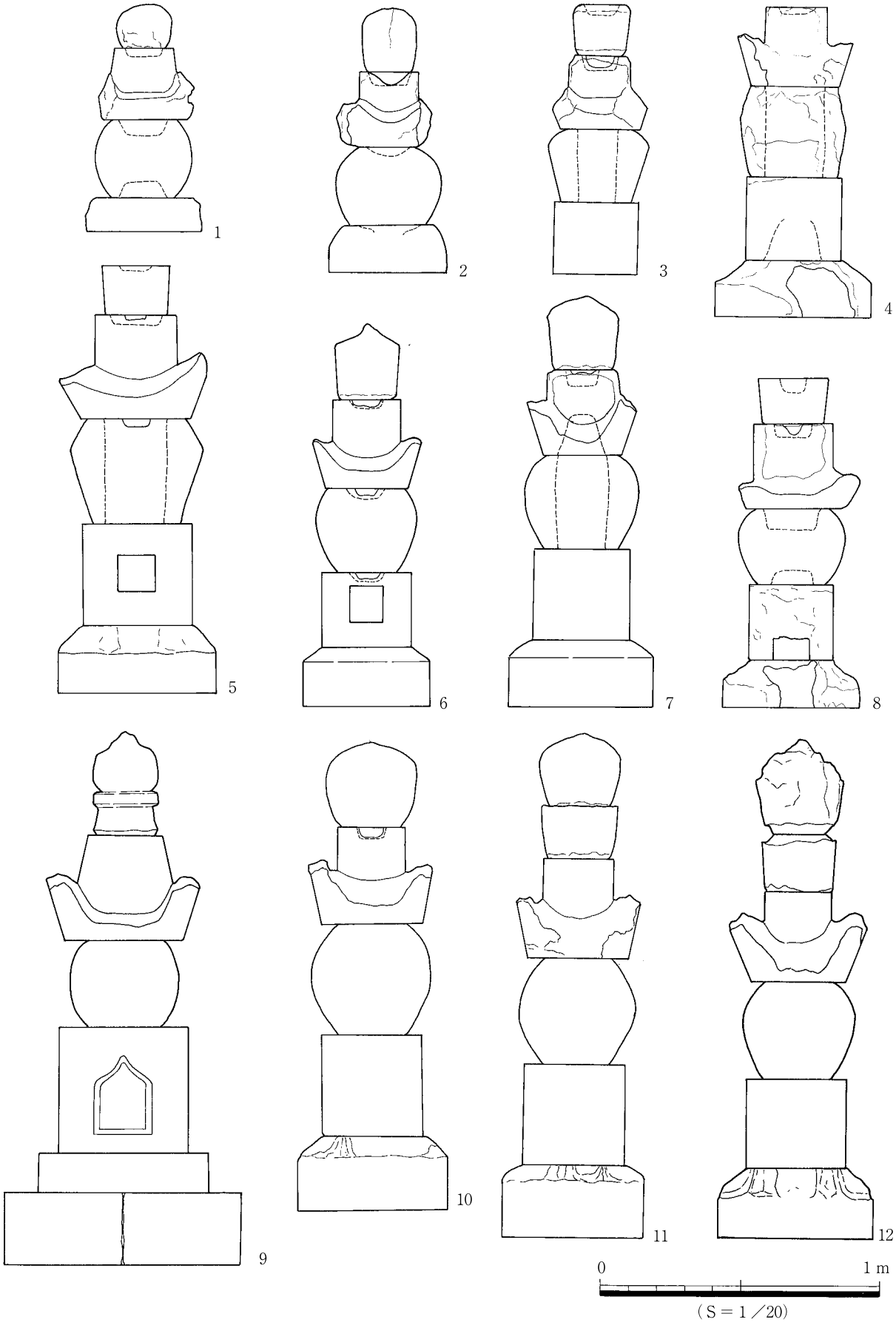


図９　豊島型五輪塔Ⅰ期古段階(2)

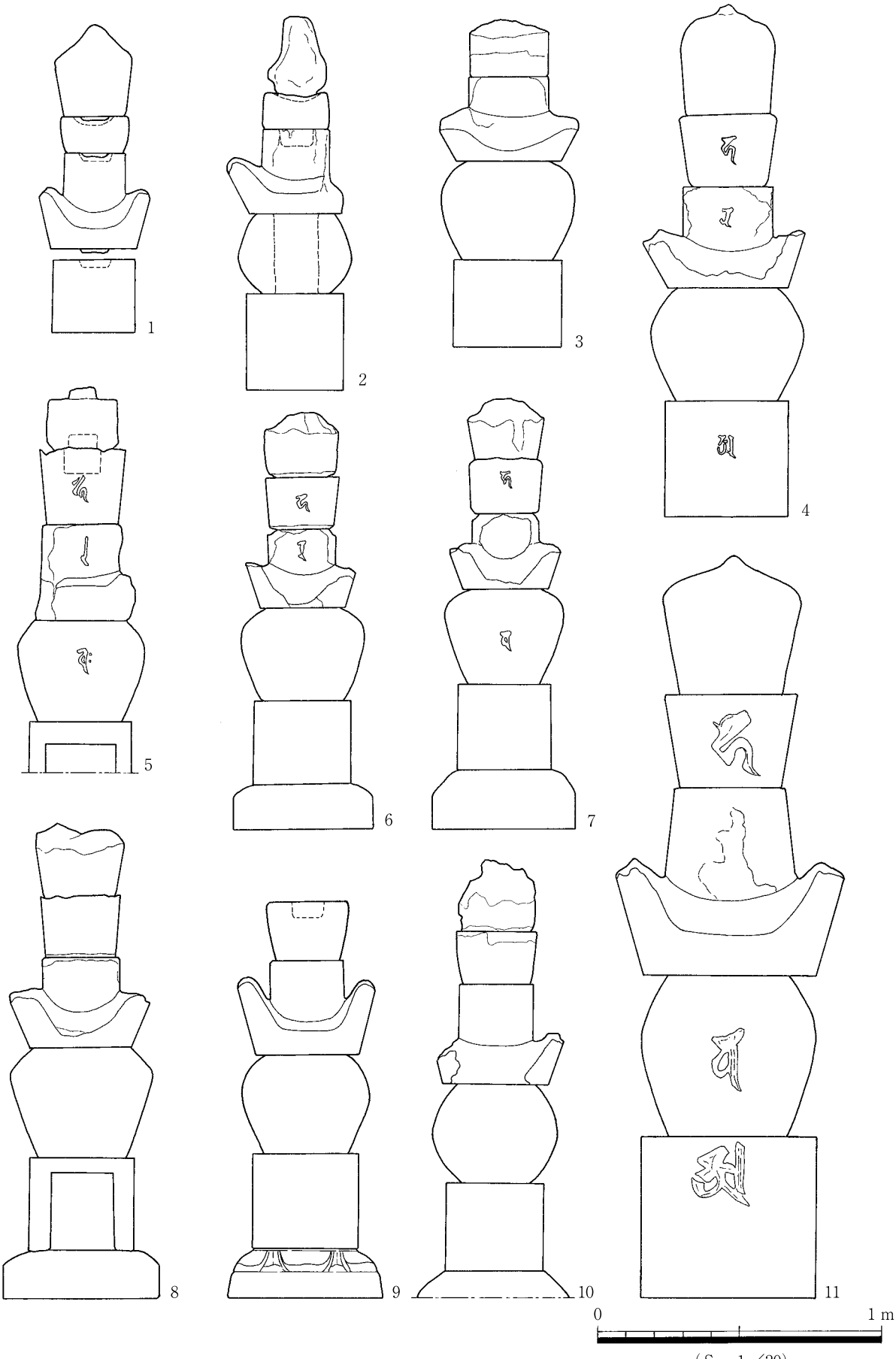
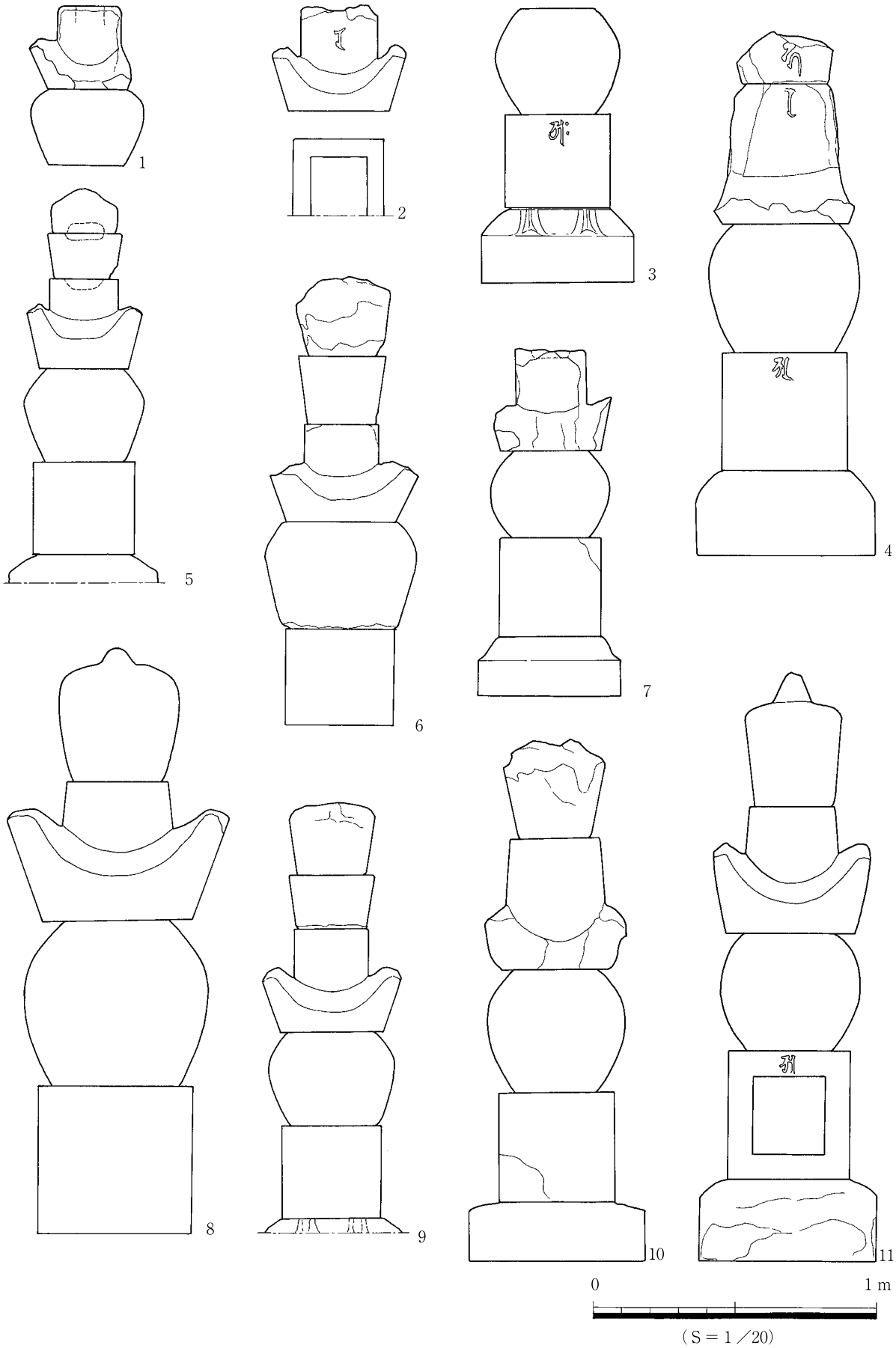


図10　豊島型五輪塔Ⅰ期古段階(3)　（S＝1／20）



（S＝1／20）

図11　豊島型五輪塔Ⅰ期古段階(4)

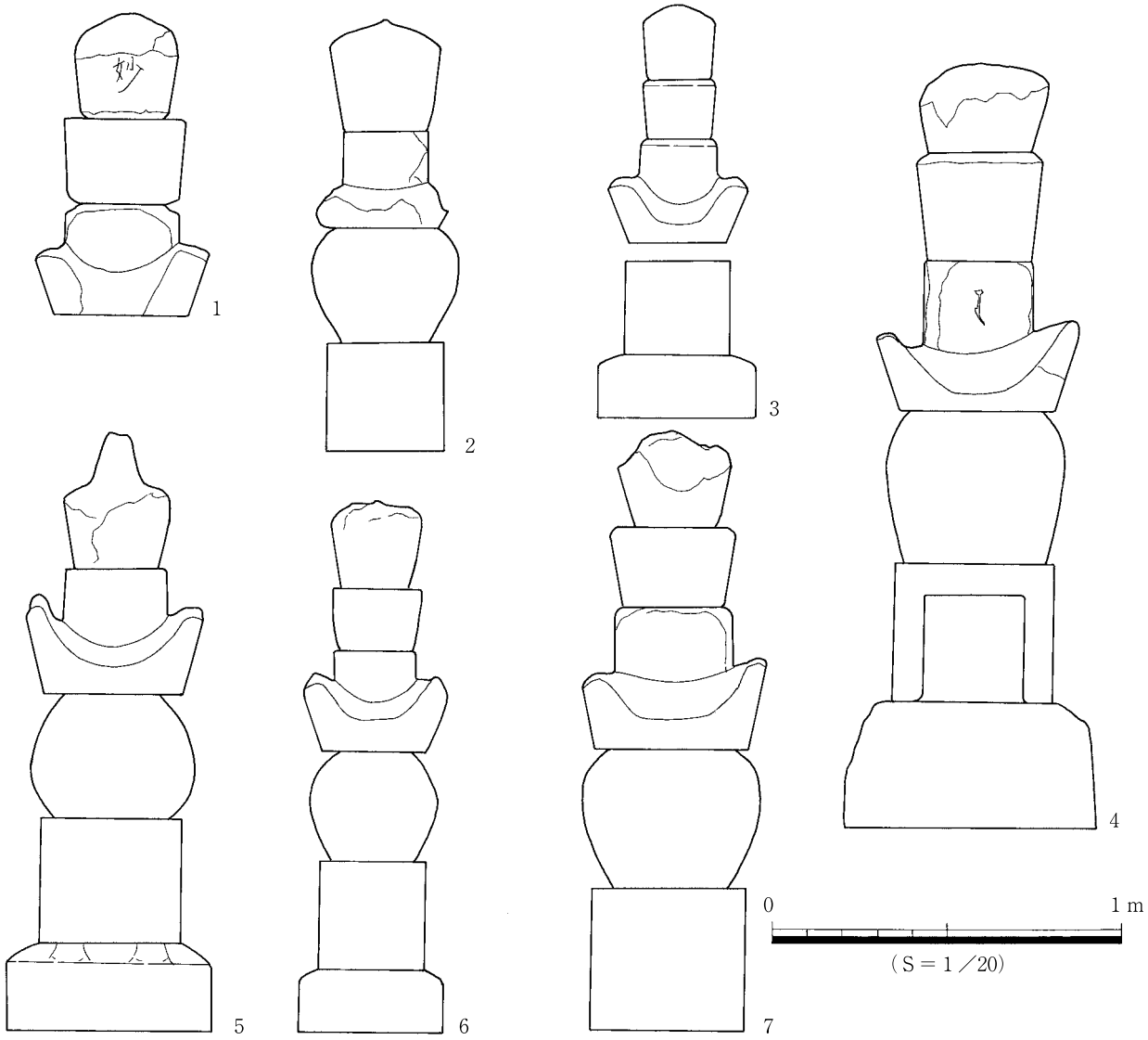


図12　豊島型五輪塔Ⅰ期古段階(5)

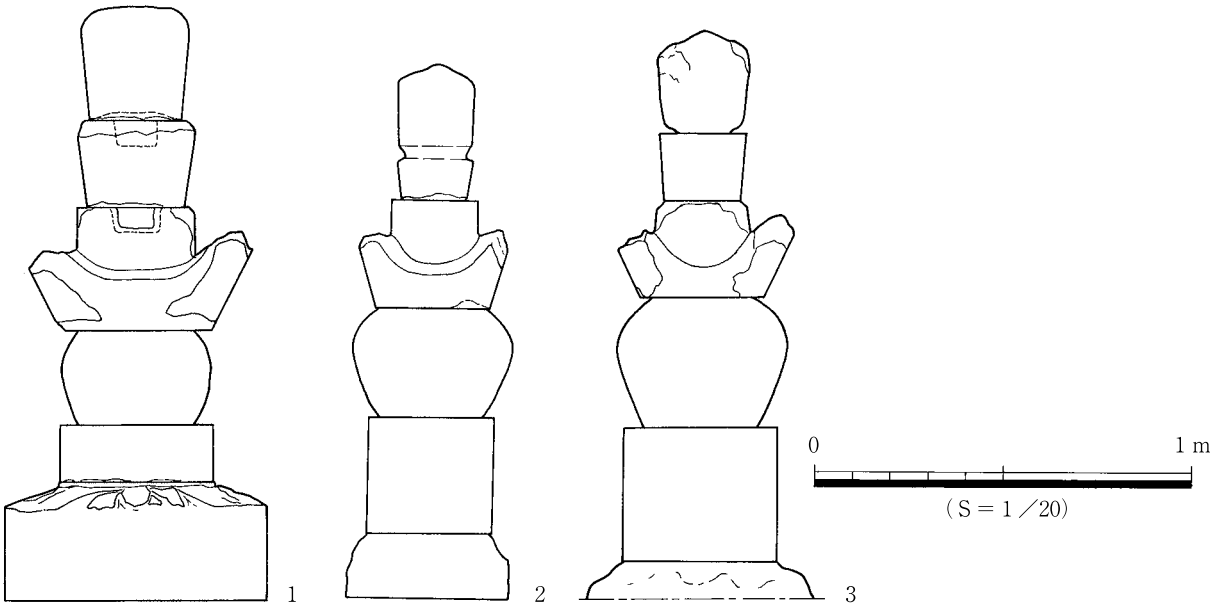


図13　豊島型五輪塔Ⅰ期新段階(1)

だ残存している。

Ⅳ期は18世紀中頃から19世紀である。花崗岩製の五輪塔において画期が認められ香川県内に広い分布が確認される。豊島型五輪塔は多分にその影響を受け、形態変化や島外への流通に変化が認められる時期である。火輪のＫＡ６と空輪のＫＵ４を主体とする。わずかに前段階のＫＡ５も残存するが少ない。

⑹　各期の形態的様相

本節では台石から空輪の全部材を含めた各期の法量や形態の具体的様相を検討し、総体的な変遷をみていく。

①Ⅰ期古段階　図８～図12

紀年銘資料の他に高松市唐人塚、高松市一宮寺住職墓、長尾町円光寺墓地五輪塔、香川町二川・龍満家墓地五輪塔、琴平町金毘羅宮別当宥遍墓、直島町高原家墓地五輪塔等がある。五輪塔の総高において白鳥町花崎家五輪塔は地輪から空輪までで97.5㎝を測り小型である（図４－５）。これは中世から伝統的に認められる法量であり、Ⅰ期古段階全体から見れば少数であるものの、他に與田寺墓地五輪塔（図４－７・８）や唐人塚（図９－１・２）、高松市多肥町西蓮寺関係墓地五輪塔等が指摘できる。Ⅰ期古段階で一定量確認される法量は地輪から空輪までで130㎝から180㎝である。一方、大規模なものとしては高原家墓地の五輪塔（図10－11）があり、地輪から空輪までで262㎝を測る。高原家墓地には花崗岩製の初代高原利次の五輪塔が275㎝を測り、利次が1619年の没年であることからその前後の造立が推測される。当五輪塔は規模的に初代次利の五輪塔と類似しており、２代次勝の可能性が高い。なお、次勝は1623年に没していることからその前後の造立が推測される。形態の分類では火輪がＫＡ１ｂ、空輪がＫＵ２である。

次に、火輪と空輪以外の特徴について確認する。

台石

台石は繰形座で刻出物の認められない例が多く確認されるが、当初から何も彫っていないものと、風化により刻出物の消滅したものの両方の可能性が考えられる。現在刻出物の確認されるものは全て蓮弁であり、各辺に３枚の蓮弁を刻し、間に２枚の間弁をおく構成となっている（一宮寺住職墓・図10－９、宝蔵院極楽寺五輪塔・図11－３、土庄町十輪寺広田家墓・図９－10・11・12）。蓮弁はすべて単弁となっている。後で再述するがこうした構成は15世紀中頃の豊島石の五輪塔において確認することができ、中世以来の伝統として理解できる。また、今回の調査によって確認した11例中９例がⅠ期古段階に位置付けられる。さらに、Ⅰ期古段階以外に位置付けられる２例は蓮弁の刻出方法として抑揚のある近世的様相を呈していることから、蓮弁の抑揚が顕著でないⅠ期とは明確に区別される。内部は確認できた例が少ないものの基本的に空洞になっている。

地輪

方形状の地輪が大多数を占め、Ⅲ期以降に確認されるような長身形のものはない。地輪正面には梵字、戒名、没年月日が刻されていたと思われるが現存する例は多くない。

Ⅰ期古段階の総数からいえば決して主体ではないものの他期には認められない特徴として、地輪正面に刳り抜かれた方形状の孔がある（円光寺墓地五輪塔・図８－１・２，寒川町蓮井家墓地・図11－11、十輪寺広田家墓地・図９－９、志度町西方寺五輪塔群・図９－５・６）。円光寺墓地五輪塔群の２基は正面に方形状の孔、側面に幅６㎜程度の円形或いは猪目形の刳り抜きが確認され、方

形状の孔に貫通している。また、十輪寺広田家墓地では刳り抜きが花頭形を呈しており他に類例を有さない。[2] この方形状の孔の用途であるが、現状で孔内に安置物等は認められない。ただ、弥谷寺境内の岩崖に陽刻されている五輪塔において地輪に同じような方形状の孔が刳り抜かれており、中には人骨が確認されていることから（土井卓治1972）、当例も同様の用途、つまり、納骨孔である可能性を想定したい。

一方、地輪正面を方形状に下端まで刳り抜き、「コの字」状を呈する例が認められるが、長尾町伝滝井神太郎墓（図12－４）と志度町三宅家墓（図10－８）の２例であり、方形状の刳り抜きに比較して少量である。また、当例はⅢ期まで確認されることから、方形状の孔が変化したものとして位置づけられる。なお、広さの狭い「コの字」状の孔も西方寺五輪塔群で２基確認されるが（図９－８）、これもⅢ期において１例認められる。

内部は確認できた例が少ないものの、基本的に空洞は認められない。

水輪

最大幅を上位にもつ例と中位にもつ例が大半を占めるが、Ⅱ期以降に比べ中位にもつ例の比率が高いことが指摘できる。高原次利夫人墓は筒型の形態をしており、それは生駒親正墓等17世紀初頭に数例確認される。また少数ではあるが、側面が直線的な傾斜をして最大幅で稜をもつソロバン型をしたタイプがある（図９－５、図10－８、図11－５）。なお、最大幅に比して高さの低い扁平な水輪は当期にはまだ確認できない。

内部構造は、高松市唐人塚、西方寺墓地五輪塔群では上面と下面の両面に幅20㎝深さ５㎝程度の刳り抜きが認められる（図９－１・２・８）。ほぞに比して幅広く、確認した五輪塔においては肝心のほぞ自体が火輪下面と地輪上面に認められないことからほぞ孔ではないことが指摘できるが、その具体的用途は不明である。このような刳り抜きは中世段階における豊島の五輪塔でも確認されていることから、中世からの伝統として捉えられ、また、Ⅱ期以降では確認していないことから、当期の特徴である可能性が高い。また、火輪下面にほぞの認められる例が当期にはあり、それを受けるほぞ孔を穿っている例もある（図９－５・６，図10－２）。一方、円筒状に上面から下面まで刳り抜く例も確認され（図９－３・４・５、図10－２）、当期から既に水輪の空洞化は指摘できる。

風輪

風輪は側面において直線的な立ち上がりをもつものが基本であり、中世段階からの風輪の変遷において当期から確認される形態である。また、Ⅱ期以降との違いは認められないことから、風輪のみでは時期的な推定は不可能である。なお、側面において曲線をもった立ち上がりを有するものも少数ながら確認されるが、これもⅠ期に限定されるものではなく、Ⅱ期以降も少数ではあるが認められる特徴である。

②Ⅰ期新段階　図13～図16

紀年銘資料の他に高松市姥ヶ池墓地五輪塔群、蓮井家墓地五輪塔等がある。姥ヶ池墓地は県内で最も多く近世から現代までの墓標が造立されている墓地であるが、その中で豊島型五輪塔はⅠ期からⅡ期において確認され、特にⅠ期新段階の当期のものが主体的である。一方、Ⅲ期、Ⅳ期の例は皆無であるが、高松城下では17世紀後半以降における墓標造立の習慣化の中で豊島型五輪塔の造立が周辺地域よりも早く衰退した結果を示しているものと思われる。法量は地輪から空輪までで140㎝から200㎝のものが多く、Ⅰ期古段階と大きな差は認められないが、古段階に認められた小型の

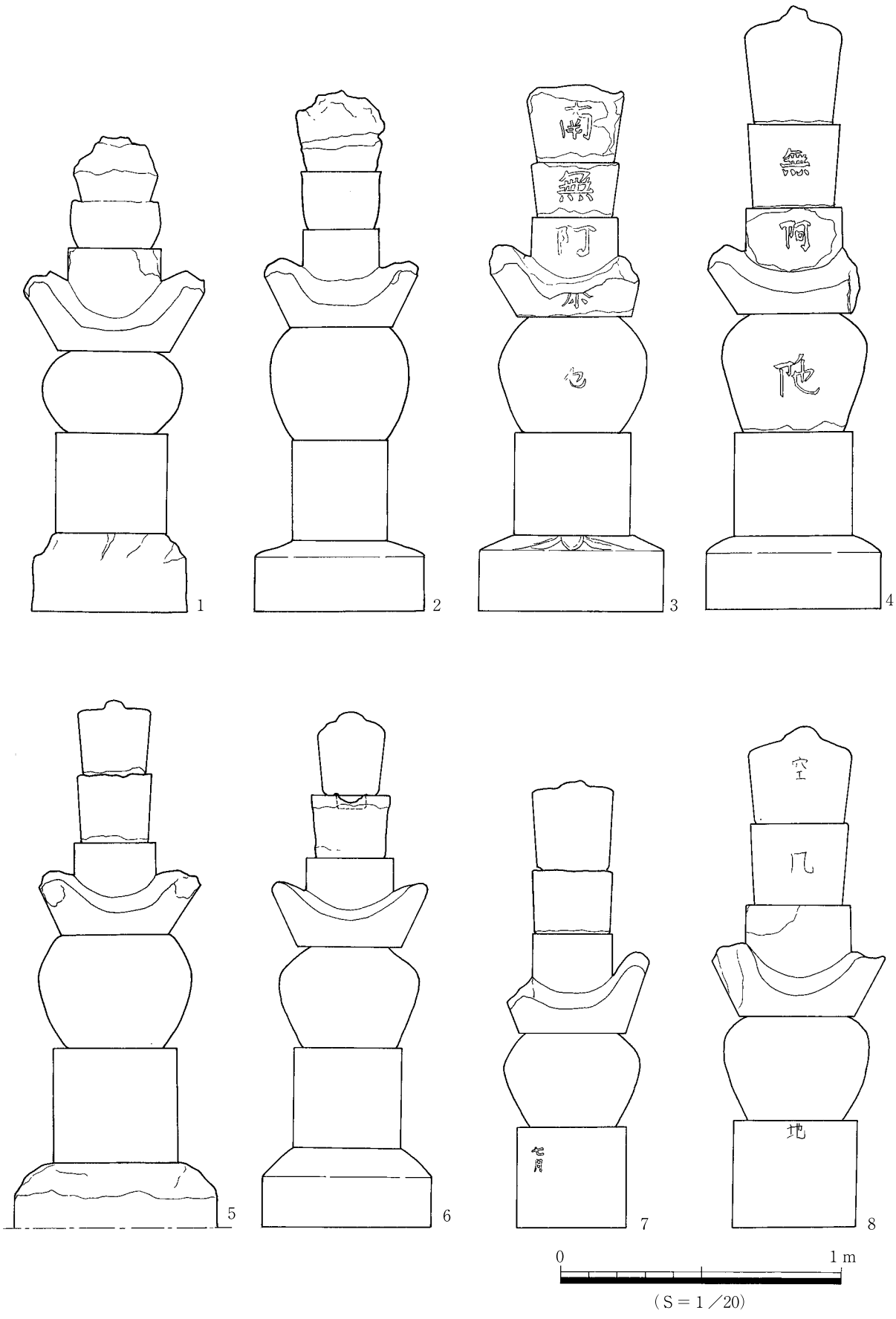


図14　豊島型五輪塔Ⅰ期新段階(2)

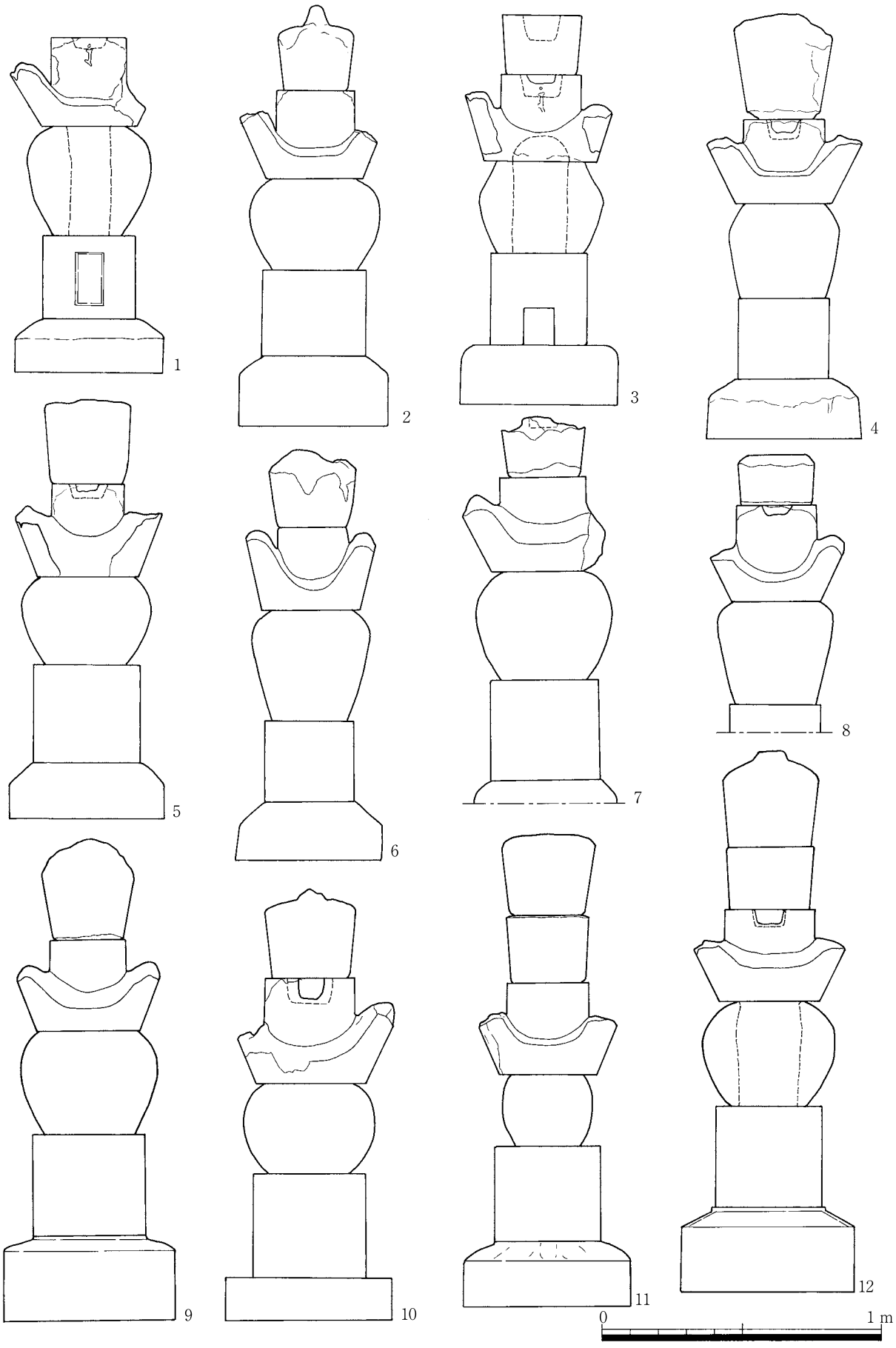


図15　豊島型五輪塔Ⅰ期新段階(3)　（S＝1／20）

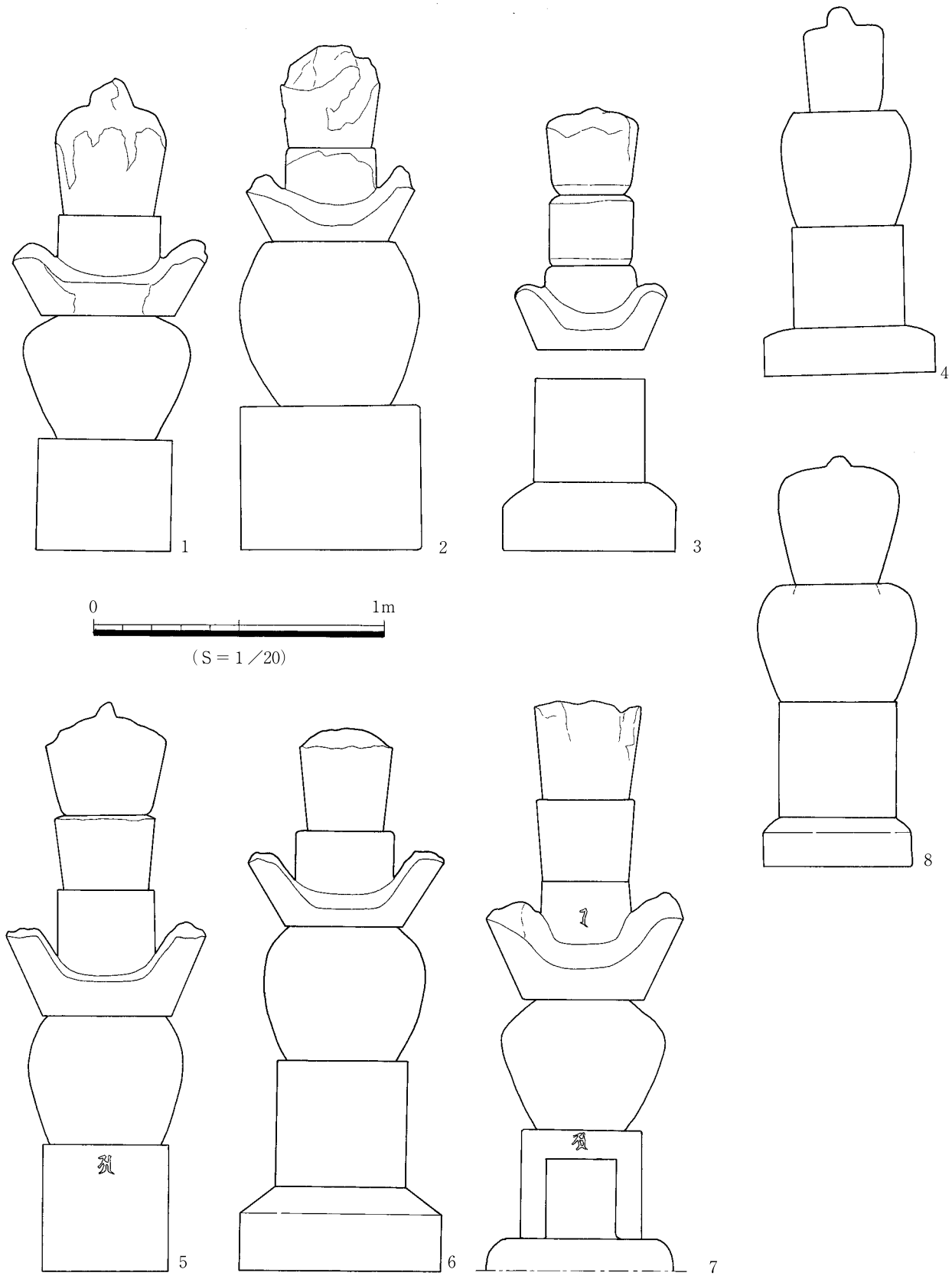


図16　豊島型五輪塔Ⅰ期新段階(4)

五輪塔は確認されない。

台石

古段階に引き続き繰形座のものが多い。蓮弁の刻出は、３枚の蓮弁と２枚の間弁が各辺に刻出された前段階からの系統を有する例として坂出市宮武家五輪塔があるが、蓮弁に抑揚をもった表現がされていることから古段階とは相違する（図４－11）。一方、蓮弁と間弁の総数は同じではあるが、中心の蓮弁が小型化し、それを挟んだ両側の蓮弁が大型化した図像構成をとるタイプ（図13－８）が当期には数例確認される。また、間弁をもたない４枚の蓮弁を刻出した例も認められ（図４－12）、数は少ないものの、当期の特徴である。

地輪

古段階と同様に方形状の地輪でありまだ長身形のものは確認されない。地輪正面に縦長長方形状の浅い彫り凹めのある例がある（図15－１）が、この例のみである。

水輪

最大幅を上位にもつ例を主体とするが、当期からわずかながら最大幅に比して高さの低い扁平な水輪も確認される（図14－１、図15－10）。この扁平な水輪は花崗岩製の五輪塔において確認される特徴から、その影響を受けたものと考えられる。

内部構造は確認したものが少ないものの、確認されたものではすべて空洞となっており、当期は空洞が多数を占めるものと思われる。

風輪

風輪は前段階とほぼ同じである。

③Ⅱ期　図17～図18

Ⅰ期と比較して造立数が大きく減少する。こうした背景には墓標の普及が考えられ、墓石として五輪塔を造立していた段階から墓標を造立しはじめる段階への変化が考えられる。また、墓標に伴う花崗岩製の五輪塔や宝篋印塔の造立も豊島型五輪塔の減少の要因となっており、豊島型五輪塔自体も水輪の扁平化等、形態に花崗岩製の五輪塔の影響を受けるようになる。また、火輪における当期の形態的特徴である円弧状になった突起部内側の形態は宝篋印塔の隅飾りに類似することから、これも花崗岩製の宝篋印塔の影響が多分に考えられる。なお、眼妙寺墓地に認められるような豊島型五輪塔の火輪の系譜に当てはまらない五輪塔としてオーソドックスな形態のものも確認される[3]（図５－４）。

紀年銘資料の他に長尾町渡辺藤太郎墓、寒川町明石家墓地、喜岡寺墓地五輪塔等がある。法量はⅠ期と大きくは異ならないものの、200㎝に近い大型例は認められなくなることから、小型化への変化が認められる。

台石

繰形座が多くを占める点ではⅠ期と変わらないが、Ⅰ期に比較して蓮弁等を刻出する例が減少しており、相対的に繰形座が多くなっている。数少ない蓮弁の例として、宮武家五輪塔では間弁をもたない４枚の蓮弁を刻出した例や、墓標の竿石下部に認められるような蓮華座を表現した例（図５－５）が認められる。

地輪

方形状の形態を呈しており、まだ長身形は認められない。ところで、眼妙寺墓地では地輪の下に

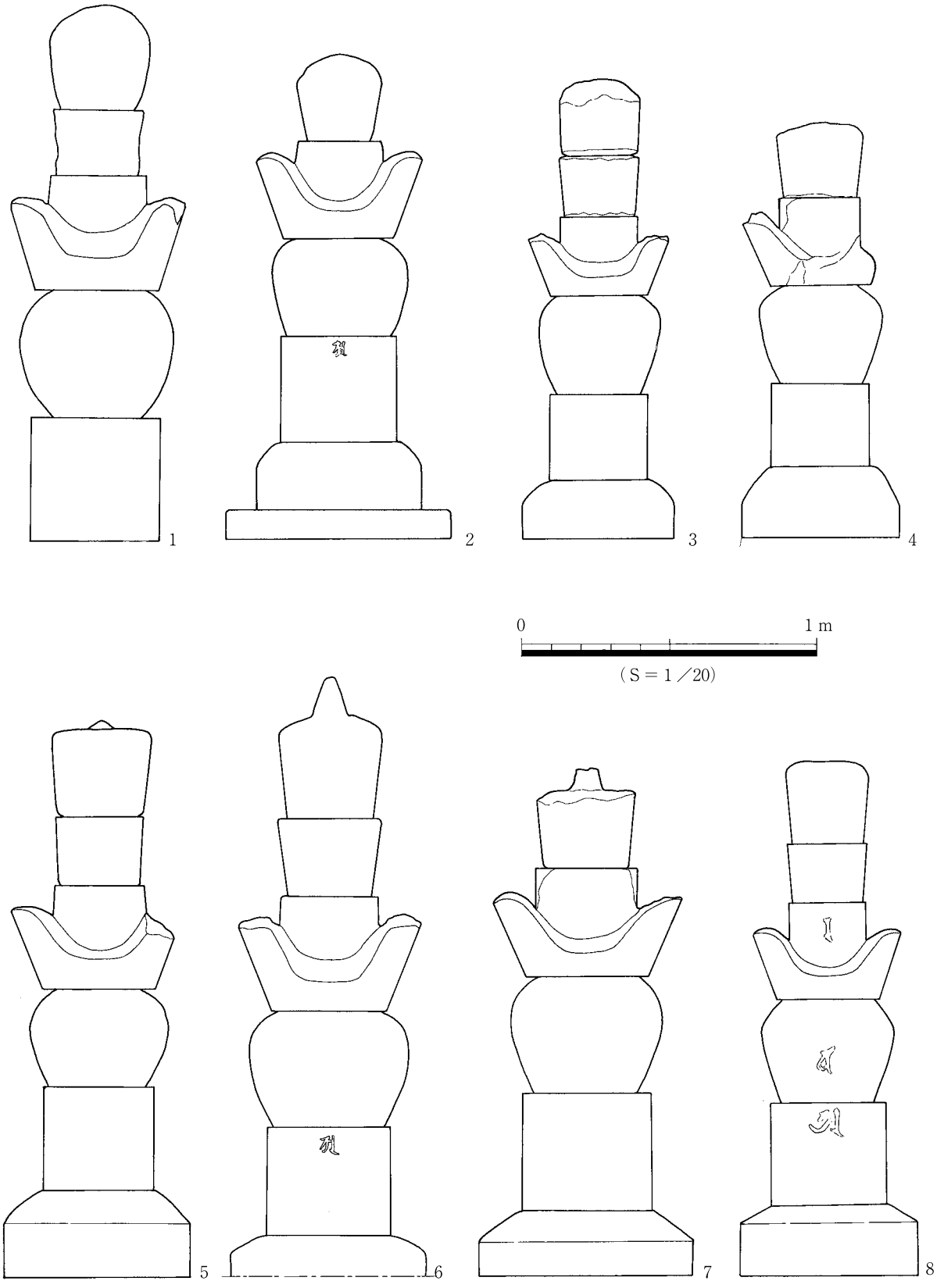


図17　豊島型五輪塔Ⅱ期(1)

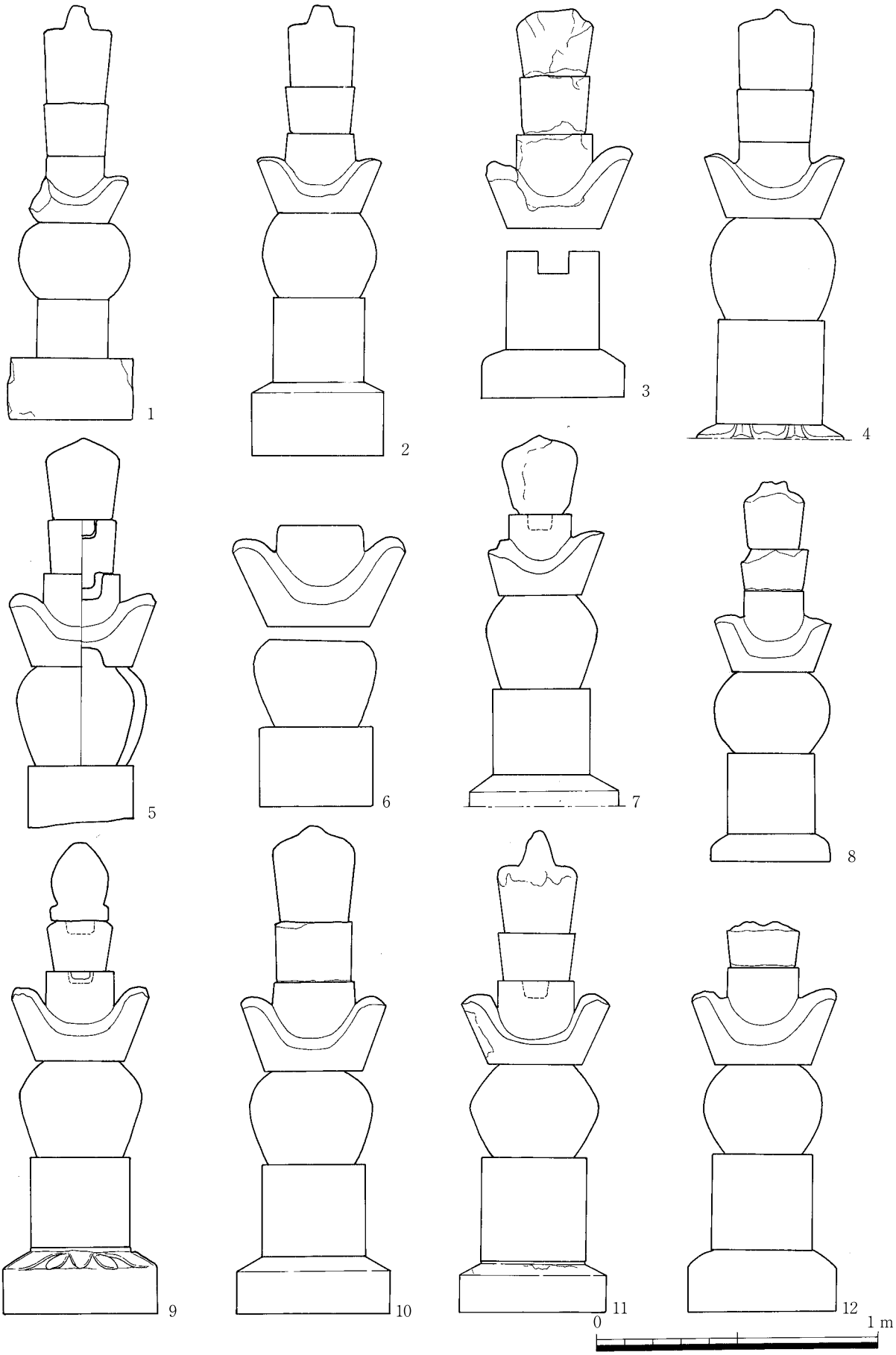


図18　豊島型五輪塔Ⅱ期(2)　　(S＝1／20)

家型の墓石を置く例が確認される（図５－４）。家型の墓石は瀬戸内海地域ではラントウと呼ばれており、豊島型五輪塔とともに香川県内には多く確認される。眼妙寺墓地の例はこのラントウと五輪塔の組み合わさったものであるが、この他にラントウと墓標の組み合わさったものが確認されており（仁尾町覚城院墓地）、こうした組合せがどの時期まで遡れるかは今後の課題であるが、少なくとも五輪塔との組合せはⅡ期から確認できる。

水輪

最大幅を上位にもつものは相変わらず多いが中位にもつものも再び増加する。特に最大幅を中位にもつタイプには最大幅に比して高さの低い扁平なものが多い。上述したように花崗岩製の五輪塔は最大幅を中位にもつ扁平な水輪の形態を有することから、当期におけるこのような水輪の変化には花崗岩製の五輪塔の影響を想定したい。

内部は確認したものではすべて空洞である。

風輪

Ⅰ期と形態的には同じであり変化は認められない。

④Ⅲ期　図19～図21

当期は法量の小型化が認められる。Ⅱ期までに多く確認された130㎝から180㎝の例は相変わらず確認されるものの、当期には同様に110㎝から120㎝が多く確認されはじめる。また、Ⅰ期新段階からⅡ期にかけて認められはじめる花崗岩製の五輪塔の形態的影響も一段とつよくなり、空輪、風輪の一石化（図６－７・８・９、図19－７）、長身形の地輪（図６－７・８・９）の出現等が指摘される。全体的な造立数はさらに少なくなり、豊島型五輪塔の衰退期である。

一方、形態の大きな変化としては火輪内部の空洞化がある。すべての火輪が空洞になっているわけではないものの、当期に多くその例が確認される。Ⅱ期までで確認されていた水輪内部の空洞も含め、当期には地輪、台石の空洞も確認されることから、多くは空風輪をはずせば内部は地面まで空洞でつながった状態となっている。

紀年銘資料の他に寒川町蓮井家墓地、三野町福岡家墓地、大川町養専寺西側の五輪塔がある。

台石

繰形座のみが確認され、蓮弁等の刻出物はもはや認められない。

地輪

Ⅰ期以来の方形状のものが依然として多く確認される一方、長身形のものも当期から確認されはじめる。中でも大内町東昭寺の五輪塔（図６－６・７）では上面がややマウンド状に高くなっており、こうした形態は花崗岩製の五輪塔で多く認められる特徴である。

Ⅰ期で指摘した地輪正面を方形状に下端まで刳り抜き、「コの字」状を呈するものは、Ⅱ期も少数ながら確認され、Ⅲ期に至ってその数を増す。そして、細部の形態において３種に分類可能である。１類はⅠ期以来の形態で、単純に刳り抜いただけのものである（図19－10・12、図20－11）。当期に多いのは地輪正面の「コの字」状の刳り抜きの上辺から地輪上端までをやや突出させる２類であり（図19－１・２・９、図21－２）、豊島では刳り抜き部に観音開きの扉を有するものもある（図６－11）。Ⅱ期においてラントウと五輪塔の組み合わさった眼妙寺墓地の例を紹介したが、Ⅲ期におけるこのタイプはこれらラントウ（家型）の簡略の可能性を推測したい。なお、扉のある例は豊島で多く確認される一方で島外では少ない傾向がある。

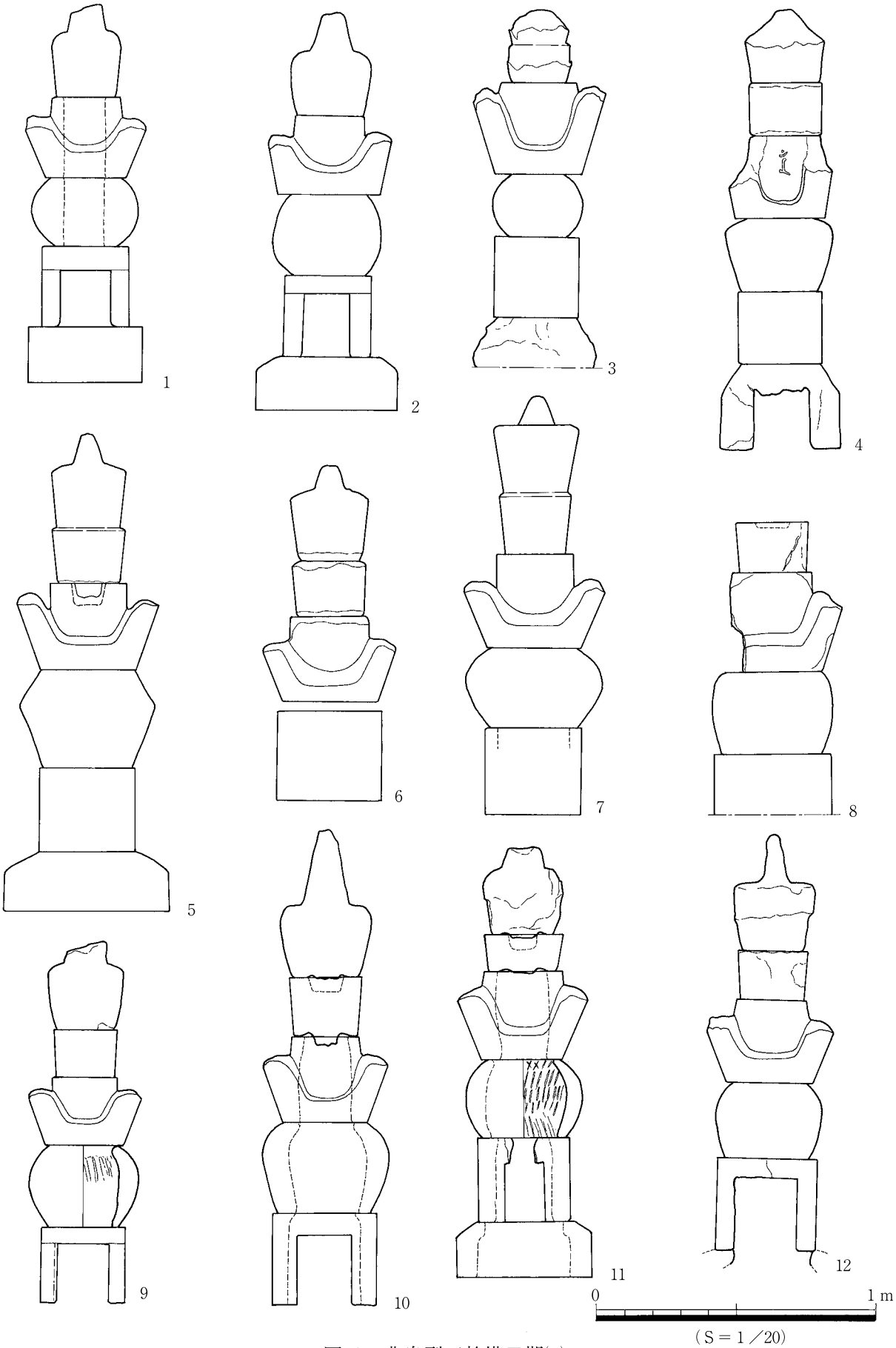
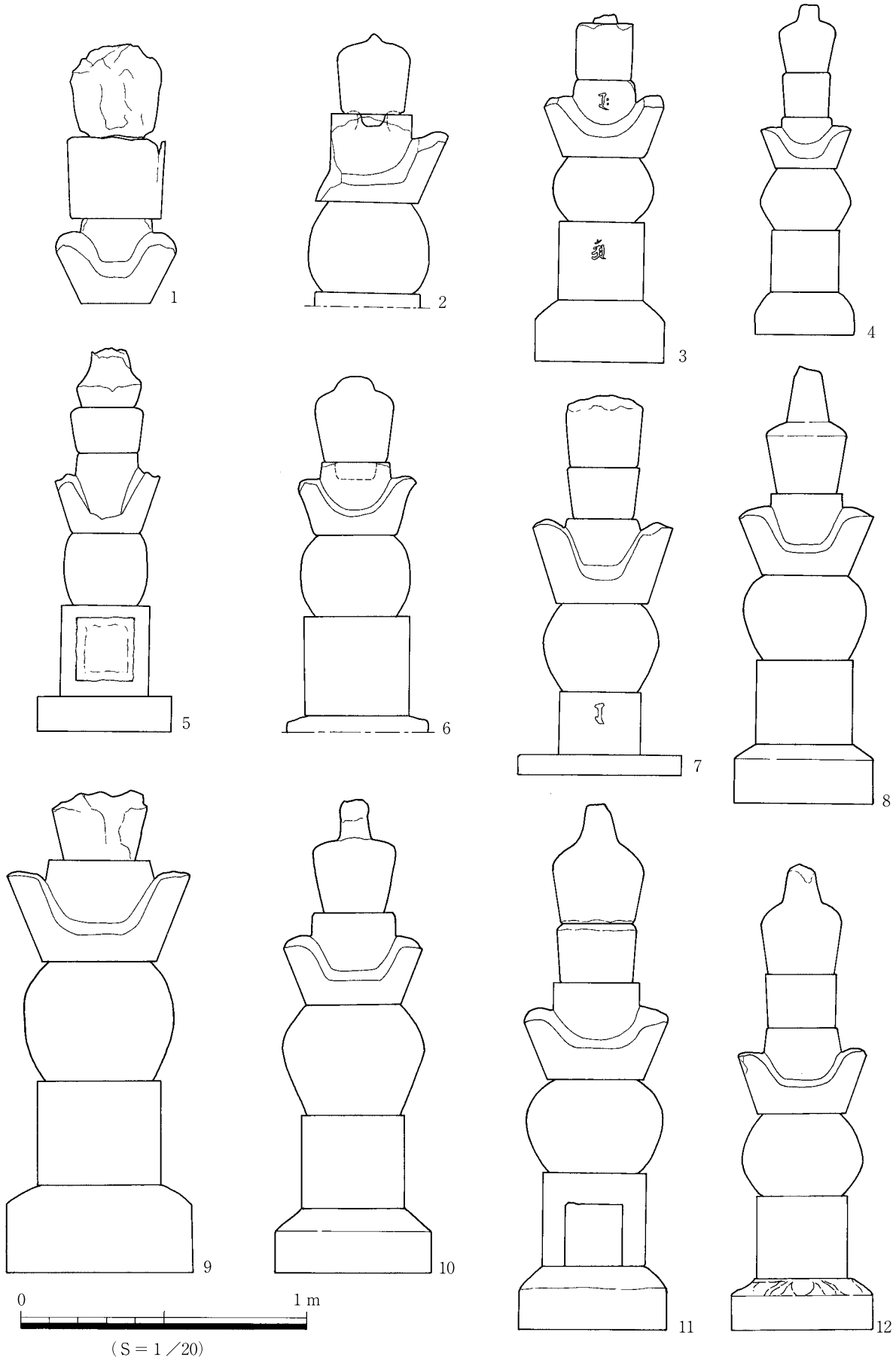


図19　豊島型五輪塔Ⅲ期(1)



（S＝1／20）

図20　豊島型五輪塔Ⅲ期(2)

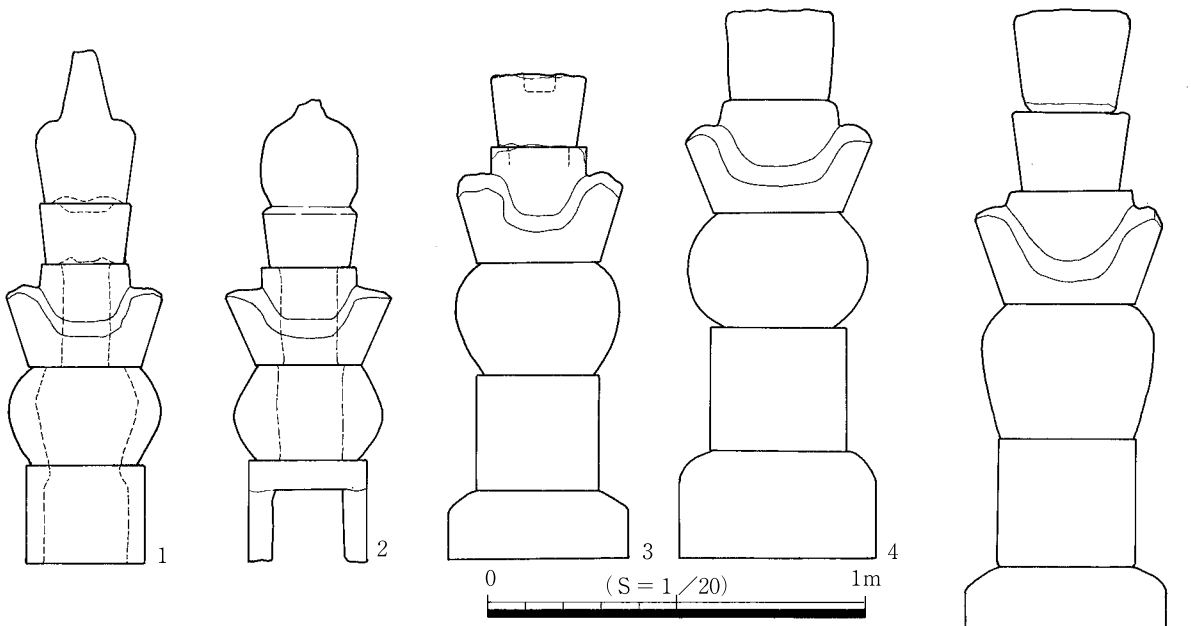


図21　豊島型五輪塔Ⅲ期(3)

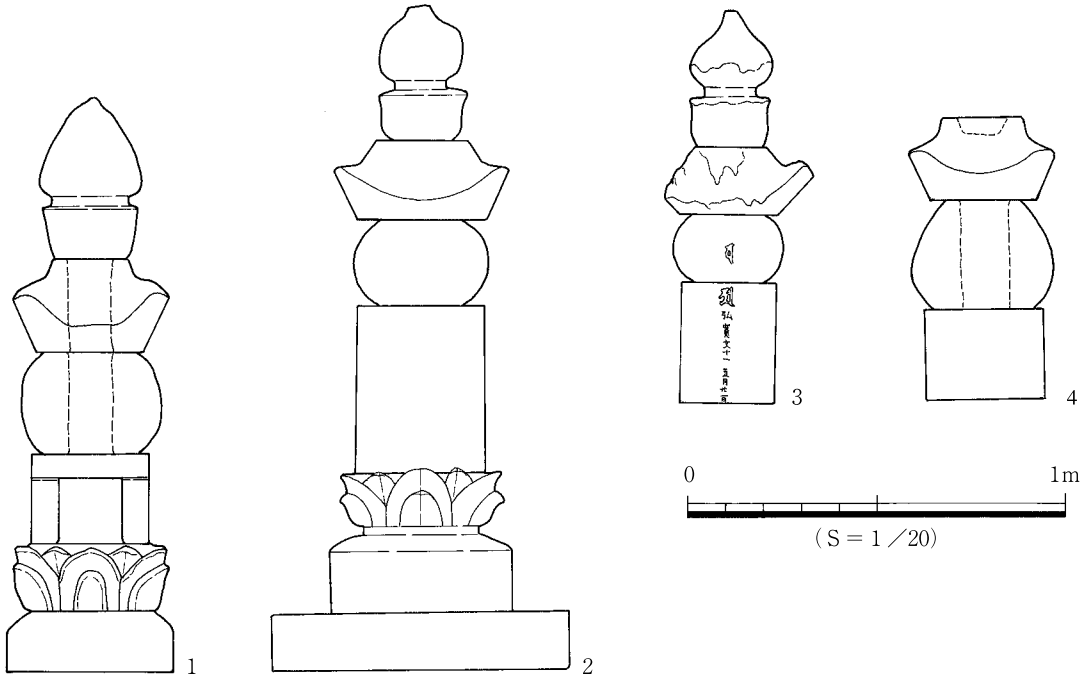


図22　豊島型五輪塔Ⅳ期

３類は外見では１類と同じであるが、地輪上面を刳り抜いている点、刳り抜き方として内部を刳り抜き面よりも若干広くつくっている点が異なる（図19－10・11）。地輪上面を刳り抜いているということは、水輪、火輪も空洞にしていることから、３部位の内部が空洞で連なるといったⅢ期に特徴的な構造が指摘できる。

水輪

最大幅を中位にとり、扁平なタイプが主体となる。最大幅を上位にとる例も依然として確認されるが、それも大多数が扁平化している。

内部は確認されるものはすべて空洞となっている。

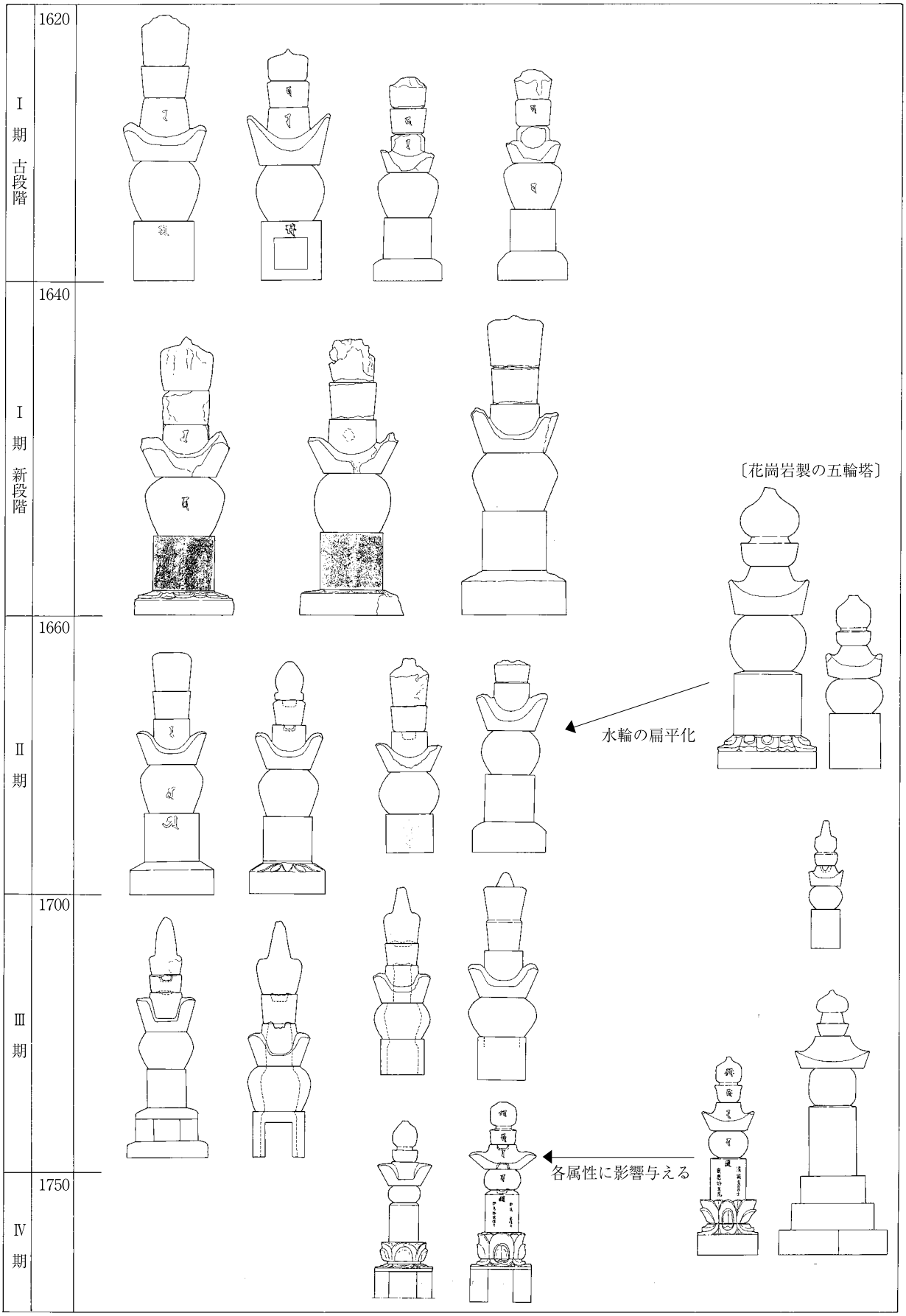


図23　豊島型五輪塔編年図

風輪

Ⅱ期までと大きな変化は認められないものの、当期から空輪と風輪を一石から製作する例が多く確認される。これも花崗岩製の五輪塔が基本的に空輪と風輪は一石で製作することから、形態においては豊島型五輪塔を残しているものの、多分に花崗岩製の五輪塔の影響が想定される。

⑤Ⅳ期　図22

豊島型五輪塔の形態的定義として指摘される諸属性のほとんどが確認されなくなるが、材質が豊島石であること、火輪軒隅部の突起の形態にその名残りを残すことから、当期も豊島型五輪塔の範疇とした。豊島型五輪塔の最終期である。

当期が位置する18世紀後葉から19世紀は花崗岩製の五輪塔に画期が認められる時期であり、新しい形態が認められる。こうした中で豊島型五輪塔は島外への搬出にほぼ終止符をうつ。当期の形態的特徴は豊島型五輪塔よりはむしろ花崗岩製の五輪塔に多くの属性で共通し、前期まで認められた豊島型五輪塔の独自性はほとんど消滅している。

台座

Ⅲ期までの台座はもはや確認できない。多くは観音扉のついた龕状の台石であり、これはⅢ期で触れた地輪の２類と同じ形態である。つまり、地輪の役目をしていた２類はⅣ期に至って台座として用いられていることが指摘できる（図６－15・16）。この台石の上部は反花座となっており、その上に別石でさらに台座が組み合わさっている。上側の台座は上向きの蓮弁を刻出しており、請花座となっている。このような２石からなる台座が当期において多く確認されるタイプである。なお、花崗岩製の五輪塔では豊島型五輪塔のような観音開きの龕は認められないものの、反花座と請花座の組合せや、請花座の台石は普遍的に確認されることから、花崗岩製の五輪塔の系譜として当台石は位置付けることができる。

地輪

方形状の地輪はもはや確認できない。確認される地輪はすべて長身型である。地輪上面にマウンド状の高まりを有する例が多く確認でき（図６－13・14・15・16）、内部に関しても空洞の認められない例が多く確認される。これら地輪の形態も豊島型五輪塔からの系譜は見出し難く、花崗岩製の五輪塔の系譜として位置付けることができる。

水輪

最大幅を中位にもつ扁平なタイプのみが確認され、豊島型五輪塔で認められた水輪の系譜は全く確認できない。内部も空洞の例は少なく、上面と下面にはほぞが取り付けられている。これらの特質も花崗岩製の五輪塔で確認されることからその系譜として考えられる。

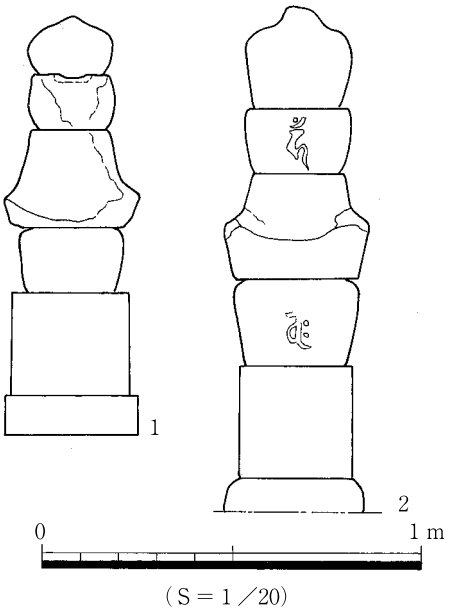
風輪

空輪と１石からなる点はⅢ期からの流れで捉えられるが、形態においてⅢ期までの豊島型五輪塔としての系譜は消滅しており、花崗岩製の五輪塔と同じ形態を呈している。

以上、各期の様相をみてきたが、形態変遷から明らかとなった点は、①豊島型五輪塔の最盛期はⅠ期にあり、Ⅱ期以降は花崗岩の墓標や五輪塔、宝篋印塔の普及により衰退していき、②Ⅲ期まではかろうじて島外への搬出が認められるものの、Ⅳ期以降その造立は島内にほぼ限定されたものになり形態的独自性も喪失した、ということである。このように、豊島型五輪塔の形態変遷は花崗岩

名　称	所在地	豊島石	種　類	年　号	性　格
寒川長俊墓	大川郡長尾町東	×	五輪塔	1480	没　年
隆　珍　墓	大川郡長尾町東	×	五輪塔	1421	没　年
珍　光　墓	大川郡長尾町東	×	五輪塔	1450	没　年
円　瑜　墓	大川郡長尾町東	○	五輪塔	1497	没　年
下り松石幢	大川郡大川町富田中	×	石　幢	1401	刻　字
生駒親正墓	大川郡志度町志度	×	五輪塔	1603	没　年
数珠掛孫兵衛久	木田郡牟礼町牟礼	○	板　碑	1583	没　年
神内家墓地	高松市西植田町	○	五輪塔	1466	刻　字
真鍋祐主墓	高松市木太町	○	五輪塔	16世紀	没　年
十河千松丸墓	高松市十川東町	○	地　蔵	1591？	没　年
生駒親正墓	高松市錦町	×	五輪塔	1606	刻　字
生駒親正夫人墓	高松市錦町	×	五輪塔	1606	刻　字
生駒一正墓	高松市番町	×	五輪塔	1610	没　年
生駒正俊墓	高松市番町	×	五輪塔	1621	没　年
佃義成（川南肥前守）墓	香川郡香川町大野中坪	×		1547	没　年
行基さん	綾歌郡綾歌町富熊	×	板　碑	1525	刻　字
西谷藤兵衛墓	多度津町仲ノ町	×	多層塔	1557	没　年
三野菊右衛門墓	善通寺市吉原町	×	五輪塔	1619	没　年
宥　厳　墓	仲多度郡琴平町琴平	×	五輪塔	1600	没　年
宥　盛　墓	仲多度郡琴平町琴平	×	五輪塔	1613	没　年
生駒一正供養塔	三豊郡三野町大見	×	五輪塔	1610	没　年
細川頼弘墓	三豊郡仁尾町仁尾	×	五輪塔	1579	没　年
山崎宗艦供養塔	観音寺市八幡町	×	五輪塔	1553	没　年
財田常久墓	三豊郡財田町財田中	×	五輪塔	1578	没　年

表２　中世後半の紀年銘石造物



（S＝1／20）

図24　金毘羅宮別当　宥厳（左＝1）宥盛（右＝2）の五輪塔

製の石造物との関わりが主たる要因となっており、それが豊島型五輪塔の生産と流通に関わる問題として重要な視点であることが指摘できる。また、一方でⅠ期においては香川県内への広域流通と、その形態的独自性が指摘でき、歴史的展開を理解する上ではこうした広域流通と形態的独自性をもつようにいたった過程の検討が重要になってくる。そこで次節からは、豊島型五輪塔の生産、流通の歴史的検討として、第１に豊島型五輪塔成立の前段階の様相を検討し、第２に豊島型五輪塔の最盛期から消滅にいたるまでの展開を考察する。

３．　豊島型五輪塔出現前夜の様相　―中世後半における石造物について―

⑴　紀年銘石造物からの検討

編年では豊島型五輪塔が17世紀初頭に出現することが明らかとなった。本節では出現背景の検討としてその前段階の具体的様相を検討する。検討方法は、紀年銘や被供養者の没年等から造立年が推定される石造物を中心に15世紀から17世紀の事例を取り上げ、その形態における豊島型五輪塔との比較と石材において豊島石が用いられているか否かに注目する。

造立年が推定される石造物は24例で、高松以東が14例、高松から西が10例である。石材は、高松以東では15世紀段階において豊島石が２例、豊島石以外が４例確認され、豊島石は主体とはいえない。石材の多くは「白粉石」で知られている火山の凝灰岩である。また、形態も豊島型五輪塔のような特異性は認められないものの、豊島石の五輪塔では台石や火輪の形態、空風輪の別石等で萌芽を確認できる。16世紀は資料数が少ないものの確認している３例中２例は豊島石である。ただ、形態は地蔵と板碑である。17世紀初頭は生駒家歴代当主の墓において超大型五輪塔が確認されるが石材は豊島石ではない。一方、高松から西は15世紀の事例は現状で確認できていない。16世紀は６例あるが豊島石はなく在地の凝灰岩である。17世紀初頭も同様に在地の凝灰岩が用いられている。中でも金毘羅宮歴代別当墓において宥厳、宥盛の五輪塔（図25）は没年から1600年と1613年の造立が推測されるが、墓地内にはⅠ期の豊島型五輪塔もあり、おおよそ17世紀初頭に在地の凝灰岩から豊

島石への画期があると思われる。形態的には宥厳、宥盛も豊島型五輪塔とは大きく異なるが、空風輪が別石からなる点は豊島型五輪塔との類似性を指摘できる。宥厳の五輪塔では空輪、風輪ともに曲線的な立ち上がりとなっている一方、宥盛の五輪塔は風輪がまだ曲線的な立ち上がりであるものの、空輪はほぼ直線的になっている点で豊島型五輪塔への変化が想定できる。

以上からは豊島型五輪塔成立の前段階は、①豊島石を用いた例はあるものの、在地の凝灰岩を用いたものが主体となっており、豊島型五輪塔への段階的な変化は確認されず、豊島型五輪塔の成立は材質的、形態的にも急激な変化として捉えられる。ただ、②豊島石を用いた五輪塔は、台石の存在、空風輪の別石で豊島型五輪塔の属性が確認できるが、特徴ある火輪や内部の空洞は認められず、法量も小型であることからヒヤタスがある。一方、法量からは、③一般的に豊島型五輪塔と比較して小型である中で生駒家関係の石造物には超大型例が確認される。また、高松市法泉寺にある生駒一正、正俊の五輪塔は豊島石ではないが形態的には豊島型五輪塔であり、豊島型五輪塔の出現背景として生駒家との関わりが推測される。そこで以下では特に②、③の指摘についてさらに深く追求していきたい。

⑵　豊島石を用いた石造物について

まず、豊島石の香川県内における搬出開始時期について検討する。香川県内において年号の確認できる事例は高松市神内家墓地の文正元年（1466）銘五輪塔や長尾町極楽寺円瑜の五輪塔（1497年）があり、豊島には文明６年（1474）銘の家浦八幡神社の鳥居がある。さらに、五輪塔において軒反りのある例は確認できないことからおおよそ15世紀中頃からが推測される。従って、豊島型五輪塔の普及する１世紀半前から豊島石の搬出は指摘される。では中世後半段階において豊島石を用いた石造物は県内でどの程度普及しているであろうか。高松市中山町の原荒神五輪塔群や高松市香西の善光寺五輪塔群、芝山五輪塔群、宇佐神社五輪塔群では数基確認され、他に屋島寺や下田井町、木太町等高松市内で散在的な分布が確認できる。一方、木田郡から東は火山石など在地の凝灰岩を用いた石造物が多く確認され、豊島石はほとんど確認されない。また、高松市から西にかけてもほとんど豊島石は認められず在地の凝灰岩が用いられている。ところで、従来白峰寺十三重塔をはじめ豊島石と言われてきた石造物が香川県西部地域には数例あるが、これらは材質的に豊島石とは異なるものであり、おそらく多くが弥谷・天霧山からの採石が想定される。これについては県内の石造物の凝灰岩を分類した別稿を準備しているのでここでは詳説しないが、本稿では香川県西部地域に豊島石はほぼ皆無であることを指摘しておきたい。このように中世後半段階において豊島石は高松市を中心として局地的な分布を呈しており、他地域への広域分布は認められない。さらに、高松市内においても弥谷・天霧山からの凝灰岩は多く確認され、使用石材の割合では豊島石より高い傾向がある（表３）ことから、豊島石を主体とした分布地域は明瞭に見出し難いことが看取される。

香川県内には火山や八栗山、弥谷山、郷獅山等10数ヶ所の石切場が確認されている。中世段階は各石切場からの採石が認められ、その中で豊島石も一地域において一躍を担っていたと考えられる。17世紀初頭の豊島型五輪塔の普及はこうした局地的な流通を担っていた豊島石の突然の拡大であり、県内における多くの石切場の終焉に帰結する石材流通システムの大きな変化として評価することがで

名　称	所在地	豊島石	弥谷・雨霧山	豊島石の割合(%)
善光寺五輪塔群	高松市香西西町	38	14	73
宇佐神社五輪塔群	高松市香西西町	16	43	27
芝山五輪塔群	高松市香西北町	34	48	41
原荒神五輪塔群	高松市中山町	22	77	22

表３　高松市香西地域における豊島石製品の割合
（五輪塔は各輪それぞれカウントした）

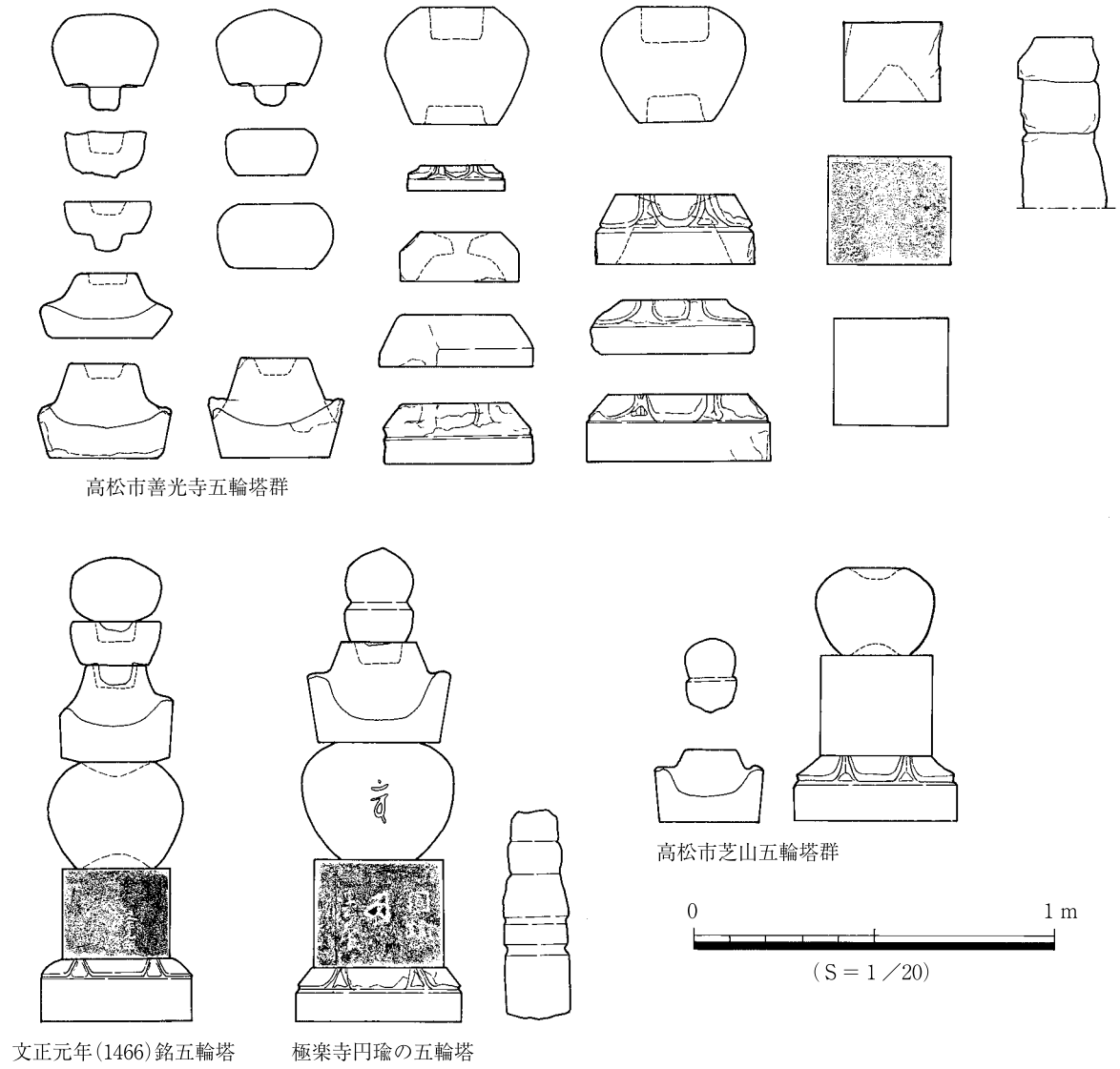


図25　中世豊島石の五輪塔

きる。

次に中世における豊島石の五輪塔の形態的特徴から豊島型五輪塔への系譜を検討する。先に中世における豊島石の五輪塔は豊島型五輪塔と台石が認められる点、空風輪が別石からなる[4]点で共通し、火輪の形態、内部を空洞にしていない点で相違していることを指摘したが、その他の属性の具体的な共通点と相違点について個別に確認したい。

①　文正元年（1466）銘五輪塔　図25

高松市西植田町の神内家墓地内に造立されている。五輪塔は割石の集積上にあり、台石から空輪までが組み合わさっている。法量は総高128㎝を測り豊島型五輪塔に比較して小型である。空風輪が別石である点、台石が確認される点で豊島型五輪塔との共通性がある。

台石は抑揚のない蓮弁が刻されているが、蓮弁の模様構成は豊島型五輪塔のⅠ期に継承されている。水輪は上下端面がわずかに窪んでいるが、空洞化には至っていない。火輪は軒隅の突出は確認できず、豊島型五輪塔とは大きく異なる。形態的にはごく一般的な五輪塔の火輪を呈しており、県内の他地域の五輪塔火輪と大きな差は見出せない。風輪は一石からなる。側面において曲線を描き

ながら立ち上がっているが、こうした特質は豊島型五輪塔には認められない特徴である。寧ろ同時期の弥谷・天霧山の石材を用いた五輪塔にしばしば共通する。空輪も同様で曲線的な立ち上がりをしながら上端に至っている。

② 長尾町極楽寺円瑜の五輪塔（1497年）　図25

長尾町極楽寺墓地の中に数基の中世五輪塔が造立されている。中でも隆珍、珍光、円瑜の歴代住職の墓は地輪にその名前が刻されており、一列に並んでいる。現状で台石から空風輪まで残存しているが、隆珍墓の地輪下に認められる台石が豊島石であり、先の文正元年（1466）銘五輪塔と類似していることから、当台石を円瑜墓のものと判断した。総高132㎝を測る。台石が認められる点で豊島型五輪塔との共通性がある。

形態的特徴としては火輪が注目される。軒口上辺は軒隅にかけて丸みをもって大きく立ち上がっており、わずかな突起を呈していることから豊島型五輪塔への萌芽が認められる。ただ、豊島型五輪塔とは屋根が下方に広がる点と、軒口と屋根の境に段を有さない点で相違する。空風輪は１石からなり、豊島型五輪塔と相違する。

③ 高松市善光寺五輪塔群　図25

立石の大岩の周辺に数基の五輪塔が各部ばらばらの状態で安置されている。その中の１つの地輪に刻字が確認できる。刻字はおそらく３行にわたってあったものと思われるが、中央については全く判読できない。向かって右側の刻字は「□嶽長栄」とあり、被供養者の可能性があり、右側は「天文□□九月廿九日」から天文年間（1532～1555）の造立が推測される。刻字例は１例のみであり、この善光寺五輪塔群の個々の造立時期は断定しかねるが、おおよそ16世紀が推測される。

台石は約６基認められ、蓮弁の認められる例が多い。蓮弁の構成はⅠ期古段階の豊島型五輪塔に継承されるタイプである。一方、文正元年（1466）銘五輪塔や長尾町極楽寺円瑜の五輪塔（1497年）の事例とは蓮弁の端部が若干丸くなり、相対的に抑揚のある表現となっている点に変化が指摘できる。水輪は上面と下面の両面に幅20㎝、深さ５～10㎝程度の刳り抜きが認められることから、Ⅰ期古段階の豊島型五輪塔と共通する。火輪は豊島型五輪塔の形態とは異なる。軒隅が若干突出する例はあるものの、豊島型五輪塔の突起には程遠く、また、箱形の屋根や、軒口と屋根の境にある段は認められない。風輪と空輪は別石であるものの、側面が曲線的に立ち上がることからはまだ豊島型五輪塔の形態には至っていない。ただ、空輪の形態は文正元年（1446）銘五輪塔のものに比べ直線

	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	31～35	36～40	41～45	46～50	51～55	56～60	61～65	66～70	71～75	76～80
香川家歴代墓	0	2	16	12	1	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0
興隆寺跡五輪塔	0	3	12	28	4	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0
超大型五輪塔	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1	1	1
豊島型五輪塔Ⅰ期	0	0	0	2	12	21	21	9	3	0	2	0	0	0	0

表４　水輪の法量

	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	31～35	36～40	41～45	46～50	51～55	56～60	61～65	66～70	71～75	76～80
香川家歴代墓	0	3	12	6	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
興隆寺跡五輪塔	2	20	29	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
超大型五輪塔	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	2
豊島型五輪塔Ⅰ期	0	0	1	1	14	35	27	13	2	1	1	0	0	0	0

表５　地輪の法量

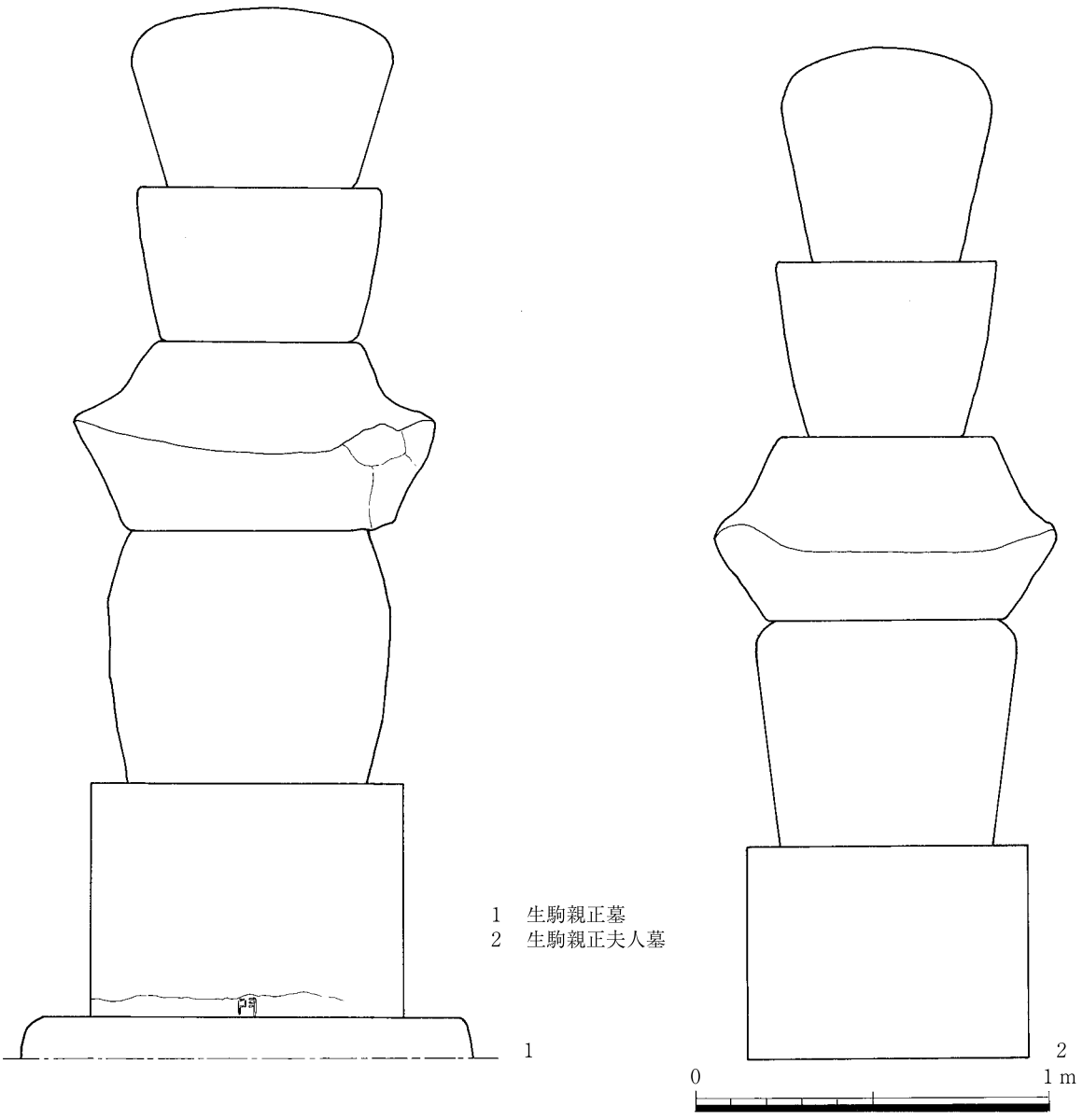


図26　超大型五輪塔(1)　（S＝1／20）

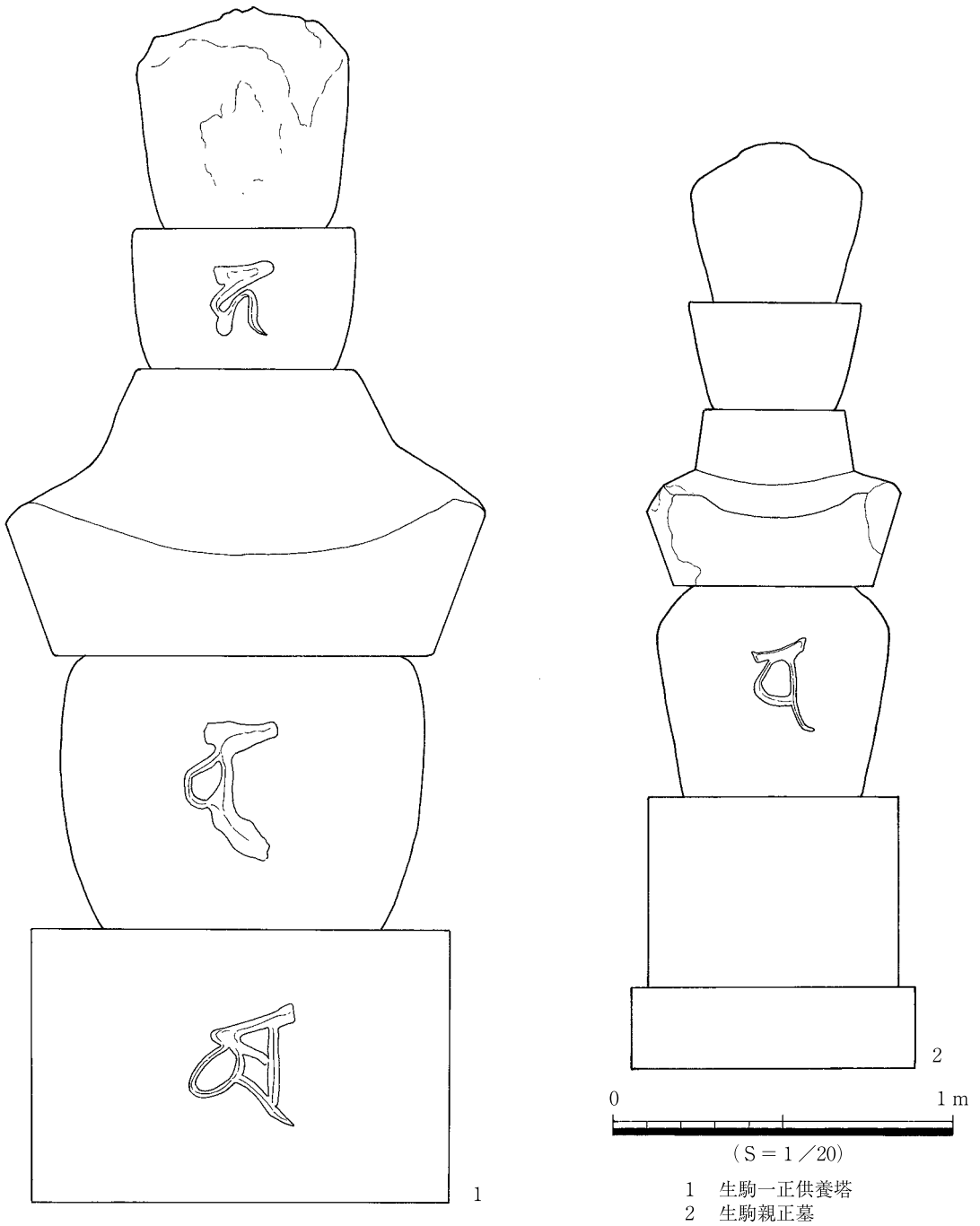
に近づいており、形態変化は認められる。

④ 高松市芝山五輪塔群　図25

芝山の西側山裾に五輪塔の部材が多数集められている。石材は弥谷・天霧山のものが多数を占めるが、中に豊島石も確認される。図は豊島石五輪塔の一部である。

芝山には造立年に関わる年号の刻字は確認できないが、図示したものは、台石の蓮弁の表現方法、水輪の上下端面がわずかに窪んでいること、火輪において軒口上辺が丸くカーブしながら軒隅に至りわずかな突起を有する、空風輪が一石からなる点で文正元年（1466）銘五輪塔や長尾町極楽寺円瑜の五輪塔（1497年）の事例に類似している。よって、図示した五輪塔の年代は15世紀中頃から後半が想定される。

以上、中世における豊島石の五輪塔を見てきたが、台石の存在、台石の蓮弁の表現、刻出方法、空輪・風輪の別石で豊島型五輪塔との系譜を指摘できるものの、火輪の形態、地輪の方形状の孔、



1　生駒一正供養塔
2　生駒親正墓

図27　超大型五輪塔(2)

水輪の空洞化、総高の大型化は認められず、豊島型五輪塔の形態的特徴からはヒヤタスがある。前述した分布的な偏在性の問題も合わせて、豊島型五輪塔出現の背景は豊島石の五輪塔の系譜のみでは解決できない。豊島型五輪塔は香川県のみならず岡山県まで分布が確認されており、こうした広域分布を可能にした背景は岡山県の様相も確認しながら明らかにしていく必要があろう。本稿ではこうした課題を残しつつ、香川県内の資料からもう少し問題を深化していきたい。

(3)　超大型五輪塔の出現とその評価

次に豊島石から一旦離れ、香川県内の中世から近世に至る石造物の動向に注目する。

私は別稿において16世紀末から17世紀初頭にかけて総高300㎝を超える超大型五輪塔が香川県内

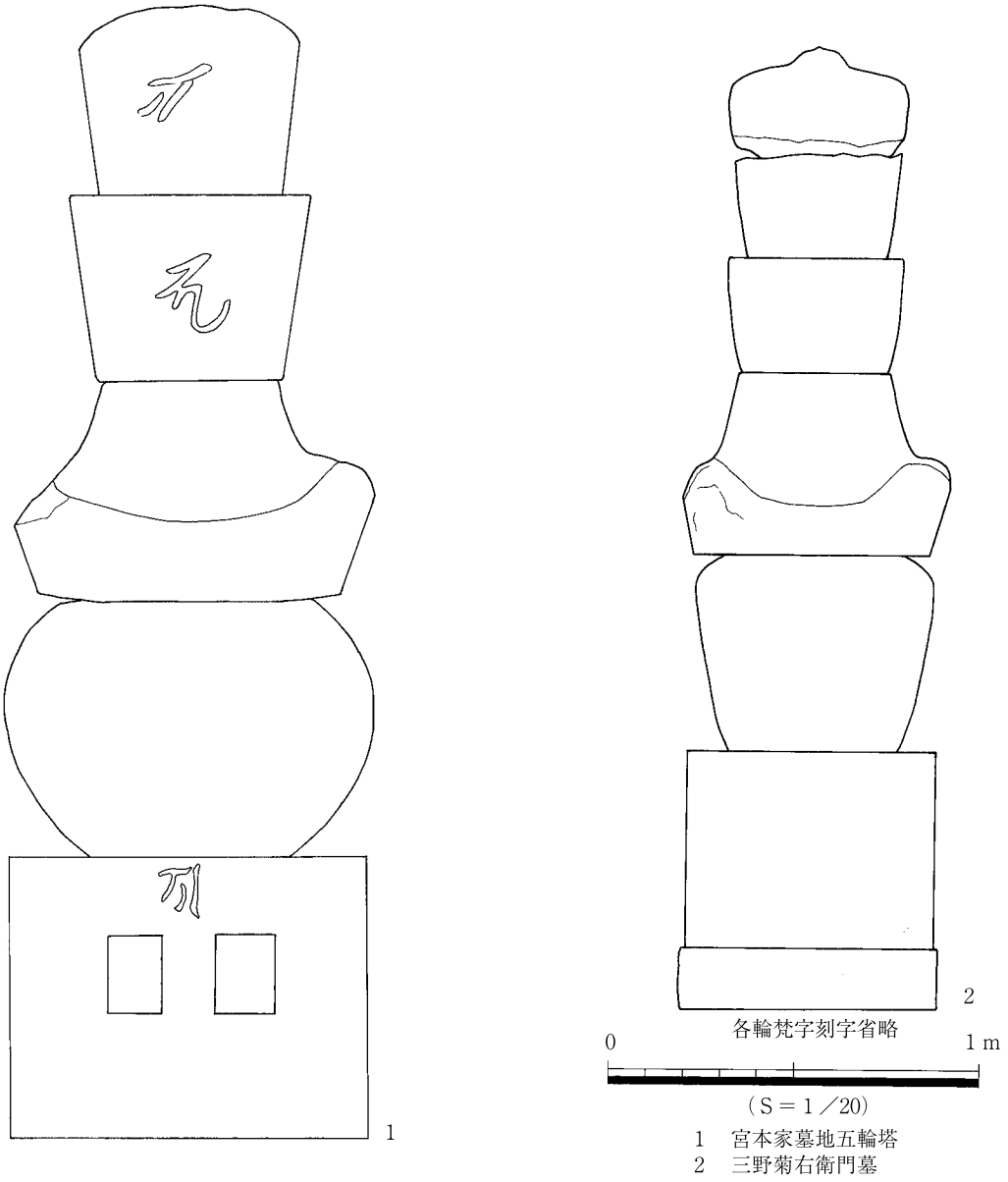


図28　超大型五輪塔(3)

で確認できることを指摘した（松田2001・2002）。その事例として、高松市弘憲寺生駒親正夫妻墓、志度町生駒親正墓、三野町弥谷寺生駒一正供養塔、善通寺市曼荼羅寺三野菊右衛門墓、善通寺市善通寺歴代住職墓、丸亀市本島宮本家墓を紹介したが、本節ではこうした超大型五輪塔について再び俎上にのせる。

①法量

法量を確認していない善通寺歴代住職墓を除いて他はおおよそ総高200㎝後半から300㎝である。この規模についてどのような歴史的位置付けができるのか、まず、中世五輪塔とⅠ期の豊島型五輪塔から比較する。

分析は総高の比較が望ましいが中世五輪塔は総高を確認できる各部の完存した例に乏しい。そこで、分析部位として形態的類似性のある水輪と地輪を検討する。分析は水輪と地輪のそれぞれの高さを計測した。

まず、中世五輪塔として三野町弥谷寺にある香川氏歴代墓と豊中町興隆寺跡五輪塔群を取り上げる。両者ともに中世前半から後半にかけての造立時期が推測される。法量は水輪において16㎝から25㎝が多い一方31㎝以上は少数である（表４）。地輪も同様で16㎝から25㎝が多い（表５）。

次に超大型五輪塔では全て50㎝から80㎝であり、中世五輪塔からは著しい大型化である。豊島型五輪塔Ⅰ期は超大型五輪塔からは小さいものの、その多くは25㎝以上であり、中世五輪塔で主体であった21㎝から25㎝の例は少ない。従って、中世五輪塔から見れば豊島型五輪塔は大型化として指摘できる。

このように超大型五輪塔は中世五輪塔からの著しい大型化として位置付けられ、近世豊島型五輪塔にやや規模を減じて継承されることが指摘できる。そして、こうした大型化の背景としては死者供養の対象物から「見せる五輪塔」として個人・集団のシンボル的なものとしての墓観念の変化が想定され、豊島型五輪塔の出現の背景に重要な要素であったと思われる。

②形態

超大型五輪塔の形態的特徴から豊島型五輪塔との比較を試みる。まず、台石は生駒親正墓や三野菊右衛門墓で確認される一方、弥谷寺生駒一正供養塔、丸亀市本島宮本家墓では認められない。台石の形態は生駒親正墓、三野菊右衛門墓ともに高さの低い方形状を呈しており、豊島型五輪塔で認められたような繰方座の形態は認められない。このような高さの低い方形状の台石は在地産の五輪塔において数は多くないもののしばしば確認できるが、豊島型五輪塔や中世における豊島石の五輪塔では認められない。地輪は法量を除けば中世豊島の五輪塔やその他の材質の中世五輪塔と大差ない。一方、地輪正面に方形状の孔を穿った例が丸亀市本島の宮本家墓で確認され、地輪正面に16×22㎝の方形状の孔が２つ並列して穿っている。現在、孔内には遺物、遺骨等は確認できないが、豊島型五輪塔でしばしば認められるものと同様の性格を有すると推測したい。水輪は宮本家墓を除けば全て筒型を呈している。こうした筒型の形態は金毘羅宮別当の宥厳墓や宥盛墓（図24）も同様であり、超大型五輪塔のみに限定されるものではなく、17世紀初頭における水輪形態の特質として位置付けることができる。豊島型五輪塔ではこうした筒型の水輪は少ないが、その中でⅠ期古段階に位置付けられる高原利次夫人墓で確認されるのは時期的に附合する（図４－１）。ただ、全体からみれば豊島型五輪塔に継承されることはなかったことを確認しておく。内部に関しては大型のため確認できていない。風輪と空輪は別石からなる点で豊島型五輪塔と共通する。また、それぞれの形態も側面において直線的な立ち上がりを呈しており、豊島型五輪塔出現の前段階に超大型五輪塔においてこうした風輪、空輪の形態的特徴は完成していたことが指摘できよう。最後に火輪であるが、形態は数タイプに分類可能である。詳細な分類は後述するが、ここでは志度寺の生駒親正墓を取り上げたい。前稿（松田2001）においても指摘したが、この生駒親正墓の火輪は豊島型五輪塔に系統的につながる。形態的特徴としては屋根が直線的に下方に広がり、軒口との間に傾斜する段をもっている。こうした特質はⅠ期古段階における火輪ＫＡ１ａと共通する要素であるが、段が傾斜をもつ点と軒隅の突起が認められない点が豊島型五輪塔の形態に至っていない要素である。このように、中世豊島の五輪塔にはヒヤタスのある火輪の形態において志度寺の生駒親正墓ではその萌芽を指摘できる。つまり、形態的には豊島型五輪塔の出現背景として中世豊島石の五輪塔に加えて超大型五輪塔の影響が指摘できる。

③石材

前稿では生駒家歴代当主の墓に用いられた石材として角礫が多く含まれる点で豊島石と共通しているものの、白色の部分を多く含むことから別材の可能性を示唆していた（松田2001）。本稿では以降の調査の進展によってこれらの材質が天霧山の南斜面に位置する善通寺市碑殿町で採石される凝灰角礫岩であるとの結論に至った。この碑殿町の石材は地元で十五丁石として知られており、土井卓治は丸亀市本島宮本家墓や善通寺歴代住職墓に使用されたことを指摘している（土井1972）が、本稿ではこれら超大型五輪塔すべてが碑殿産、つまり、十五丁石が用いられていることを指摘したい。

以上、超大型五輪塔について検討してきたが、これら五輪塔が墓観念や形態的要素で豊島型五輪塔と深く関わっていることが明らかとなった。ところで、こうした超大型五輪塔は藩主生駒家との関わりが深く、生駒親正夫妻墓、生駒一正供養塔など、超大型五輪塔10基中４基が生駒家に関わるものである。そして、超大型五輪塔ではないが、高松市法泉寺の生駒廟に安置されている生駒家２代一正、３代正俊の五輪塔は、形態において豊島型五輪塔を呈しており重要である。そこで次に生駒家２代・３代当主の五輪塔を中心として生駒家と豊島型五輪塔との関わりに注目してみたい。

⑵生駒家当主の五輪塔と豊島型五輪塔

生駒家２代・３代の五輪塔は高松市法泉寺内の生駒廟に安置されている。生駒廟内には総高80㎝程度の小型の五輪塔が２基並列しているが、これら２基の五輪塔の形態が豊島型五輪塔である。その詳細な記述に関しては前稿において指摘したのでここでは触れず、豊島型五輪塔との関わりについて述べる。

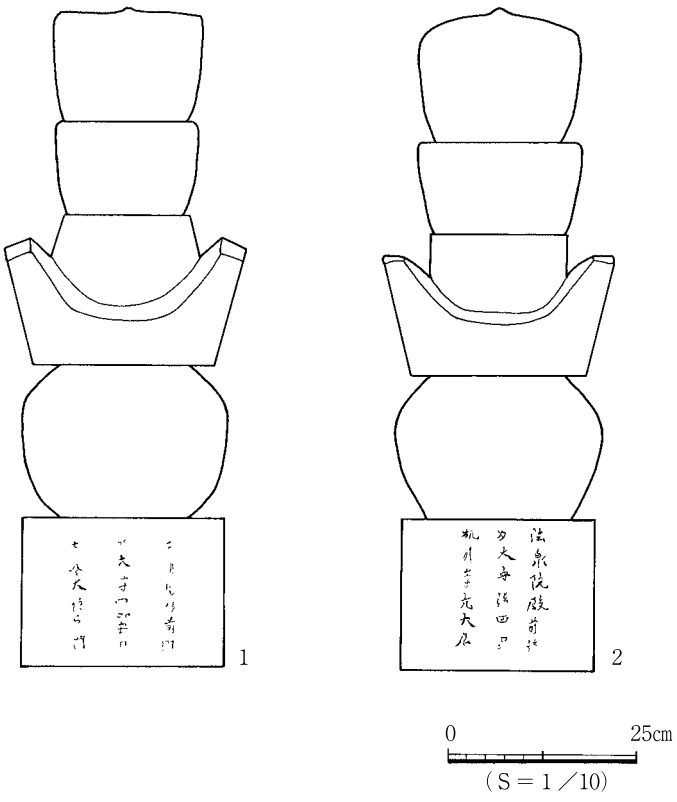


図29　生駒一正(左=1)、正俊(右=2)五輪塔

①生駒一正五輪塔（1610年没）

火輪はＫＡ１ａであり、全くの豊島型五輪塔の形態である。空輪、風輪も豊島型五輪塔の範疇で考えられるが、側面において若干曲線的な立ち上がりをしている点は古相として評価できよう。空輪はＫＵ１に分類される。水輪は上位と下位にそれぞれ屈曲点を有し、両屈曲点から端面にかけては曲線を描きながら急傾斜ですぼまる。ところで、このような形態は豊島型五輪塔では確認できず、類例としては仁尾町金光寺にある細川頼弘墓があり、同様の水輪形態を呈している。細川頼弘は1579年に没していることから、一正五輪塔



図30　細川頼弘五輪塔
（Ｓ＝1／20）

における水輪の形態は16世紀段階の特徴を残したものと考えたい。次に台石は現状において認められないが、おそらく当初から存在しなかったと思われる。

このように一正五輪塔は豊島型五輪塔には認められない属性も認められるものの、おおよそは豊島型五輪塔として考え得る形態的特徴を有している。ところが、石材に関しては豊島石ではなく、採石場所は善通寺碑殿町の可能性が高く、生駒親正をはじめとする超大型五輪塔と共通する採石場が想定される。ここに豊島型五輪塔との根本的な相違点がある。

②生駒正俊供養塔（正俊1621年没）

火輪はＫＡ２ａであり、一正五輪塔と同様に豊島型五輪塔の形態である。空輪、風輪も豊島型五輪塔の範疇で考えられるが、一正五輪塔同様に側面において若干曲線的な立ち上がりをしており古相として評価できる。空輪はＫＵ１に分類される。一方、水輪は一正五輪塔とは異なり、豊島型五輪塔にも認められる形態である。台石は依然として認められない。全体的には一正五輪塔よりも多く豊島型五輪塔の特徴を備えている。ただ、この正俊塔も一正五輪塔同様に石材は豊島石ではなく、善通寺市碑殿町が想定される。従って、正俊五輪塔も豊島型五輪塔との根本的な相違点が指摘できる。

このように両塔は豊島型五輪塔のⅠ期古段階に位置付けることが可能であるが、台石が認められないことと、石材が豊島石でない点で豊島型五輪塔との相違点がある。一方、生駒家当主の墓の形態変遷としては前稿において指摘したように、志度寺生駒親正墓→法泉寺生駒一正供養塔→法泉寺生駒正俊供養塔の系譜が考えられ、豊島型五輪塔の出現に至ると思われる。



写真１　弥谷寺の磨崖五輪塔



写真２　天霧山の磨崖五輪塔

ところで、これら生駒家の五輪塔に関してすべてが天霧山からの採石であり、中でも三野町弥谷寺にある２代生駒一正の五輪塔（図25－１）は注目すべき点がある。なぜならば、造立場所の弥谷寺は生駒一正によって再興されており、造立場所の弥谷山と使用石材の採石地である天霧山と生駒家との深い関わりが指摘できるからである。

まず弥谷山と天霧山の関係について検討する。弥谷寺の立地する弥谷山は一正五輪塔の石材採石場である天霧山とは東西に接しており、地理的な弥谷山と天霧山との関わりが想定できる。次に、弥谷寺は現在確認される転石や露頭面からは中世において凝灰岩の採石地であったことが指摘できるが、香川県内の中世五輪塔の分布からは西は豊浜から東は高松東部までの広い

範囲に中世前半から後半にかけて搬出が指摘できる。一方、天霧山の凝灰岩も中世前半から後半にかけて弥谷山と同様な分布が指摘でき、材質的な類似性ともに両者が非常に深い関わりの中で採石を行なっていたことが想定される。両者の共通点はさらに凝灰岩の露頭や転石に刻出された五輪塔において確認される。こうした磨崖五輪塔は香川県内では弥谷寺、天霧山南面の碑殿周辺、牟礼町八栗寺のみに確認される。八栗寺の事例の紹介・歴史的評価は別稿に譲るとして、本稿では弥谷寺と天霧山南面の碑殿周辺の事例を比較してみたい（写真１・写真２）。まず、弥谷寺には複数の磨崖五輪塔が認められ、特に本堂の周辺には顕著である。大多数の五輪塔は形態において共通している。一方、天霧山の磨崖五輪塔は弥谷寺のそれに比べて、①火輪の軒隅が突出している、②空輪が大型化している、③水輪が扁平化している点で相違点が指摘できる。特に①②は近世的様相を呈しており、両者の形態差は時期差である可能性が高い。つまり、刻出五輪塔の系譜からは弥谷山（弥谷寺）→天霧山への変遷が推測される。では、なぜこのような時期差が看取されるのであろうか。現状では推測の域を出ないものの、弥谷山から天霧山への採石中心部の移動を想定したい。両者ともに中世段階からの採石は想定されるが、中世段階においては刻出五輪塔の存在から弥谷山が採石の中心地であったと推測する。弥谷山には現在も香川家の歴代墓が認められ、また、弥谷寺は香川家の菩提寺であったことから、信仰と密接に関わった五輪塔製作のための採石が想定される。一方、天霧山は天霧城の存在から城郭的性格が強く、採石の程度は今後検討しなければならないものの、弥谷山には劣るものと想像する。こうした中、16世紀後葉に長曽我部氏の進攻によって弥谷寺は荒廃する。そして、その荒廃した弥谷寺を再興したのが上述した生駒一正であった。この生駒一正による再興は寺内の景観を一新するものであったようであり[5]、こうした再整備の中で信仰の場としての弥谷寺と採石の場としての天霧山が分化したものと推測したい。

以上のような弥谷山、天霧山、生駒家の関わりが推測されるが、その生駒家の五輪塔に形態的影響を受けるのが豊島型五輪塔であった。このことは、豊島型五輪塔の祖型となるべき要素が弥谷寺に見出せることからも看取される。例えば、弥谷寺の刻出五輪塔の数例には地輪に方形状の孔が穿たれているものがある。この孔からはかつて遺骨が確認されたことから納骨施設である可能性が高い。この弥谷寺に見られる納骨孔が豊島型五輪塔の地輪にしばしば確認される方形状の孔に系譜的につながるものと考えたい。なお、こうした孔は弥谷寺に安置されている宝篋印塔にもわずかながら確認できる（写真３）。

以上、超大型五輪塔、生駒家歴代当主墓、弥谷寺や天霧山の石切場からは、豊島型五輪塔の祖形と考えられる要素が多く認められ、かつ、その要素は中世豊島石の五輪塔では認められない要素であることが指摘できる。つまり、豊島型五輪塔の成立は中世豊島石の五輪塔からの系譜と上記の要



1　2　3　4

写真３　地輪の方形状の孔（１、２弥谷寺磨崖五輪塔　３弥谷寺の宝篋印塔、４豊島型五輪塔）

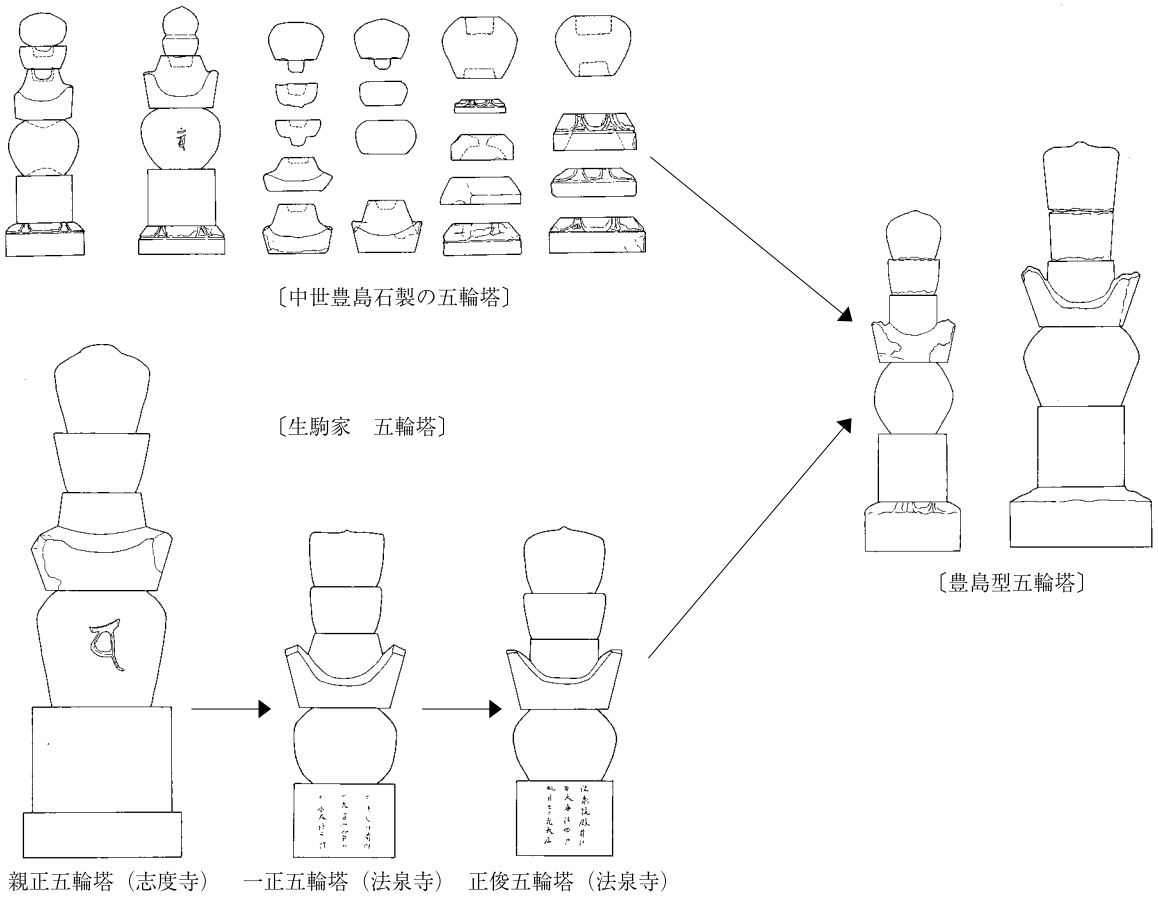


図31　豊島型五輪塔の系譜

素とが複合したものとして理解でき、豊島型五輪塔の成立に伴う広域流通は中世豊島の独自的発展のみではなく、生駒家に関わる弥谷寺や碑殿の採石場との深い関わりの中で実現したものであると考える。そこにおいて豊島石石工集団の編成に生駒藩による何らかの介入を推測したい。当期の県内における多くの石切場の終焉と豊島型五輪塔の広域な搬出は単なる豊島石の流行による経済的側面のみではなく、新しい社会秩序形成を目的とした政治的側面を想定する。

4．　豊島型五輪塔における搬出の歴史的展開とその消滅をめぐって

本節では豊島型五輪塔の出現以降、その衰退消滅にいたる搬出の様相について各期から検討する。

Ⅰ期

Ⅰ期の豊島型五輪塔の分布的特徴として西は琴平町、東は白鳥町にかけての広域で確認されるものの、三豊地域等香川県西部では希薄である点に注目する。続くⅡ期からⅢ期は三豊地域で数例確認されることから、Ⅱ期以降に三豊地域を含めた香川県内全域に豊島型五輪塔が普及することが推測される。本項ではⅠ期に豊島型五輪塔が香川県西部で希薄な要因として「碑殿型五輪塔」を取り上げる。

⑴　碑殿型五輪塔について

香川県西部では豊島型五輪塔に似た近世五輪塔が認められる。風輪と空輪とが別石からなる点で豊島型五輪塔と共通するものの、形態の細部においては相違点が指摘でき、さらに石材は豊島石ではない。分布は現状で多度津町、善通寺市、琴平町、豊中町に認められる。これら五輪塔の採石地は善通寺市碑殿が推測され、高瀬町に所在する七宝山の石材も用られた可能性ある。本稿ではこの

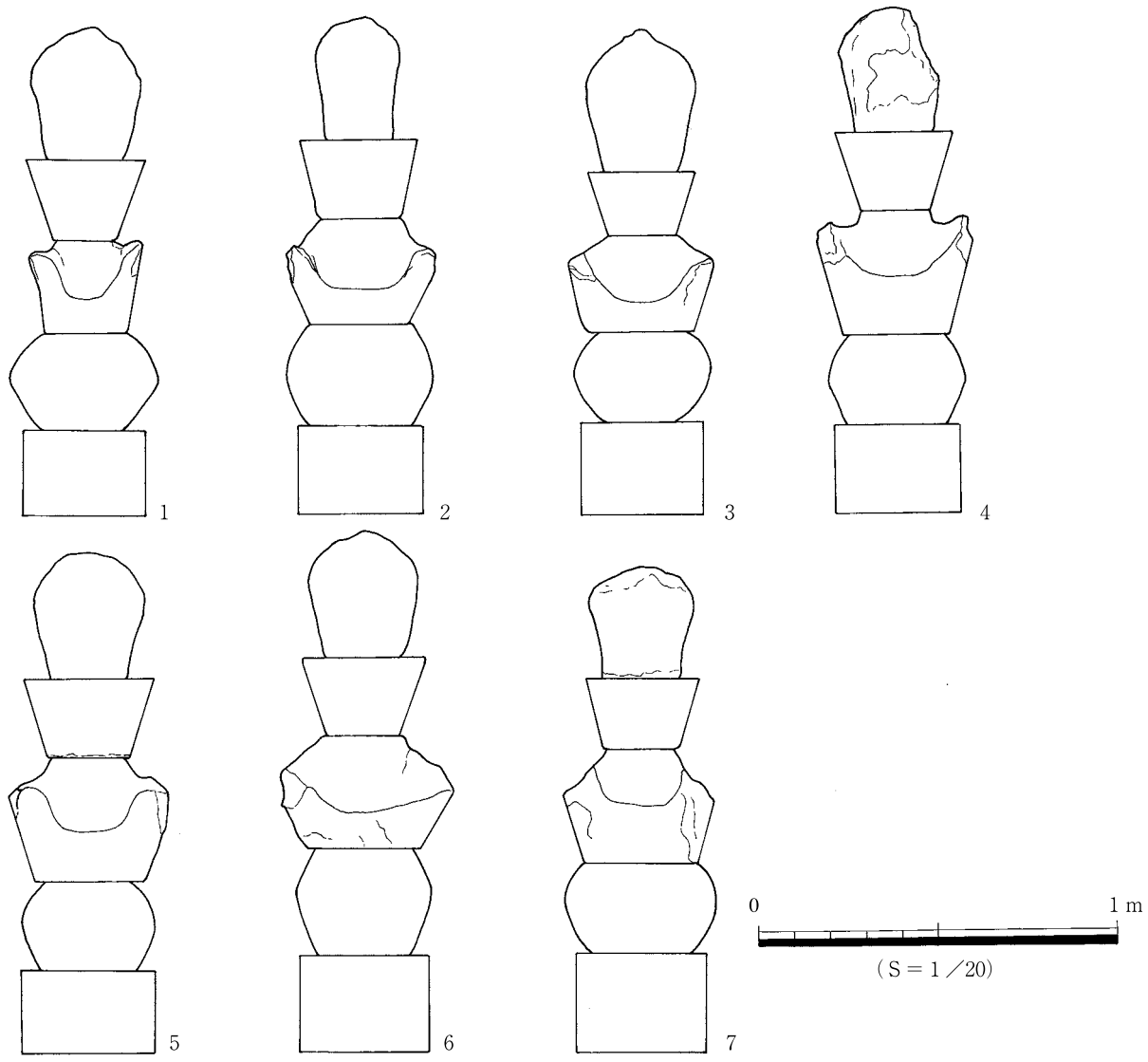


図32　碑殿型五輪塔

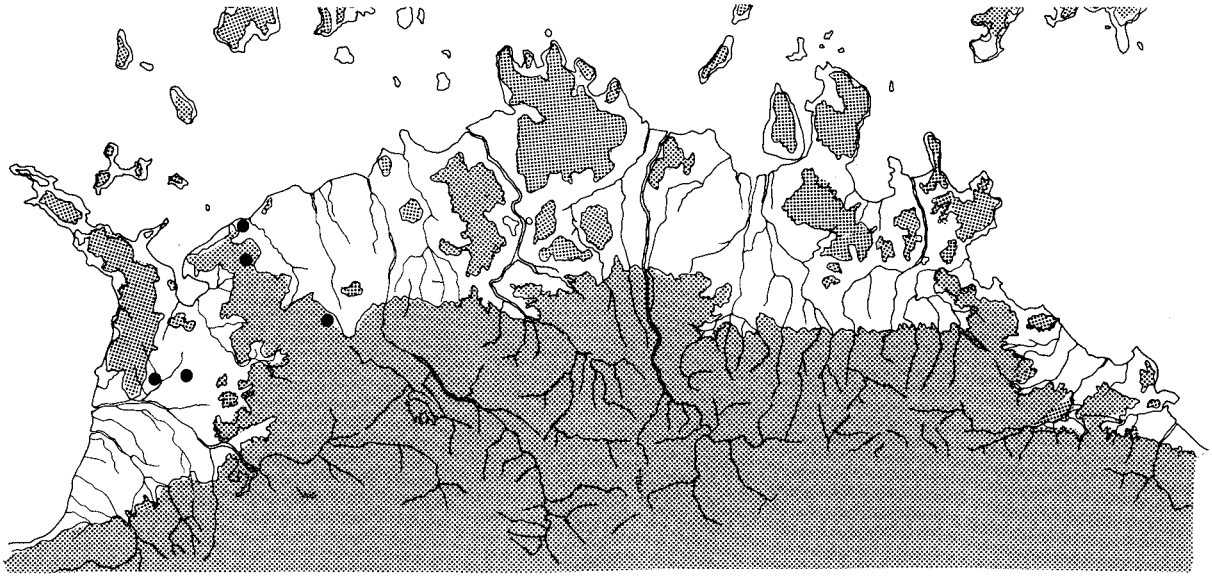


図33　碑殿型五輪塔の分布（1／250,000）

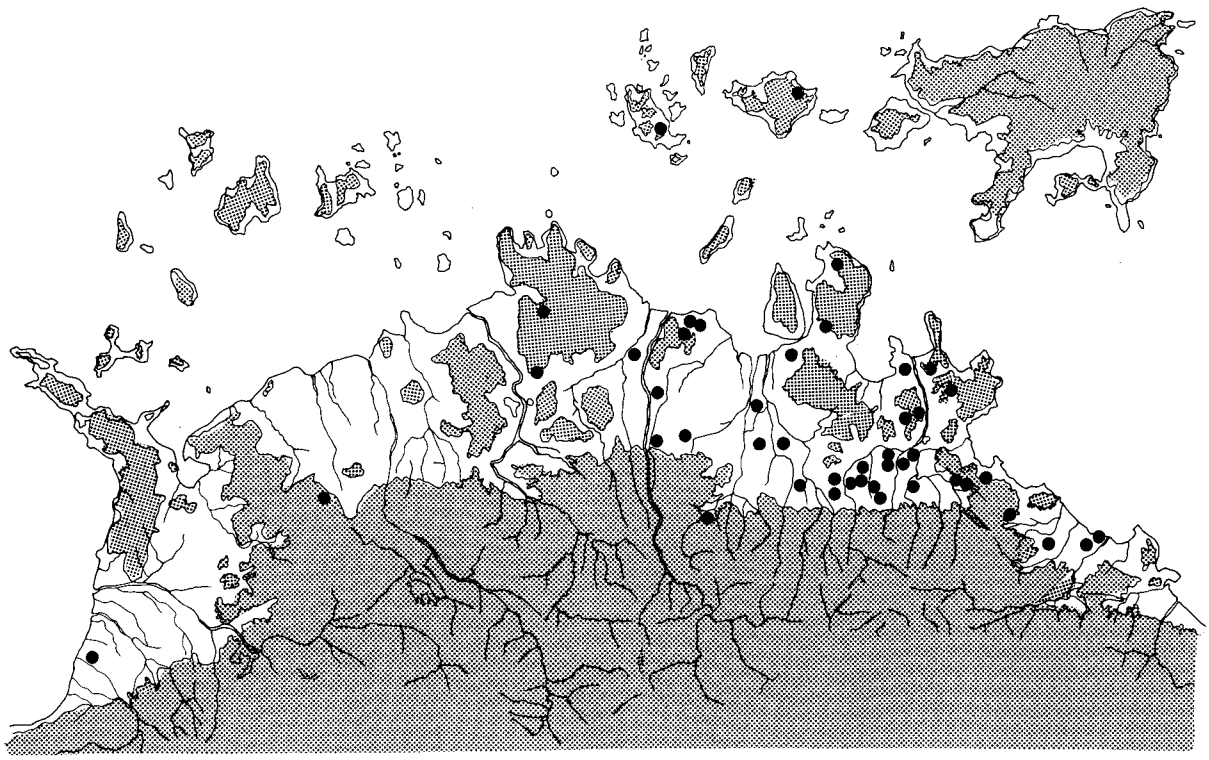


図34　豊島型五輪塔Ⅰ期の分布（1／250,000）

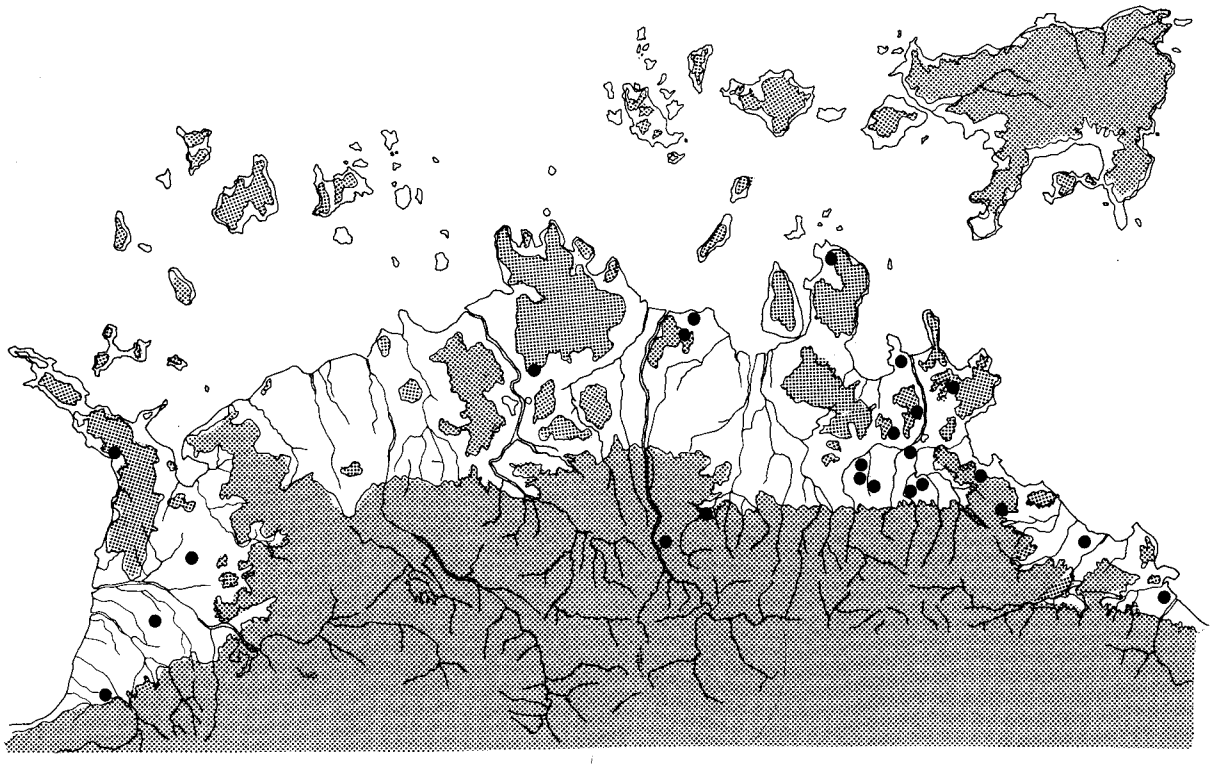


図35　豊島型五輪塔Ⅱ期の分布（1／250,000）

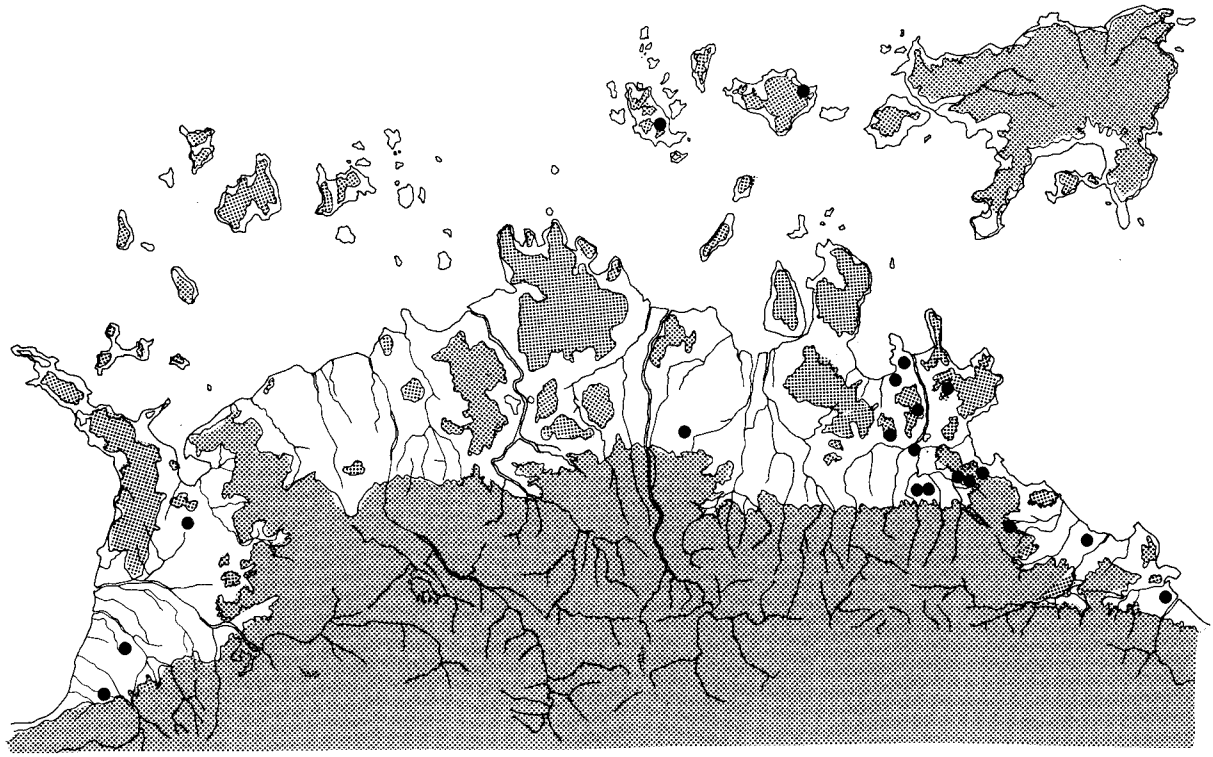


図36　豊島型五輪塔Ⅲ期の分布（1／250,000）

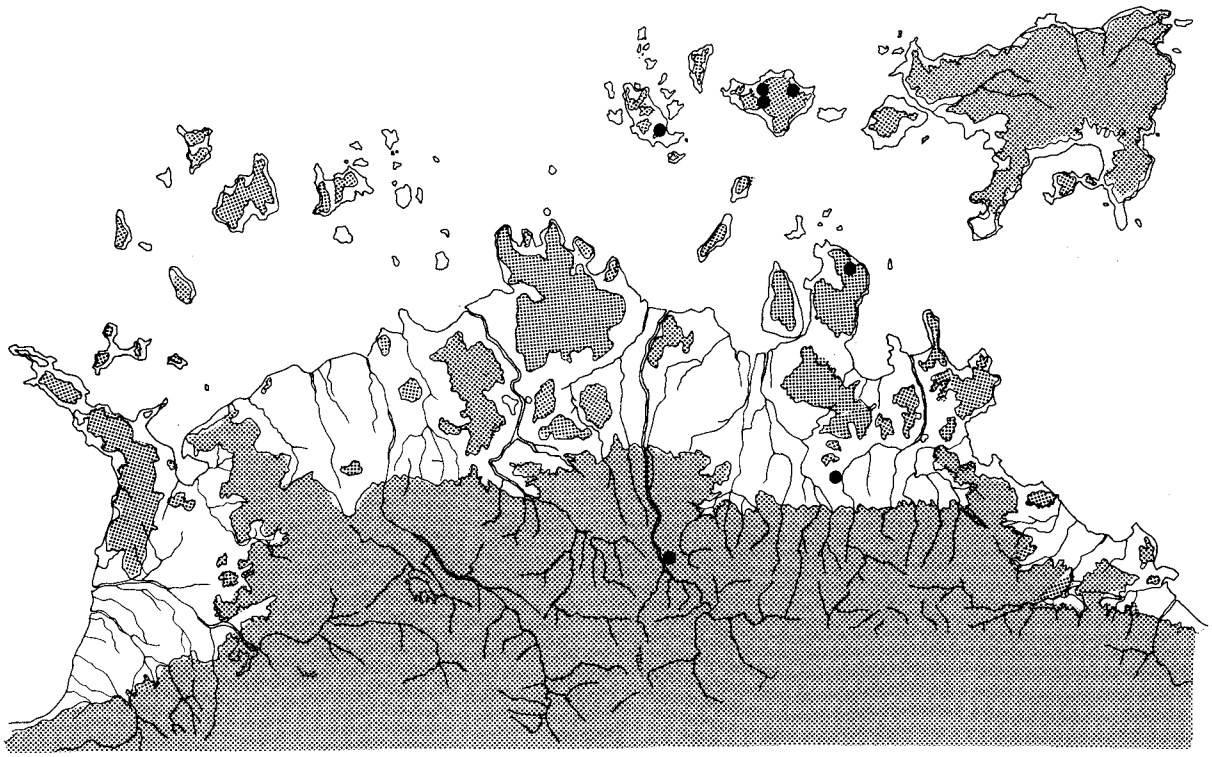


図37　豊島型五輪塔Ⅳ期の分布（1／250,000）

五輪塔を、想定される採石地から碑殿型五輪塔と呼称する。以下では豊島型五輪塔との比較から当五輪塔の具体的特徴を確認する。

図32は多度津町西白方に所在する碑殿型五輪塔である。空輪と風輪は別石からなる点で豊島型五輪塔と共通する。しかし、形態は風輪において上端幅と下端幅に幅差が認められ豊島型五輪塔とは異なる。空輪は縦長で豊島型五輪塔の空輪の分類ＫＵ２に近似している。火輪は軒口上辺が軒隅にかけて大きく立ち上がるタイプと立ち上がりが顕著でないタイプがあり、豊島型五輪塔の火輪とは大きく異なっている。後者のタイプは屋根高が狭く相対的に軒口が高いことから、17世紀初頭造立の高松市弘憲寺生駒親正墓の五輪塔に類似する。そして、両者は採石地が天霧山である点でも共通しており、直接的な系譜が想定される。水輪は全体的に横幅に比して高さが低く、豊島型五輪塔の水輪とは異なるが、最大幅部分が明瞭に屈曲したソロバン形を呈する事例も確認でき、豊島形五輪塔との類似点も認められる。台石は多くの事例において確認できない。法量は豊島型五輪塔よりも小型であり、内部を空洞にした例も認められず[6]、全体的に粗雑な造りである。

碑殿型五輪塔において紀年銘や没年から造立の推測される資料は現状で確認しておらず造立時期の検討は今後の課題であるが、火輪の形態において17世紀初頭の生駒親正墓からの系統が指摘できることや、17世紀に多く確認されるソロバン玉形をした水輪の形態からはおおよそ17世紀の造立が推測される。つまり、香川県西部における碑殿型五輪塔の造立は豊島型五輪塔の造立がⅠ期において確認できない要因として考えられ、この五輪塔の衰退した後に香川県西部へ豊島型五輪塔が広がり始めるものと理解したい。また、火輪の形態からは碑殿型五輪塔の系譜は弘憲寺生駒親正墓が想定され、一方、豊島型五輪塔は志度寺生駒親正墓が想定され、両者ともに生駒家関係の五輪塔の系譜が辿れることは香川県の近世五輪塔の成立を検討する上で重要である。

Ⅱ期

Ⅱ期は豊島型五輪塔が香川県内全域に普及するが、一方で造立数は衰退に向かう。特に高松市姥ヶ池墓地ではⅡ期に至り造立数は激減し、Ⅲ期は皆無である。こうした衰退の背景には花崗岩製の墓標の出現・普及が想定される。姥ヶ池墓地の墓標において、出現は1640年代から確認されはじめ1660年代に数を増す。そして、1690年代には本格的な普及となり、18世紀に造立数は安定する。石材は大多数において花崗岩が用いられ、その中で豊島石の墓標も認められるものの、その数は花崗岩の１割にも満たない。また、花崗岩製の五輪塔も墓標の普及と同様に1660年代から確認されはじめることから、豊島型五輪塔衰退の要因となったものと思われる。高松市法然寺の松平家墓所には多くの近世五輪塔が認められるが、全て花崗岩製であることは上記の指摘を示唆していると思われる。

住職名	没年	墓石の種類
明　範	1376	?
舜　元	1386	?
元　範	1402	?
隆　珍	1421	五輪塔
珍　光	1450	五輪塔
珍　境	1466	?
円　瑜	1497	五輪塔
憲　瑜	1525	?
円　慶	1582	?
秀　雅	1613	?
秀　仟	1633	?
秀　盛	1641	?
秀　念	1642	?
秀　栄	1657	豊島型五輪塔
恵　観	1706	?
義　真	1708	?
円　性	1740	?
観　算	1717	?
堅　確	1737	無縫塔
寂　確	1745	無縫塔
堅　阿	1776	無縫塔
澄　昭	1776	無縫塔
密　確	1809	無縫塔
栄　昭	1812	無縫塔
圭　光	1842	無縫塔
密　範	1856	無縫塔
澄　昇	1872	無縫塔
密　栄	1877	無縫塔
源　澄	1900	無縫塔
宝　澄	1939	無縫塔
政　澄	1978	無縫塔

表６　極楽寺歴代住職

名　前	没年	墓石の種類
元　綱	1603	?
家　勝	1640	?
家　信	1658	?
家　重	1711	?
章　長	1732	宝篋印塔
孝　勝	1768	宝篋印塔
孝　澄	1816	墓標
孝　蔵	1830	墓標
孝　興	1857	墓標
孝　衛	1861	墓標

表７　蓮井家

Ⅲ期

豊島型五輪塔は当期を最後に形態の独自性を失い、豊島外への搬出をほぼ終焉する。本項では搬出の終焉に関する具体的様相を長尾町極楽寺墓地歴代住職墓、寒川町蓮井家墓地から確認する。両墓地にはそ

れぞれ10基以上の豊島型五輪塔が認められ、一方で花崗岩製の墓石も多く確認できることから、豊島型五輪塔から花崗岩製の墓石への変遷が看取される。極楽寺歴代住職墓では、49世堅確（1737年没）以降では花崗岩製の無縫塔が造立されているが、堅確の前の住職である48世観智（1717年没）の墓は確認できない。一方、44世宗栄の墓は豊島型五輪塔であることから、おそらく48世観智までは豊島型五輪塔が用いられていたものと推測する。つまり、豊島型五輪塔の造立は18世紀前半までで、以降は花崗岩製の無縫塔が造立され現在に至っていることが指摘できる。

次に蓮井家墓地をみてみる。蓮井家は1568年に土佐から讃岐に移り、以来寒川町の現在地に住したと伝えられており、江戸時代には大庄屋を勤めている。蓮井家墓地内には11基の豊島型五輪塔が確認できる。家系図[7]において初代元綱（1603年没）から４代家重（1711年没）まではそれぞれに相当する墓標を確認することができない。一方、５代章長（1732年没）、６代孝勝（1768年没）の墓は砂岩製の宝篋印塔が用いられ、７代孝澄（1816年没）以降は砂岩製の墓標が用いられている。よって初代から４代は豊島型五輪塔が用いられた可能性が推測できる。墓石の変遷としては極楽寺住

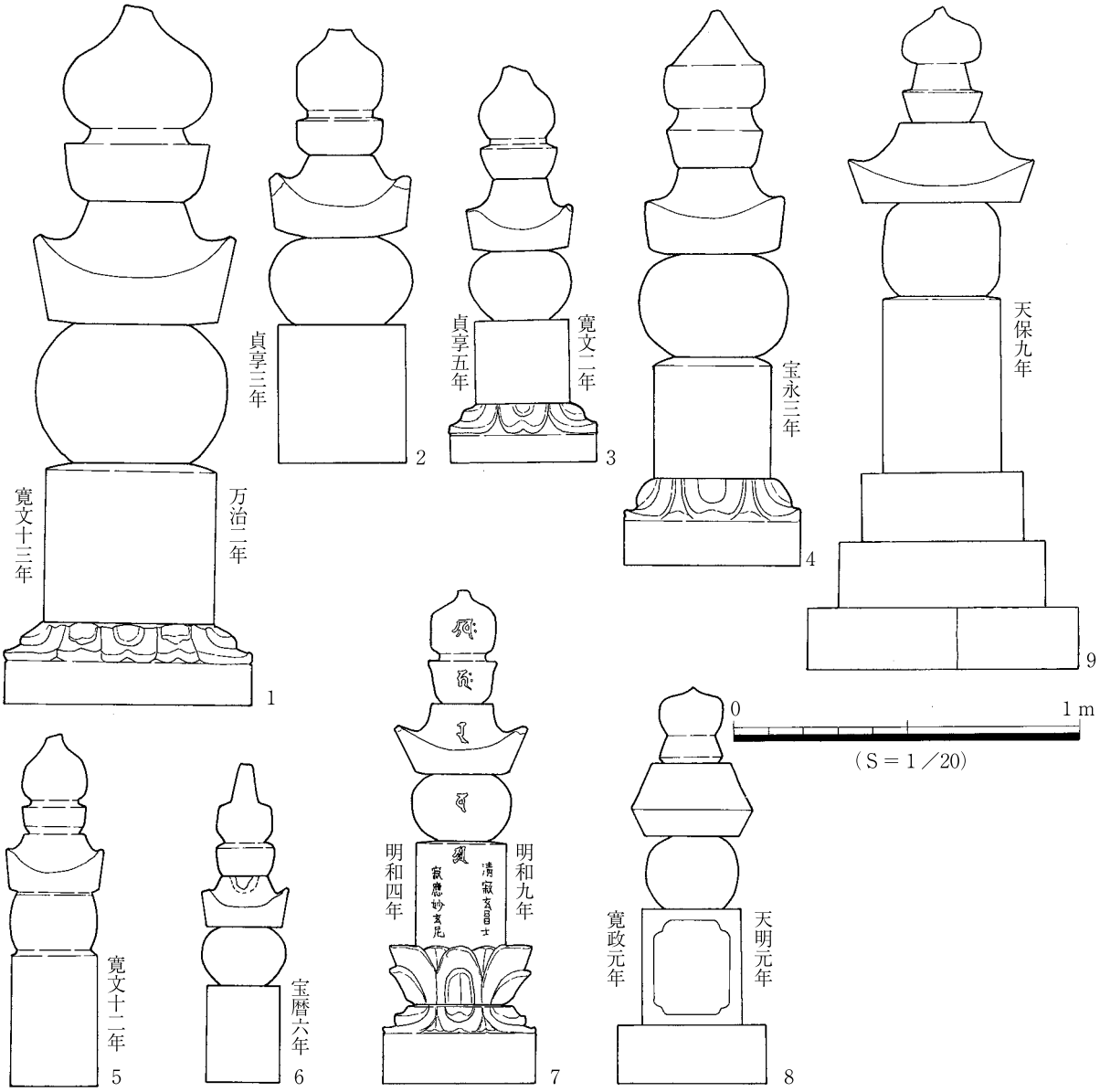


図38　花崗岩製の五輪塔

職墓と同様に18世紀前半までは豊島型五輪塔が用いられ、18世紀中頃からは砂岩製の宝篋印塔が用いられ、19世紀からは砂岩製の墓標が用いられたことが指摘できる。

このように両墓地からは18世紀前半に豊島型五輪塔から花崗岩或いは砂岩の墓石への変化が認められる。なお、極楽寺墓地では住職墓以外の墓石では17世紀後葉から花崗岩製の墓標は確認されることから、しばらくは豊島型五輪塔との共存が確認される。そして、18世紀からの花崗岩製の墓標の普及は豊島型五輪塔を墓石として用いるといった伝統性を保持していた住職墓の墓石の変化をもたらしたものと考えたい。18世紀前半から中頃にかけては花崗岩製の墓標の普及により豊島型五輪塔はマイナーな存在となり、18世紀中頃以降は蓮井家墓地に認められる花崗岩よりも安価な砂岩の普及により豊島型五輪塔の島外での造立は終焉を迎える。

Ⅳ期

形態的独自性を失い、造立は豊島内にほぼ限定される。前者の形態変化の背景には花崗岩製の五輪塔自体の形態変化とその豊島型五輪塔への影響が指摘できる。17世紀段階の事例である図36－１と19世紀段階の事例である図36－７を比較すると、19世紀段階の五輪塔は17世紀段階からの変化として①火輪において軒口の傾斜がつよくなり、②水輪において横幅に対する高さの割合が小さくなり、扁平化が顕著になる、③風輪の上端部が外反する、④地輪の縦長化、⑤台石として反花と請花が認められるようになる。17世紀の五輪塔からの以上の変遷は18世紀中頃から後葉にかけて認められ、19世紀に普及する。

Ⅳ期の豊島型五輪塔はこうした花崗岩製の五輪塔における変化の中でその影響を強く受け、空風輪の別石や特徴ある火輪の形態は消滅し、一部に内部の空洞と軒隅の突起が名残として認められるのみとなる。

５．豊島型五輪塔の歴史的意義と今後の課題

⑴　歴史的意義

本稿のまとめとして豊島型五輪塔の歴史的意義を墓制・墓石史から考える。まず、造立時期は17世紀初頭から19世紀であるが、最盛期は17世紀であることが指摘できる。この17世紀という時期は墓標の出現期であり、墓制史において重要な画期である。一般的に墓標の出現・普及時期は我が国における斉一的な現象であり、香川県内の様相は全国的な流れの中で位置付けることができる。

一方、中世段階における香川県は墓石として凝灰岩が用いられ、五輪塔を主体とした地域であることが指摘できる。これは、花崗岩を主体的に用いた畿内地域や、板碑や自然石塔婆の認められる徳島県・高知県とも地域性として一線を画することができる。こうした香川県内の特質は中世前半から確認でき、中世後半まで一貫して認められる現象であり、豊島型五輪塔も中世香川の伝統の中で凝灰岩である豊島石を用いたことが指摘できる。そして、続く17世紀中頃からの墓標の出現は香川県内で初めての花崗岩を用いた墓石の出現であり、上述したようにそれは全国的な流れの中で位置付けられる。つまり、豊島型五輪塔とは中世以来の凝灰岩を用いた香川県内の伝統性の中でその最終期に位置付けられ、凝灰岩の使用を中世的様相、花崗岩の使用を近世的様相として捉えるならば、中世的様相の残存として指摘できる。

次に墓制史として墓域（墓地）との関わりをみると、豊島型五輪塔はその多くが現代墓地の中に造立されている。一方、中世五輪塔は現代墓地の中にも認められるものの、同様に現在では墓地機

能を失っている場所に多く確認できる。また、高松市神内家墓地では中世段階の墓域と近世以降では墓域を違えており、豊島型五輪塔は近世以降の墓域の中に確認される。さらに、二川・龍満家墓地では豊島型五輪塔を中心として近世墓標が展開しており、以上からは豊島型五輪塔が近世墓地の形成と関わりながら造立されることが指摘できる。

このように豊島型五輪塔は中世的性格を有しながらも近世的性格の萌芽も認められることから、中世から近世の過渡期に展開した五輪塔として位置付けることができる。そして、中世五輪塔との相違点は法量の大型化であり、大型化の背景には五輪塔が個人或いは集団のシンボルとして展開する墓観念の変化が想定され、その発展がより刻銘の重視された墓標の出現に展開していくことを指摘できる。

⑵　今後の課題

今後の課題として第１に岡山県を含めた豊島型五輪塔の分布域を把握しながら歴史的な展開を確認する必要がある。他県において中世的様相からの展開として豊島型五輪塔がどのように位置付けられるかを確認することは重要である。

第２としては、豊島型五輪塔を含めた豊島石製の石造物の展開を把握する必要がある。例えば、香川県内には「ラントウ」と呼称される家形をした墓石が認められ、香川町内海家墓地には宝永年

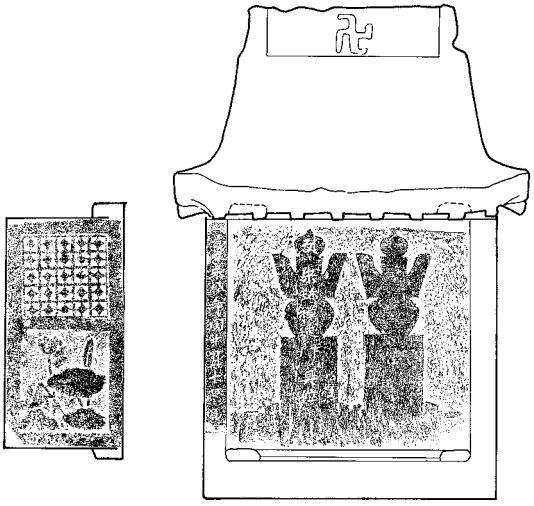
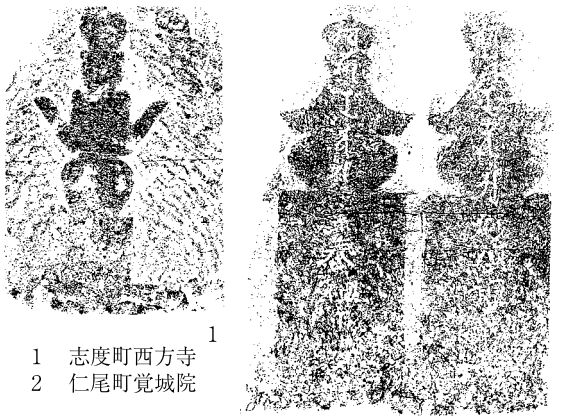
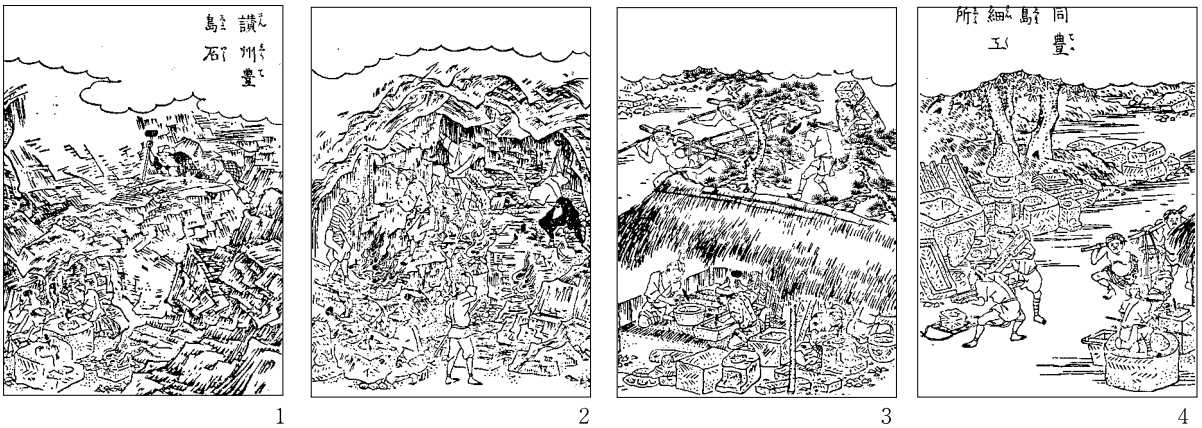


図39　ラントウ（1／20）



1　志度町西方寺
2　仁尾町覚城院

図40　ラントウに刻された豊島型五輪塔（1／10）



1　2　3　4

図41　豊島石石工集団（日本山海名産名物図会）　　1・2 ･･･ 讃州豊島石　　3・4 ･･･ 豊島細工所

間、財田町伊舎那院には元禄年間、仁尾町覚城院墓地では宝永年間の刻字が確認され、多くが17世紀後葉から18世紀初頭の年号である。特に大型の「ラントウ」は香川県西部地域に多く確認され、Ⅰ期段階に希薄であった豊島型五輪塔との関わりが注目される。また、「ラントウ」の奥壁には豊島型五輪塔を刻した例が認められるが、その多くはⅡ期からⅣ期の形態を呈していることから、造立の時期的な関わりについて今後の課題として理解していかなければならない。

ところで、寛政11年（1799）刊行の「日本山海名産名物図会」には豊島石が紹介されているが、文中では豊島石の製品として「水筒、水走、火炉、一つへっついなどの類にて格別大いなる物はなし」と記載されており、豊島型五輪塔等の墓石については触れられていない。寛政11年は豊島型五輪塔のⅣ期であり、形態的独自性と豊島外への搬出が終焉した時期である。よって、墓石の製造・搬出の衰退と日常製品を中心とするその他の製品の製作に関する時期的な関係について明らかにし、豊島石石工集団の生産やその体制の変遷を把握することが課題である。

本稿を成すに当たり以下の方々にお世話になりました。感謝の意を表します。
大内町與田寺、海邊博史、川畑聰、木下晴一、高松市弘憲寺、高松市法泉寺、武井美和、志度町志度寺、志度町西方寺、善通寺市曼荼羅寺、長尾町極楽寺、仁尾町金光寺、土庄町眼妙寺、花崎光弘、藤井雄三、美山幸春、三好宏、山西仁、吉田重幸、引田町釈善坊（五十音順、敬称略）

また、豊島石を含めた香川県内の石造物に用いられた凝灰岩類の検討は柏徹哉氏との共同研究に負うものである。その総合的な成果は別稿にて提示したい。

なお、本稿中の志度町・寒川町・長尾町・大川町・津田町は、現在さぬき市合併前の旧町名を用いている。

＜註＞

1　豊島型五輪塔は著者が『香川考古８号』で提唱した名称である。

2　この五輪塔は空風輪や水輪、台石も豊島型五輪塔には認められない属性を有し、19世紀五輪塔に類似することから、火輪以外は後の製作が推測され、従って、地輪に認められる花頭形の刳り抜きも時期的に下る可能性が高い。

3　刻銘は17世紀後半であるが、空輪・水輪の形態からは18世紀に製作された可能性もある。

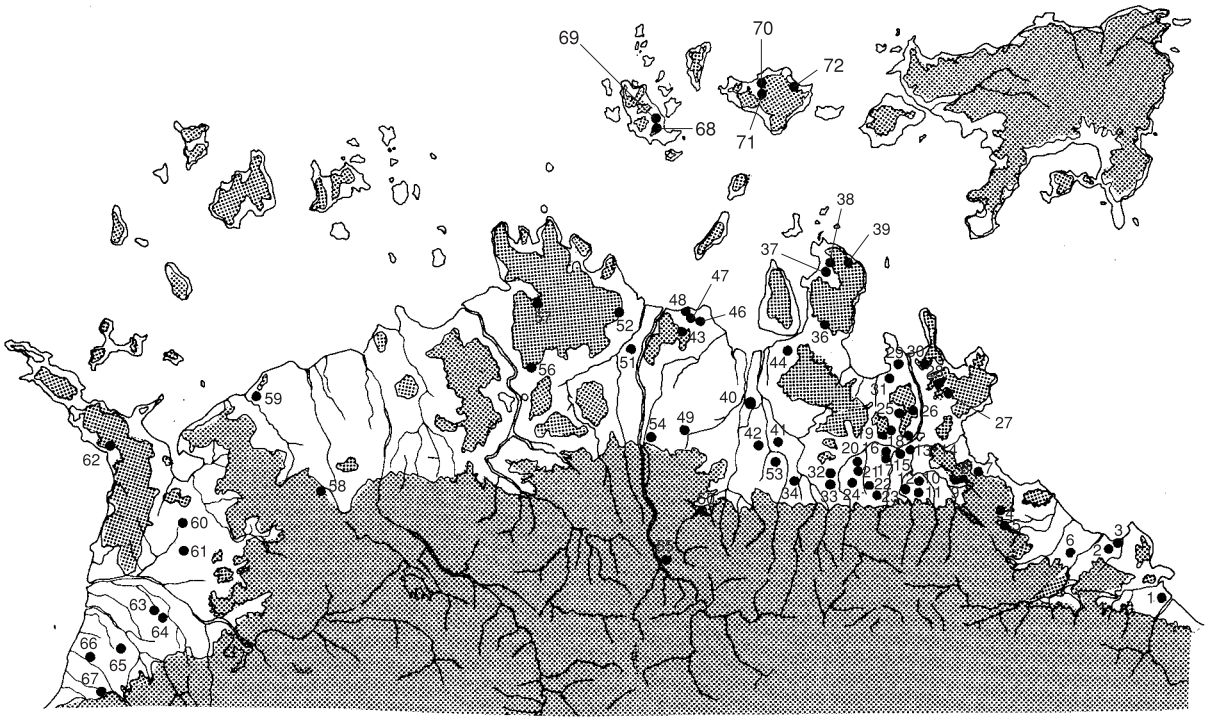
4　空輪と風輪を別石にするのは弥谷・天霧山の石材を用いた五輪塔にも多く確認される一方、火山石等香川県東部地域の五輪塔では少ないことから、地域性として香川県西部地域の特質として位置付けられる可能性がある。

5　剣御山弥谷寺略縁起に『武将生駒氏、当国を鎮ずる時、茲廃絶を見て悲願に勝ず、四隣の山峰を界て、当寺の進退とし玉ひ、住侶別名再興の願を企てより以来、吾先師に至て中興漸成といへども、住古に及ぶ事能はず』（香川叢書 第一）

6　金毘羅宮墓地には各部ばらばらの状態の碑殿型五輪塔が認められるが、火輪、水輪、地輪は空洞にはなっていない。

7　寒川町教育委員会　1985『寒川町史』を参照にした。

＜参考文献＞
香川県　1989「四、石材」『香川県史 第四巻 近世Ⅱ』
香川県　1939「剣御山弥谷寺略縁起」『香川叢書 第一』
香川県教育委員会　1996『香川の文化財』
川瀬潔　1995『キリシタン遺物と豊島石』
財田町誌編纂委員会　1992『財田町誌』
高橋克夫　1987「石の話―讃岐を中心として―」『香川の歴史』第８号
国遠一夫　1979「長尾町の白粉石の石仏（二）」『ふるさと長尾』第２号
国遠一夫　1981「豊島石について」『郷土研究ＸＩ』
琴平町史刊行会　1970『琴平町史』
高瀬町誌編纂委員会　1975『高瀬町誌』
高松市史編纂室　1964『新修 高松市史Ⅰ』
千葉徳爾註解　1970『日本山海名産名所図会（1799年刊行）』
徳島文理大学比較文化研究所　1986『豊島の民俗』比較文化調査報告
土庄町誌編纂委員会『土庄町誌』
豊中町教育委員会　1991『豊中町の文化財』
直島町史編纂委員会　1990『直島町史』
長尾町史編纂委員会　1986『改訂 長尾町史 上・下巻』
中山城山（青井常太郎訳）　1937『復刻讃岐叢書 第一 国譚全讃史』
仁尾町誌編さん委員会　1984『仁尾町誌』



豊島型五輪塔の分布

松浦正一　1958「生駒親正夫妻墓所」『香川県文化財調査報告 第五』
松田朝由　2001「生駒家当主の墓にみる五輪塔の変遷」『香川考古 第８号』香川考古刊行会
松田朝由　2002（予定）「近世墓標からみた人名墓の特質と歴史的展開」『摂河泉とその周辺の考古学』
三野町誌編纂委員会　1980『三野町誌』
牟礼町史編纂委員会　1972『牟礼町史』
森章　1996「淡路島の凝灰岩石造物」『史迹と美術』 666号
森章　1997「四国の五輪塔の系譜(火山石五輪塔編)」『史迹と美術』 679号

＜豊島型五輪塔について記載されている文献＞

岩田実太郎　1974『庵治町史』 209・213頁
大内町文化財保護協会　1980『文化財おおち 第９号』 29・71頁
大内町文化財保護協会　1981『文化財おおち 第10号』 16・28頁
大野原町　2000『ふるさとの石の文化―仏教関係等篇―』 31・74頁
香川県文化財保護協会　1986『香川の文化財＜市町編＞』 161頁
香川町誌編纂委員会　1933『香川町誌』 126頁
寒川町史編纂委員会　1985『寒川町史』 298・300項
多肥郷土史編纂委員会　1981『多肥郷土史』 204頁
長尾町史編纂委員会　1986『改訂 長尾町史 上巻』 323・367項
牟礼町文化財保護協会　2001『牟礼町の石仏―ふるさとの語りべ―』 135頁
引田町史編纂委員会『引田町史』 631項
古高松郷土誌編纂委員会　1977『古高松郷土誌』 585頁

番号	名　称	所在地	時期	火輪分類	空輪分類	空洞(火輪)	空洞(水輪)	空洞(地輪)	空洞(台石)	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	台石高	総高	図版
1	積善坊 1	引田町引田	Ⅱ	KA4	KU2					28	22	33	35	35	24	177	17・8
	積善坊 2	引田町引田	Ⅲ	KA5		×	×				17	24	24	24			
2	向山家墓地 1	白鳥町上湊	Ⅰ	KA2b		×						27		32			
	向山家墓地 2	白鳥町上湊	Ⅱ	KA4		×						34					
	向山家墓地 3	白鳥町上湊	Ⅲ	KA5		○	○	×			17	32	31	30			
	向山家墓地 4	白鳥町上湊	Ⅲ	KA5	KU2	×	×	×	×	19	8	21	28	18	18	112	
	向山家墓地 5	白鳥町上湊	Ⅲ	KA5	KU3	×				35	17	32	26	31	15	156	
	向山家墓地 6	白鳥町上湊	Ⅲ	KA5	KU3	×				26	17	31	26	30	23	153	
	向山家墓地 7	白鳥町上湊	Ⅲ	KA5	KU2	×	×	×		25		26	23	30			
	向山家墓地 8	白鳥町上湊	Ⅲ	KA5		×	×	×				30	24	30			
	向山家墓地 9	白鳥町上湊		KA2−3						28	19	31	38	36	26	178	
3	花崎家	白鳥町湊	Ⅰ古	KA2b		×	×	×		28		23	22	34	16	111	4・5
4	脇屋家墓地 1	大内町土居	Ⅱ	KA4	KU3		○			24	16	29	30	30	26	160	18・2
	脇屋家墓地 2	大内町土居	Ⅱ	KA4	KU3	×	○			35	18	24	27	21	22	147	18・1
	脇屋家墓地 3	大内町土居	Ⅰ新	KA3	KU3	×	○	×		35	22	33	37	36	30	193	15・12
5	東昭寺墓地 1	大内町町田西	Ⅲ	KA5	KU2	×				17	14	22	23	34	20	130	6・6
	東昭寺墓地 2	大内町町田西	Ⅲ	KA5	KU2	×				23	15	24	24	35	13	134	6・7
	東昭寺墓地 3	大内町町田西	Ⅲ	KA5	KU2	×				20	14	29	29	30	10	132	6・8
6	與田寺墓地 1	大内町中筋	Ⅰ古	KA2b		×						27	28	33			4・7
	與田寺墓地 2	大内町中筋	Ⅰ古	KA2b		×						26	33	27	19		4・8
	與田寺墓地 3	大内町中筋	Ⅰ古	KA4		×					14	20	30	28			5・6
7	浄土寺墓地 1	津田町鶴羽	Ⅱ	KA4	KU2					35	24	38	37	37	18	189	
	浄土寺墓地 2	津田町鶴羽	Ⅲ	KA5	KU3	○	○	○		38	16	25	26	26			21・1
	真鍋家墓地 1	津田町鶴羽	Ⅰ新	KA3	KU2	×		○		30		36		36			
	真鍋家墓地 2	津田町鶴羽	Ⅰ新	KA3		○						38	36	32	26		5・7
8	西教寺墓地 1	大川町富田東	Ⅲ	KA5	KU3	○	○	○	○	24	16	18	22	22	15	117	20・4
	西教寺墓地 2	大川町富田東	Ⅰ新	KA3	KU2	×				33		31	31	30			
9	長福寺跡 1	大川町富田東	Ⅲ	KA5							23	27	23	23	22		20・3
	長福寺跡 2	大川町富田東	Ⅰ	KA2		×	○				27	34	36				10・5
	長福寺跡 3	大川町富田東	Ⅲ	KA5	KU2	○	○	○		27		31	32				20・2
10	松家家墓地	大川町産宮通	Ⅱ	KA4			○				23	33	33	34	30		
11	養専寺西側 1	大川町産宮通	Ⅲ	KA5	KU3	○	○			38		28	29	29	19		19・2
	養専寺西側 2	大川町産宮通	Ⅲ	KA5	KU3	○	○			33		29	25	29			19・1
12	富田家墓地 1	大川町富田西	Ⅰ新	KA3	KU2					35	28	41	45	38	11	198	16・7
	富田家墓地 2	大川町富田西	Ⅱ	KA4	KU3					47	27	39	40	37	14	204	17・6
	富田家墓地 3	大川町富田西	Ⅱ	KA4	KU3	○	○	○	○	24	15	29	29	29	10	136	18・8
13	蓮井家墓地 1	寒川町神前	Ⅰ古	KA2b	KU3					47		45	42	46	29		11・11
	蓮井家墓地 2	寒川町神前	Ⅰ新	KA3	KU2					35		33	47	44	29		16・6
	蓮井家墓地 3	寒川町神前	Ⅲ	KA5	KU3			○	○	39		32	39	33	23		20・8
	蓮井家墓地 4	寒川町神前	Ⅱ	KA4	KU2					30		33	32	38	23		17・2
	蓮井家墓地 5	寒川町神前	Ⅲ	KA5	KU1					24		36	42	38	31		20・9
	蓮井家墓地 6	寒川町神前	Ⅰ古	KA1	KU2	×		×		35	47	44	39	21			11・10
	蓮井家墓地 7	寒川町神前	Ⅲ	KA5	KU3	○	○	○	○	45		29	30	30	21		20・10
	蓮井家墓地 8	寒川町神前	Ⅲ	KA5	KU2	○	○	○	○	25	18	30	31	22	7	102	20・7
	蓮井家墓地 9	寒川町神前	Ⅲ	KA5						20	15	29	25	32	12	108	20・5
	蓮井家墓地 10	寒川町神前	Ⅱ	KA4	KU2					30		26	29	35	6		
	蓮井家墓地 11	寒川町神前	Ⅰ		KU1					29			32	31	19		
14	明石家墓地 1	寒川町神前	Ⅰ新	KA3	KU2	×				32		38	33	37	15		15・10
	明石家墓地 2	寒川町神前	Ⅱ	KA4	KU2	×					26	37	40	40	22		17・7
	明石家墓地 3	寒川町神前			KU2		○			45			41	40	17		16・8
	明石家墓地 4	寒川町神前			KU2		○			36			40	35	16		16・4
14	新川庵	寒川町神前	Ⅰ古	KA2b	KU2	×	×	×		32	13	34		26			10・1
15	国方家	寒川町神前	Ⅰ古	KA2	KU1												
16	円光寺墓地 1	長尾町造田	Ⅰ新	KA3	KU2					39	26	44	45	43			16・5
	円光寺墓地 2	長尾町造田	Ⅰ古	KA2b	KU2					39	21	36	40	40			8・8
	円光寺墓地 3	長尾町造田	Ⅰ古	KA1b	KU2					37	23	46	43	43			8・7
	円光寺墓地 4	長尾町造田	Ⅰ古	KA1	KU1					32	23	45	40	38			8・6
	円光寺墓地 5	長尾町造田	Ⅰ古	KA2b	KU1					32	26	44	37	43			8・5
	円光寺墓地 6	長尾町造田	Ⅰ古	KA1b	KU1												8・4
	円光寺墓地 7	長尾町造田	Ⅰ古	KA2a	KU1					22	21	38	36	42			8・3
	円光寺墓地 8	長尾町造田	Ⅰ古	KA1a	KU1					23	19	42	40	43			8・2
	円光寺墓地 9	長尾町造田			KU2		×			30	27		36				8・1
17	伝瀧井神太郎墓	長尾町造田	Ⅰ古	KA2b	KU1					25	30	43	44	40	36	218	12・4
18	木内・柿木家墓地 1	長尾町造田	Ⅱ	KA4	KU2	○	○	○	○	23		28	30	26	20		
	木内・柿木家墓地 2	長尾町造田	Ⅱ	KA4	KU3	○	○	○	○	27		28	30	28	20		
19	北山墓地	長尾町造田	Ⅲ	KA5	KU3	○	○	○	○	36		31	26	26	18		
20	長尾寺 1	長尾町長尾	Ⅰ古	KA2	KU1					26	19	31	36	32			
	長尾寺 2	長尾町長尾	Ⅰ古	KA2	KU1					27		28	33	31	18		
	長尾寺 3	長尾町長尾	Ⅱ	KA4							15	28	31	35	20		
	長尾寺 4	長尾町長尾	Ⅰ新	KA3	KU1					25	18	28	31	31	20		
	長尾寺 5	長尾町長尾	Ⅱ	KA4	KU2					42	29		43	46			
	長尾寺 6	長尾町長尾	Ⅱ	KA4	KU2					26	18	31	28	34	24		
	長尾寺 7	長尾町長尾	Ⅱ	KA4	KU1					34	24	35	34	37	26	164	
	長尾寺 8	長尾町長尾										29	35	33	20		
21	渡辺藤太郎墓 1	長尾町長尾	Ⅱ	KA4	KU2					33	23	35	33	35	30	189	17・5
	渡辺藤太郎墓 2	長尾町長尾	Ⅰ新	KA3	KU1					28	24	33		34	24		15・11
22	極楽寺墓地 1	長尾町長尾東	Ⅰ古	KA2b	KU1	×				20	22	40	34	37	24	177	4・3
	極楽寺墓地 2	長尾町長尾東	Ⅰ古	KA2		×						50	46	42	30		11・3
	極楽寺墓地宗栄墓	長尾町長尾東	Ⅰ新	KA2−3		○	○	○				34	50	48			5・1
	極楽寺墓地 4	長尾町長尾東	Ⅱ	KA4		×	○	○	○		16	35	32	34	22		18・12
	極楽寺墓地 5	長尾町長尾東	Ⅰ古											32	22		
	極楽寺墓地 6	長尾町長尾東	Ⅰ古				○	○	○				37	33	26		11・3

番号	名　称	所在地	時期	火輪分類	空輪分類	空洞(火輪)	空洞(水輪)	空洞(地輪)	空洞(台石)	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	台石高	総高	図版
	極楽寺墓地７	長尾町長尾東	Ⅰ古	KA2b		×						37					11・2
	極楽寺墓地８	長尾町長尾東				○	○					29	27				
	極楽寺墓地９	長尾町長尾東	Ⅰ古	KA2		×						35	31	35	21		11・7
23	間島是行墓	長尾町長尾東	Ⅰ古	KA1b	KU2												
24	宗林寺東墓地	長尾町長尾西	Ⅰ新	KA3	KU2	×				30		33	31	35	20		
25	三宅家墓地１	志度町末	Ⅰ古	KA2	KU1					26	21	32	39	33	27	178	10・8
	三宅家墓地２	志度町末	Ⅱ	KA4	KU1					24	20	34		35	17		18・3
26	池田家墓地１	志度町鴨部	Ⅲ	KA5	KU3	○	○	○		35	32	34	29	31			19・7
	池田家墓地２	志度町鴨部	Ⅱ	KA4	KU1	×	○			26	20	27	34	29	20	158	17・3
	池田家墓地３	志度町鴨部	Ⅱ	KA4	KU1					25		29	33	28	24		17・4
	池田家墓地４	志度町鴨部	Ⅰ新	KA3	KU3	×				30		32	33	31	25		15・2
	池田家墓地５	志度町鴨部	Ⅲ	KA5	KU3	○				34	20	31		32			19・6
27	矢田助右衛門墓１	志度町鴨部			KU1	○	○	○	○	29	17	34	42	32	25	154	5・10
	矢田助右衛門墓２	志度町鴨部	Ⅱ	KA4	KU2	×	○	○	×	26	24	26	30	26	24	132	5・9
	矢田助右衛門墓３	志度町鴨部	Ⅱ	KA4	KU1	×	○			26	20	26	28	25	22	125	6・1
28	西方寺墓地１	志度町鴨部	Ⅰ古	KA2b		×	○				17	37	38	36	24		9・5
	西方寺墓地２	志度町鴨部	Ⅰ新	KA3		×	○					32	40	30	19		15・1
	西方寺墓地３	志度町鴨部	Ⅰ新	KA3		×	○				21	31	33	33	21		15・3
	西方寺墓地４	志度町鴨部	Ⅲ	KA5	KU3	×	○			33	20	31	35	30	21	149	19・6
	西方寺墓地５	志度町鴨部	Ⅰ古	KA2	KU1	×	○	×		27		31	33	32	24		9・7
	西方寺墓地６	志度町鴨部	Ⅰ古	KA2b	KU2	×	×	×		27		32	30	27	21		9・6
	西方寺墓地７	志度町鴨部	Ⅰ新	KA3	KU2	×				38		30	34	29	21		15・4
	西方寺墓地８	志度町鴨部	Ⅰ古	KA2		×	○	×	○			28	32	30	20		9・4
	西方寺墓地９	志度町鴨部	Ⅰ古	KA1b		×	×		○		17	31	27	27	17		9・8
29	志度寺墓地１	志度町志度				×	○	○			21	31	29	27			
	志度寺墓地２	志度町志度	Ⅰ新	KA3		○	○	○			17	34	37				15・8
	志度寺墓地３	志度町志度	Ⅰ古		KU2	×				32		28	33	31			12・2
	志度寺墓地４	志度町志度	Ⅲ	KA5		○	○	○	○		19	31	30	31	18		21・3
	志度寺墓地５	志度町志度				×	○					32	31	28	15		
	志度寺墓地６	志度町志度	Ⅰ古	KA2b	KU1					27	23	41	40	41			12・7
	志度寺墓地７	志度町志度	Ⅰ古	KA2b	KU3	×				39		36	26	36	25		
	志度寺墓地８	志度町志度	Ⅲ	KA5	KU1					27	30	30	36	34	22	179	21・5
	志度寺墓地９	志度町志度	Ⅰ新	KA3		×					21	34	39	36			15・7
	志度寺墓地10	志度町志度	Ⅰ新	KA3	KU1	×	○	○	○	28		30	40	29	21		
30	光蓮寺墓地	志度町志度	Ⅰ新	KA3	KU1	×				26		33	32	28	17		5・2
31	東林寺墓地	志度町志度	Ⅲ	KA5	KU3	○				40		31		30			
32	専修寺墓地１	三木町中井戸	Ⅰ新	KA3		×						31	38	34	25		
	専修寺墓地２	三木町中井戸	Ⅳ		KU4												
33	浄土寺墓地１	三木町高木	Ⅰ古	KU2	KU1	×				23		35	36	32			
	浄土寺墓地２	三木町高木	Ⅰ新	KA3							17	31		34			4・8
	浄土寺墓地３	三木町高木									19		33				
34	熊山墓地１	三木町氷上	Ⅰ新	KA3	KU1					27		31	38				
35	妙徳寺墓地	三木町平木				○	○			27(空･風)		31	36	32	18	144	
36	中村宗ト墓	牟礼町宮の下	Ⅰ古	KA2b	KU1	×				22		34	29	31			4・2
37	道源堂墓地	庵治町新開	Ⅰ古	KA2b		×					20	30	35	31			10・3
38	願成寺墓地	庵治町	Ⅱ	KA4	KU2	×				28		29	33	32			18・7
39	伝脇屋義清墓	庵治町鎌野	Ⅳ	KA6	KU4	×	×	×	×	32	13	21	23	45	52	186	22・2
40		高松市亀田南町	Ⅰ新	KA3	KU2	×	×			26	12	22	26				
41	下田井	高松市下田井町	Ⅰ古			×	×					40	38	37			
42	西蓮寺関係墓地	高松市多肥町	Ⅰ古	KA2		×	×				12	26	25	19	18		
43	姥ヶ池墓地１	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU2					27	18	26	34	35			13・3
	姥ヶ池墓地２	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU2					26	24	34	40	41	23	188	14・5
	姥ヶ池墓地３	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU1					28	19	36	41	37	27	188	14・3
	姥ヶ池墓地４	高松市宮脇町	Ⅰ古	KA2b	KU2					34	20	31	31	31	23	170	
	姥ヶ池墓地５	高松市宮脇町								25	10	29	29	31	17	141	13・9
	姥ヶ池墓地６	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU2					32	23	35	33	36			14・7
	姥ヶ池墓地７	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU2					42	30	38	42	37	26	215	14・3
	姥ヶ池墓地８	高松市宮脇町	Ⅰ古	KA2b	KU1					28	24	35	38	34			11・6
	姥ヶ池墓地９	高松市宮脇町	Ⅰ古	KA2b	KU1					25	19	37	33	33			11・9
	姥ヶ池墓地10	高松市宮脇町	Ⅰ古	KA2b	KU1	×				16	16	32	33	33			11・5
	姥ヶ池墓地11	高松市宮脇町	Ⅱ	KA4	KU2					34	21	32	33	33	20	173	18・10
	姥ヶ池墓地12	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU1		○			23	17	37	29	36	28	170	14・1
	姥ヶ池墓地13	高松市宮脇町	Ⅰ古	KA1b	KU2					47		50	57	52			11・8
	姥ヶ池墓地14	高松市宮脇町	Ⅱ	KA4	KU2					36	22	39	43	42			17・1
	姥ヶ池墓地15	高松市宮脇町	Ⅱ	KA4	KU1							28	29	34			
	姥ヶ池墓地16	高松市宮脇町	Ⅱ	KA4	KU1					32	19		36	32			
	姥ヶ池墓地17	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU1					35	22		43	43	22		
	姥ヶ池墓地18	高松市宮脇町	Ⅱ	KA4	KU2	×	○			28	18	32	34	32	22	166	18・9
	姥ヶ池墓地19	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU2	×				30	23	33	25		30		13・1
	姥ヶ池墓地20	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU2					36		33	37	37	30		15・9
	姥ヶ池墓地21	高松市宮脇町	Ⅰ新	KA3	KU2					34	22	32	36	36	28	188	14・6
	姥ヶ池墓地22	高松市宮脇町	Ⅱ	KA4	KU2	×	○			29	19	33	35	22			18・5
44	喜岡寺墓地１	高松市高松町	Ⅱ	KA4	KU2					28	19	27	36	37			18・4
	喜岡寺墓地２	高松市高松町	Ⅰ古	KA2b	KU1					25	19	35	35	31			10・10
45	一宮寺歴代住職墓	高松市一宮町	Ⅰ古	KA2a							21	34	35	34	16		10・9
46	法泉寺	高松市番町	Ⅰ新	KA3	KU2		○			34	29	40	37	38			14・8
47	日妙寺墓地１	高松市錦町	Ⅱ	KA4	KU1					30	25	29		36	24		
	日妙寺墓地２	高松市錦町	Ⅰ新	KA3	KU2					47		35	43	39			16・2
48	弘憲寺墓地１	高松市錦町	Ⅰ古		KU1					30		35	41	40			
	弘憲寺墓地２	高松市錦町	Ⅰ古		KU1					27		45	43	38			
49	法然寺墓地１	高松市仏生山町	Ⅲ	KA5							24	30	31	33	28		21・3
	法然寺墓地２	高松市仏生山町	Ⅰ古	KA2b	KU2					21	17	30		27	18		12・3

番号	名　称	所在地	時期	火輪分類	空輪分類	空洞(火輪)	空洞(水輪)	空洞(地輪)	空洞(台石)	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	台石高	総高	図版
50	神内家墓地１	高松市西植田町	Ⅱ	KA4	KU2					35	21	32	33	34			4・9
	神内家墓地２	高松市西植田町	Ⅰ古	KA2b	KU1					24	18	29	31	31	18	151	12・6
51	唐人塚１	高松市飯田町	Ⅰ古	KA2	KU2	×	×	×	×	23		27	28		17		9・1
	唐人塚２	高松市飯田町	Ⅰ古	KA2	KU1	×	×	×	×	15		26	28		12		9・2
52	香西寺墓地	高松市香西西町	Ⅰ古	KA2	KU1	×	○	×		18		27	26	26			9・3
53	伝高松頼重墓	高松市小村町	Ⅰ古	KA2b		×	○	×		27	13	30	28	34			10・2
54	二川・龍満家墓地１	香川町久保	Ⅰ古	KA2b	KU1					21	19	27	35	29	21	152	10・7
	二川・龍満家墓地２	香川町久保	Ⅰ古	KA2b	KU1					22	18	28	33	29	16	146	10・6
55	最明寺墓地１	塩江町安原下	Ⅱ	KA4	KU3	×				34	18	29	30	28			5・3
	最明寺墓地２	塩江町安原下	Ⅳ	KA6	KU4					23	13	18	18	32			22・3
56	宮武家１	坂出市加茂町	Ⅰ新	KA3	KU2					39	25	38	43	39	18	202	4・11
	宮武家２	坂出市加茂町	Ⅰ新	KA3	KU1					32	26	39	43	42	18	200	4・12
	宮武家３	坂出市加茂町	Ⅱ		KU2					33	27	43	43	42	23	211	
	宮武家４	坂出市加茂町	Ⅱ	KA5	KU2					40	34	37	43	44	18	216	5・5
57	白峰寺墓地	坂出市白峰山	Ⅰ古	KA2b	KU1					30		30		34			
58	金毘羅宮別当墓	琴平町琴平	Ⅰ古	KA2b	KU2					40	25	36	40	41			10・4
59	多聞院墓地１	多度津町仲ノ町	Ⅳ	KA6	KU4												
	多聞院墓地２	多度津町仲ノ町	Ⅳ	KA6	KU4												
	多聞院墓地３	多度津町仲ノ町	Ⅳ	KA6	KU4												
60	福岡家墓地１	三野町宗吉	Ⅲ	KA5	KU3		○			32	17	29	27				19・9
	福岡家墓地２	三野町宗吉	Ⅲ	KA5	KU3					41	18	30	27	38			19・12
	福岡家墓地３	三野町宗吉	Ⅲ	KA5	KU3	○	○			53	21	31	32	33			19・10
	福岡家墓地４	三野町宗吉	Ⅲ	KA5	KU3	○	○			32	13	32	28	30	20	155	19・11
	福岡家墓地５	三野町宗吉	Ⅲ	KA5							18	36	29	22			19・8
61	柞原院墓地１	高瀬町下勝間	Ⅱ	KA4								29		26	10		
62	覚城院墓地１	仁尾町仁尾	Ⅱ	KA4	KA3	×				36	17	30	33	37	18	171	18・11
	覚城院墓地２	仁尾町仁尾	Ⅱ	KA4			○				23	31	35	35	32		
63	玄海坊１	大野原町中姫	Ⅲ	KA5	KU3					39	19	30	30	29	18	165	20・12
64	巌浄寺墓地１	大野原町萩原	Ⅳ	KA6	KU4					29	26	29	27	31	22	164	
	巌浄寺墓地２	大野原町萩原	Ⅳ							31	29	30	31	35	22	178	
65	池之尻	観音寺市池之尻	Ⅱ	KA4	KU2					25	18	30		30	20		
66	宗林寺墓地	豊浜町和田浜	Ⅰ新	KA3		×						33	33	33	26		
67	国祐寺１	豊浜町和田	Ⅲ	KA5	KU3					32	21	34		32			5・8
	国祐寺２	豊浜町和田	Ⅱ	KA4	KU3	×	×	×		37	22	29	32	34	12	166	
68	高原家墓地１	直島町本村	Ⅰ古	KA1b	KU2					49	33	66	57	57			10・11
	高原家墓地２	直島町本村	Ⅳ	KA6		×	○	×				22	29	24			22・4
	高原家墓地３	直島町本村	Ⅲ	KA5	KU3	×	×	×		35		22	25	26	13		21・2
	高原次利夫人墓	直島町本村	Ⅰ古	KA2b	KU1	×				24	17	32	29	40	20	162	4・1
	高原家墓地５	直島町本村	Ⅲ	KA5	KU3	○	○			30	16	26	25	27			21・2
69	増宥墓	直島町本村	Ⅱ新	KA3	KU1					36	26	35	42	43	32	214	4・10
70	眼妙寺墓地１	土庄町豊島	Ⅳ	KA6	KU4	○	○			28	13	25	27	24	34	151	22・1
	眼妙寺墓地２	土庄町豊島	Ⅳ	KA6	KU4	○	○			24	11	22	20	36			6・9
	眼妙寺墓地３	土庄町豊島	Ⅳ	KA6	KU4	×	×			18		18	17	29			6・13
	眼妙寺墓地４	土庄町豊島								41	17	30	29	32	59	208	6・3
	眼妙寺墓地５	土庄町豊島	Ⅳ	KA6	KU4					42	16	20	27	41	78	224	6・11
	眼妙寺墓地６	土庄町豊島			KU3					50	32	30	31	32	101	276	5・4
	眼妙寺墓地７	土庄町豊島	Ⅲ	KA5		○	○	○				26	25	25			6・12
71	明光寺墓地１	土庄町豊島	Ⅳ	KA6	KU4					17	11	21	15	32			6・14
	明光寺墓地２	土庄町豊島	Ⅳ	KA6	KU4	×	×	×	×	20	11	18	15	31	50	145	6・16
	明光寺墓地３	土庄町豊島	Ⅳ	KA6	KU4					21	8	18	12	29	40	128	6・15
72	十輪寺墓地１	土庄町豊島	Ⅰ古	KA1b								36	31	45	40	152	9・9
	十輪寺墓地２	土庄町豊島	Ⅰ古	KA2b	KU1	×				30		35	40	36	27	168	9・10
	十輪寺墓地３	土庄町豊島	Ⅰ古	KA2b	KU1					25	19	36	38	36	26	180	9・11
	十輪寺墓地４	土庄町豊島	Ⅰ古	KA2b	KU1					34	21	32	35	32	25	179	9・12
	十輪寺墓地５	土庄町豊島	Ⅲ	KA5	KU3					41	21	34	33	33	22	184	20・11
	十輪寺墓地６	土庄町豊島	Ⅲ	KA5							12	30	28	38	27		6・4
	十輪寺墓地７	土庄町豊島	Ⅰ新	KA3	KU1					29	21	35	40	36	25	186	14・2
	十輪寺墓地８	土庄町豊島	Ⅲ	KA5		×				26	19	30	26	26	30	157	19・4
	十輪寺墓地９	土庄町豊島	Ⅲ	KA5		×						33	22	29	18		19・3
	十輪寺墓地10	土庄町豊島	Ⅲ	KA5	KU3	×				42	12	29	27	28	38	174	6・10

豊島型五輪塔の搬出と造立背景に関する歴史的検討

松田朝由

豊島の凝灰岩（豊島石）を用いた特異な形態を有する五輪塔が香川県、岡山県で認められる。本稿ではこれを豊島型五輪塔と呼称し、その型式学的変遷から、豊島から県内各地への搬出の歴史的様相と造立背景について香川県内の事例から検討した。

結果、中世において高松を中心に偏在的に分布する豊島石製の五輪塔が、17世紀初頭に生駒家関係の五輪塔の影響を受け、豊島型五輪塔としての形態的特徴を完成させ、県内各地へ広範囲に造立されるようになることが明らかとなった（Ⅰ期）。続く17世紀後葉は、花崗岩製の墓標や五輪塔によりその搬出は縮小し、形態そのものも花崗岩製の五輪塔の影響を受けるようになる（Ⅱ期）。

18世紀もしばらくは搬出され続けるが、その衰退と花崗岩製の五輪塔の影響による形態的独自性の衰退は進行し、18世紀中頃を最後に県内への造立は終焉する（Ⅲ期）。一方、豊島内には19世紀まで造立は継続して認められるが、形態は花崗岩或いは砂岩製の五輪塔と変わらなくなり、火輪の軒隅の形態にわずかにその痕跡を残すのみとなる（Ⅳ期）。

豊島型五輪塔の歴史的な位置づけは、中世における五輪塔を中心とする様相から近世における墓標を中心とする様相に至る過渡的な段階に盛行した石造物であることが指摘できる。

Historical Examination regarding the Carrying out and the Background of the Erecting of the Teshima Style Gorinto (Tombstone made in Five Different Parts Symbolizing the earth, water, Fire, Wind and Air)

By Tomoyoshi Matsuda

In Kagawa and Okayama Prefectures, there are gorintos that have the specific structures and are made of tuff of the Teshima Island (Teshima stone). In this paper, we call them Teshima style gorintos and from a typological point of view examine historical aspects of the carrying out of them from the Teshima Island to every place inside Kagawa Pref. and the background of erecting of them, based on the examples inside Kagawa Pref.

As a result, we were able to cleare the history of gorintos made of the Teshima stone as follows. They unevenly distributed around Takamatsu in the Medieval Period. At the beginning of the 17th century (the first stage), under the influence of gorintos related to the Ikomas, they completed the characteristics of the structure as Toshima style gorintos and became to be erected widely at various places in Kagawa Pref. At the following second half of the 17th century (the second stage), the carrying of them reduced because of grave posts and gorintos made of granite and the shape of them was influenced by gorintos made of granite.

Although Teshima style gorintos continued to be carried out for some time in the 18th century, the carrying out of them was on the decline, and they were declining in the originality of the structure because of the influence of gorintos made of granite. At last, in about the middle of the 18th century (the third stage), they ceased to be erected in Kagawa Pref. On the other hand, it is confirmed that in the Teshima Island gorintos continued to be erected until the 19th century. However, there are no differences in the structure between them and gorintos made of granite or sandstone, and they barely leave the vestige for the form of the corner of the eaves of a part symbolizing the fire (the fourth stage).

It is able to point out as the historic positioning of Teshima style gorintos that they are the stone constructions flourishingly made at the transient stage from the period centering on gorintos in the Medieval Period to the period centering on grave posts at the early modern age.

테시마(豊島)형 五輪塔의 반출과 造立배경에 관한 역사적 검토

마쯔다(松田) 또모유끼(朝由)

테시마(豊島)의 凝灰岩(테시마(豊島)石)을 쓴 특이한 형태를 가진 五輪塔이 카가와(香川)현, 오까야마(岡山)현에서 확인된다. 본 논고에서는 이것을 테시마(豊島)형 五輪塔이라 부르고, 그것의 型式学的 変遷에서, 테시마(豊島)에서 현내각지로 반출된 역사적 양상과 造立배경에 대해 카가와(香川)현내의 사례를 검토하였다.

결과, 중세에 있어서는 타카마쯔(高松)를 중심으로 偏在적으로 분포하는 테시마(豊島)石製의 五輪塔이, 17세기초두에는 이꼬마(生駒)씨가문 관계의 五輪塔의 영향을 받아, 테시마(豊島)형 五輪塔으로서의 형태적 특징을 완성시키고, 현내각지에서 광범위적으로 造立되어진 것이 밝혀졌다 (Ⅰ期). 이어서 17세기말엽은, 화강암제의 묘석이나 五輪塔에 의해 그 반출은 축소하여, 형태 그 자체도 화강암제 五輪塔의 영향을 받게 되었다(Ⅱ期).

18세기도 잠시동안은 반출이 이어지지만, 그 쇠퇴와 화강암제 五輪塔의 영향에 의한 형태적 독자성의 쇠퇴가 진행되어, 18세기중반을 마지막으로 현내에서의 造立은 거의 끝난다(Ⅲ期). 한편, 테시마(豊島)내에는 19세기까지는 造立은 계속해서 인정되지만, 형태는 화강암 혹은 砂岩製의 五輪塔과 같아지고, 火輪의 처마끝 모서리의 형태에 겨우 그 흔적을 남길 뿐이었다(Ⅳ期).

테시마(豊島)형 五輪塔의 역사적 가치는, 중세에 있어서의 五輪塔을 중심으로 하는 양상에서 부터 근세에서의 묘석을 중심으로 하는 양상에 이르는 과도적인 단계에 성행한 석조물이였다고 지적할 수 있다.

關於豐島型五輪塔的搬出與造立背景的歷史性檢討

松田朝由

香川縣、岡山縣有以豐島的凝灰岩〈豐島石〉爲原料的特殊形態五輪塔。在本論文把這五輪塔稱豐島型五輪塔、從它的形式變遷、檢討從豐島搬出至縣內各地的歷史情況與造立背景。

豐島石製五輪塔不均勻的分佈於以高松爲中心的地區、在17世紀初頭受到生駒家關連的影響、完成了豐島型五輪塔的形態特色、在縣內廣大範圍建立〈Ⅰ期〉。接下來在17世紀後期因爲花崗岩型的墓標以及五輪塔的普及、五輪塔的搬出減少、豐島型五輪塔本身也受到花崗岩製作五輪塔的影響〈Ⅱ期〉。

18世紀有一段時間有搬出的存在、豐島型五輪塔的衰退與受到花崗岩製五輪塔影響的形態獨自性的衰退同時進行、18世紀中期縣內的造立幾乎終結〈Ⅲ期〉。而豐島內的豐島型五輪塔造立可確認至到19世紀、但它的形態與花崗岩製五輪塔沒有兩樣、只有在火輪檐角落留下五輪塔型的特色痕跡〈Ⅳ期〉。

從以上檢討、豐島型五輪塔的歷史性定義如下；豐島型五輪塔是盛行於中世以五輪塔爲中心的情況至近世的以墓碑爲中心的情況之過途期的石造物。